Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

698

698-8

12005015815 96

コ-3059
(3)

帝國圖書館藏

伊藤博文公編

雜纂

其參

金子堅太郎
栗野慎一郎
尾佐竹猛
平塚篤 校訂

秘書類纂刊行會發行

帝國圖書館藏

698-8

秘書類纂　雜纂　參

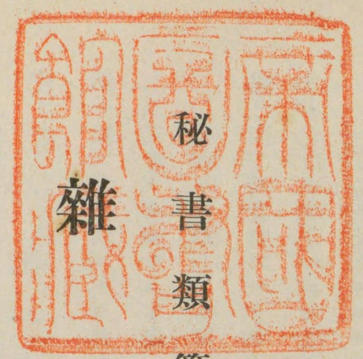
目次

皇室喪儀令……二
皇室服喪令……九
皇室服喪令附則喪服規定……二〇
皇室服喪令第九號ニ因ル服喪規定……三〇
心喪內規……三三
心喪內規上奏案……三四
心喪內規……三五
皇族會議令上奏案……三七
皇族會議令……三八
皇族會議令義解增補……四二
皇族會議令……四三

皇族會議令……四八
請願令中修正……五二
請願內規……五三
請願ニ關スル問答……五五
皇室誕育令草案……六三
皇室誕育令ニ關スル意見書……伊藤博文……六四
皇室成年式令案……六六
第一編　天皇成年式……六七
第二編　皇太子成年式……七四
第三編　親王成年式……八一
第四編　書式……八五
參考……八七
皇室財產令立案要旨……九〇
皇室財產令……九八
皇室財產令目錄及同令……一〇八
皇室財產令修正案（自第一條至第四十七條）……一一六
皇室財產令修正案（自第四十九條至第九十二條）……一二五
皇室財產令義解草案……一三三
大政官職制章程及諸規則……一三七
中仙道筋鐵道建築見込書……ボーイル……一六一
琉球處分提綱……一六四
琉球事件原委……中田敬義……二二二
竹添領事李鴻章應答始末提要……二三二
司法省職制竝ニ事務章程……二三八
國形隆興ノ基本ヲ固スル議……二五八
公債證書及退隱料ニ付テノ覺書……ボアソナード……二六四
憲法草案……井上毅……二六九
爵位制定ニ關スル書類……二九一
爵位令草案ニ付上書……三〇三
明治十一年二月十四日岩倉右府伊藤參議ヘ差出シタル草案……三〇五

位階令……三一〇
行政裁判ノ目的及利害……リヨースレル……三一八
恩典拜辭ノ上表……村田保……三二七
選擧法ニ關スル建議……三二八
司法行政商法三裁判所分離ノ議……三三五
新條約案ニ對スル「ボアソナード」氏ノ反對意見……井上毅……三三七
明治十七年清佛事件記錄……遠藤喜太郎……三四四
佛清兩軍馬尾交戰ノ景況……三四九
松村司令官報告……三五七
東鄕天城艦長報告……三六七
松祖山島竝ニ香港ノ形情報告……東鄕平八郎……三七二
福州景狀……東鄕平八郎……三七四
シヤーフヒーキ碇泊中ノ景狀……東鄕平八郎……三七六
國旗揭揚ニ付照覆……三七九
省城近河黃浦迄ノ砲臺ノ位置圖略……東鄕平八郎……三八三
淡水港ノ景狀ヲ報告……東鄕平八郎……三八九
淡水竝鷄龍ノ景狀ヲ報告ス……東鄕平八郎……三九三
厦門港竝ニマツヲ島景狀……東鄕平八郎……三九七
威海衞ヲ衝キ臺灣ヲ略スベキ方略……伊藤博文……三九九
日清戰爭ニ就キ奏議……伊藤博文……四〇三
御前會議ニ於ケル伊藤博文ノ奏陳要略……四〇六
山縣大將奏議……四一〇

目次終



雜纂

參

『…』ハ朱書

皇室喪儀令

『恭デ按ズルニ大寶ノ劍ハ凡テ凶禮ニ關スル規程ヲ喪葬令ニ收ム今日ノ義文ハ復タ往昔ノ簡易ニ從ヒ難キモノアリ因テ本令ヲ制定シ皇室服紀令ト竝行セシム』

第一章　天皇大喪儀

第一條　天皇崩ズルトキハ内閣總理大臣直ニ之ヲ公告ス。

『恭デ按ズルニ本條ハ天皇崩御ノ場合ニ於ケル公告ノ手續及時期ヲ示ス其ノ内閣總理大臣ニ須ツ所以ハ天子ノ晏駕ハ國ノ大事タルニ由ル以下概ネ之ニ倣フ』

第二條　天皇崩ズルトキハ追號ヲ上ツル其ノ追號ハ内閣總理大臣之ヲ公告ス。

『恭デ按ズルニ天皇ノ稱號ハ之ヲ史ニ徵スルニ謚號アリ追號アリ謚號ニ和稱アリ漢稱アリ追號ニ宮名ヲ以テスルアリ陵名ヲ以テスルアリ又別ニ意義アルモノアリ今之ヲ總稱シテ單ニ追號ト曰フ皇室典範一世一元ノ制ニ因リ元號ヲ以テ之ニ充ツルモ亦妨ナカルベシ』

第三條　天皇崩ズルトキハ廟朝ノ日數ヲ勅定ス其ノ日數ハ宮内大臣之ヲ公告ス。

『恭デ按ズルニ廢朝ハ順德天皇ノ禁祕御抄ニ廢朝者諸司政如レ恒、天子一人不レ臨ニ朝政一ト云フ以テ其ノ定義ト爲スベシ又止ニ音奏警蹕一垂ニ清涼殿御簾一トアリ其ノ例制ヲ窺フニ足ル日數ニ至テハ大約諒闇ニ於テスルヲ五日トシ其ノ餘尊卑親疎ニ依リテ之ヲ遞減ス』

第四條　天皇崩ズルトキハ官廳休務ノ日數ヲ勅定ス其ノ日數ハ内閣總理大臣之ヲ公告ス。

『恭デ按ズルニ官廳休務ハ百司ノ取務ヲ執掌セザルヲ謂フ其ノ稱ハ英照皇太后ノ大喪ニ昉マル蓋往昔廢務ノ遺制ナリ』

第五條　天皇崩ズルトキハ死刑執行停止及囚人服役特免ノ日數ヲ勅定ス。

『恭デ按ズルニ大喪ニ丁リテ恩ヲ推シ惠ヲ施スハ亦古制ニ仍ルナリ』

第六條　天皇崩ズルトキハ歌舞音曲停止ノ日數ヲ勅定ス其ノ日數ハ内閣總理大臣之ヲ公告ス。

『恭デ按ズルニ歌舞音曲停止ハ往昔宴飲作樂ヲ禁ズルノ遺制ナリ』

第七條　大行天皇ノ大喪ニハ天皇喪主ト爲ル但シ事故アルトキハ皇太子皇太孫又ハ親王ヲシテ喪主ノ事ヲ行ハシム。

『恭デ按ズルニ天皇自ラ喪主ト爲リ又ハ皇親ヲシテ之ヲ代攝セシムルハ本令ノ創定ニ係ル其ノ義皇室服紀令天皇親ラ勅ヲ服スルニ同ジ蓋聖孝ヲ申ヘ愼終ノ禮ヲ重ズル所以ナリ』

第八條　大行天皇ノ神柩ハ之ヲ殯宮ニ奉移ス。

『恭デ按ズルニ殯宮ハ古事記ニ「天若日子之父天津國玉神、及其妻子、聞而降來哭悲、乃於其處作喪屋」ト云フ所謂喪屋ハ卽チ殯宮ナリ近代ノ例大行天皇ノ神柩ハ之ヲ清凉殿ニ奉移シ御本所ト稱ス亦喪屋ノ遺制ナリ本條此ニ本ク』

第九條　大行天皇ノ大喪ニハ天皇倚廬ニ御ス。

『恭デ按ズルニ關白一條兼良ガ諒闇記ニ曰「天皇渡御倚廬、先著錫紵、(貲布御束帶)著御內侍以神璽等置廬中、次入御、御膳黑折櫃黑飯(副白飯○中略)御倚廬事、依以日易月之儀、滿十三日還御、而代代例、縮一日還御也」、ト以テ其ノ制ヲ窺フベシ今上代ノ掌故ヲ貽シテ以テ永典トス』

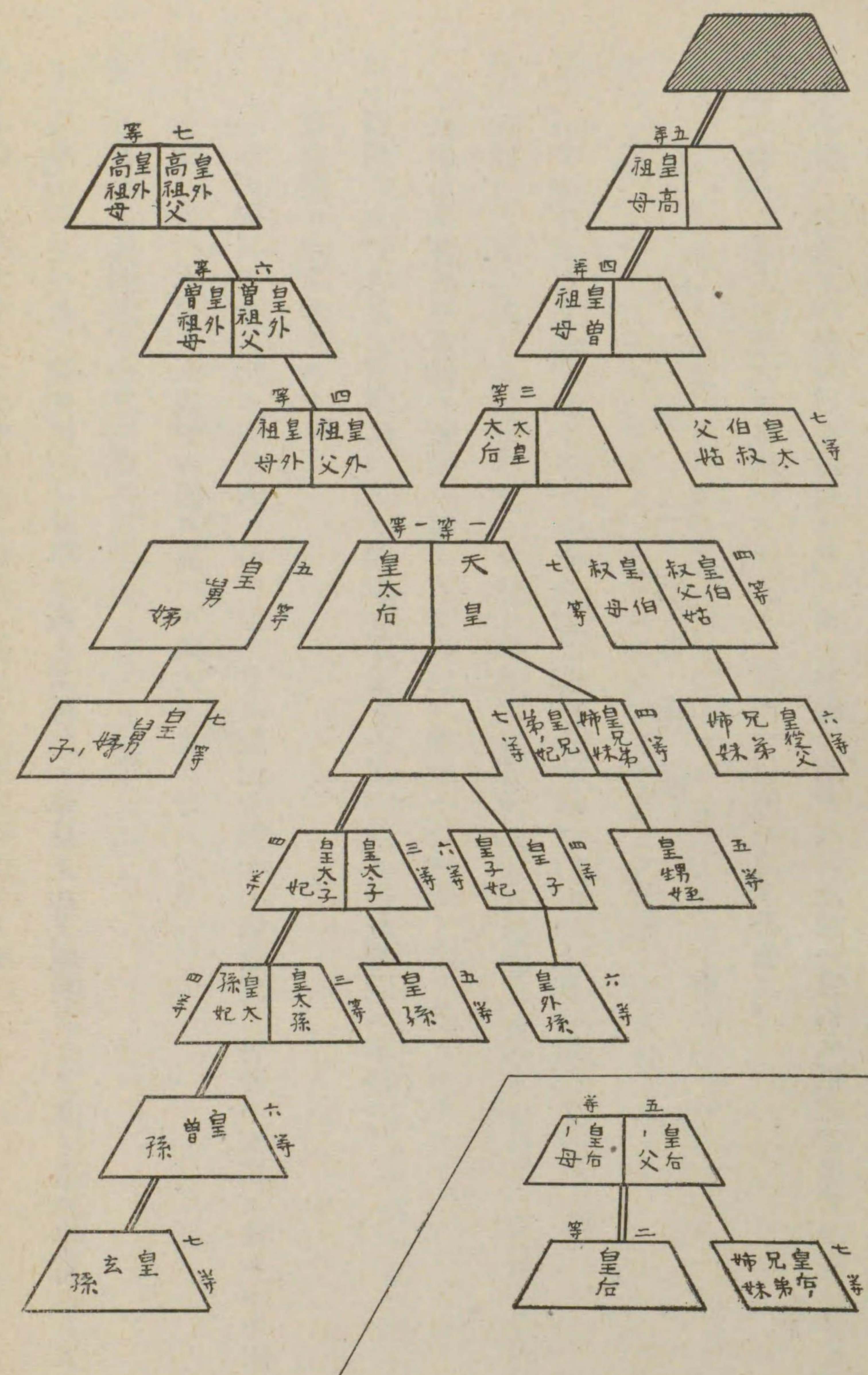
第十條　大行天皇ノ大喪ニハ大喪使ヲ置ク其ノ官制ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム。

『恭デ按ズルニ往古ノ制大喪ニ當リテハ御裝束司前後次第司作殯宮司山作司作路司作方相司養役夫司等ノ職員ヲ置キ總稱シテ御葬司ト謂フ其ノ制頗ル繁ナリ中世以後薄葬ノ遺詔ニ從フト雖尙凶事傳奏凶事奉行及諒闇傳奏諒闇奉行等ノ目アリ大喪使ハ英照皇太后ノ大喪ヨリ昉マル玆ニ著シテ定制トス大行天皇ノ大喪ハ諒闇ノ最重キモノナリ故ニ勅令ヲ以テ其ノ官制ヲ定ム』

第十一條　大行天皇御葬ノ期日及陵所定マリタルトキハ內閣總理大臣之ヲ公告ス。

『恭デ按ズルニ御葬ノ期日及陵所ハ宜ク臣民ヲシテ亟ニ知悉セシムベキ所ナリ因テ本條ヲ規定ス』

宮中喪等圖



第十二條　大行天皇ノ大葬中恒例ノ神事ハ別ニ定ムル所ニ依リ之ヲ行フ。

『恭デ按ズルニ大喪中恒例ノ神事ヲ廢セズ神祇ニ奉仕スルノ職員ヲシテ其ノ事ニ專當セシムルハ古來ノ典例ナリ今之ニ遵フ』

第十三條　大行天皇ノ大喪中吉禮ニ屬スル儀式ハ之ヲ行ハズ。

『恭デ按ズルニ本條モ亦成例ニ沿ル但シ皇室服紀令第十七條除喪ノ場合ハ本條ニ依ルベキ限ニ在ラザルコト知ルベシ』

第十四條　大行天皇ノ御靈代ハ之ヲ權殿ニ奉安シ一周年祭ノ後皇靈殿ニ奉移ス。

『恭デ按ズルニ本條ハ近例ニ據リ之ヲ規定ス權殿ハ時ニ臨ミ之ヲ設クベキナリ』

第十五條　大行天皇ノ大喪訖リタルトキハ御禊及大祓ヲ行フ。

『恭デ按ズルニ喪期訖リタルトキニ於テ御禊及大祓ヲ行フハ上代ノ遺制ナリ』

第二章　三后大喪儀

第十六條　太皇太后皇太后皇后崩スルトキハ宮內大臣直ニ之ヲ公告ス。

第十七條　太皇太后皇太后皇后崩スルトキハ追號ヲ贈ル其ノ追號ハ宮內大臣之ヲ公告ス。

第十八條　皇太后ノ大喪ニハ天皇喪主ト爲ル但シ事故アルトキハ皇太子皇太孫又ハ親王ヲシテ喪主ノ事ヲ行ハシム。

太皇太后及皇后ノ大喪ニハ勅令ヲ以テ皇太子皇太孫又ハ親王ヲ喪主トス但シ太皇太后皇妣タルトキハ前項ノ規定ヲ准用ス。

第十九條　皇太后ノ大喪ニハ天皇倚廬ニ御ス皇妣タル太皇太后ノ大喪亦同ジ。

第二十條　太皇太后皇太后皇后ノ大喪ニハ大喪使ヲ置ク其ノ官制ハ之ヲ勅定ス。

第二十一條　太皇太后皇太后皇后御葬ノ期日及陵所定マリタルトキハ宮內大臣之ヲ公告ス。

第二十二條　太皇太后皇太后皇后ノ大喪ニハ第三條第四條第五條第六條第八條第十二條第十三條第十四條第十五條ノ規定ヲ准用ス。

『恭デ按ズルニ本章ノ規定ハ其ノ義前章各條ニ同ジ三后ノ大喪ハ大行天皇ノ大喪ニ亞ク故ニ其ノ禮稍々約ニ從ヘリ』

第三章　皇族喪儀

第二十三條　皇族薨スルトキハ宮內大臣直ニ之ヲ公告ス。

第二十四條　皇族薨去ノ場合ニハ其ノ男子嫡庶長幼ノ順序ニ依リ喪主ト爲ル但シ喪主事故アルトキハ勅命ヲ以テ他ノ皇族男子ニ喪主ノ事ヲ行ハシム。

男子ナキトキハ勅令ヲ以テ他ノ皇族男子ヲ喪主トス。

第二十五條　皇族薨去ノ場合ニハ喪儀掛ヲ置ク。

第二十六條　皇太子　皇太子妃　皇太孫　皇太孫妃及攝政タル親王　內親王　王　女王薨去ノ場合ニハ第三條第四條第五條第六條第二十一條ノ規定ヲ准用ス但シ七歲未滿ノ殤ニハ第四條第五條ノ規定ヲ准用セズ。

第二十七條　親王　親王妃　內親王薨去ノ場合ニハ第三條第六條ノ規定ヲ准用シ王　王妃　女王薨去ノ場合ニハ第六條ノ規定ヲ准用ス但シ七歲未滿ノ殤ハ此ノ限ニ在ラズ。

『恭テ按ズルニ本章ノ義亦詮解ヲ須斗ス但シ喪儀掛ノ設ハ喪葬令ニ於ケル喪事監護ノ制ニ本キ以テ大喪使ニ准シタリ』

第四章　儀式

第二十八條　天皇大喪儀三后大喪儀及皇族喪儀ノ式ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

『恭デ按ズルニ喪儀ノ式ハ別ニ一則トスルヲ使トス因テ附式ニ讓ル』

皇室服喪令

『恭デ按ズルニ經テ愼ミ遠ヲ追フハ古今ノ通規肇國以來素服擧哀ノ禮史書ニ昭見ス大寶令成ルニ及ビ喪葬ノ典愈々明ニ服紀ノ制大ニ傳ハル而シテ天子ノ喪ハ凡人君卽位、服絕ニ傍期、唯有心喪、會義解ト云フテ以テ原則トス本服二等以上ノ親ノ爲ニハ大約大寶ノ令ニ據ルト雖斂葬ノ儀裝ヲ節シ喪期ノ日數ヲ減スルノ例一再ニ止マラズ議禮ノ臣ヲシテ時ニ臨ミ制ヲ勘ヘ以テ行ハシメラレタリ然レドモ其ノ一定ノ規準ニ至リテハ未ダ闕如ニ屬スルヲ免カレズ之ヲ近例ニ稽フルニ遠系ノ皇族ニ對シ五日ノ宮中喪ヲ發シテ哀ヲ擧ゲ外國ノ皇帝皇后皇太子及皇親ニ對シ二十一日以下六日以上ノ宮中喪ヲ發シテ悼意ヲ表セラル所謂人君旁基ヲ絕ツノ義ハ爰ニ全ク變易セラレタルモノト云ハザルベカラズ近古ニ至リ朝廷ニ假服令アリ幕府ニ服忌令アリ維新ノ後令シテ皇族ハ假服ノ制ニ從ヒ一般臣民ハ幕府ノ式ヲ用ヰシム今大寶令ヲ本トシ此等ノ諸制ヲ參校シ時勢ノ變遷ニ鑒ミテ更革ヲ施シ親等ノ遠近ニ視テ酌量ヲ加ヘ玆ニ本令ヲ制定ス』

第一章　總則

第一條　天皇及皇族ハ本令ノ定ムル所ニ依リ喪ヲ服ス。

『恭デ按ズルニ天皇其ノ親族ノ崩御又ハ薨去ニ當リテ一般皇族ト同ジク喪ヲ服シ給フノ例規ハ互古憲章ノ未ダ曾テ明著セザル所ニシテ本令之ヲ揭グルハ時勢ノ進運ニ伴ヒ愈々倫常ノ道ヲ敦ラスル所以ナリ』

第二條　父、母、夫ノ喪ハ一年トス。

『恭デ按ズルニ本條ヨリ第九條ニ至ルマデハ皇室服紀ノ通則ヲ示ス大寶令ニハ凡服紀者、爲君父母及夫本主一年トアリ假服令服忌令之ニ同ジ是レ服紀ノ最重キモノナリ本條ハ令制ニ遵由シテ敢テ易フルコト莫シ但シ母ノ喪ハ其ノ離婚又ハ再婚ヲ爲シタルニ拘ハラズ亦之ヲ服スルモノトス祖母以上之ニ傚フ』

第三條　祖父母、夫ノ父母、妻ノ喪ハ百五十日トス。

『恭デ按ズルニ令制祖父母ノ服ヲ五月妻及夫ノ父母ノ服ヲ三月トス假服令之ニ准ズ服忌令ハ夫ノ父母ヲ陞スコト一等ニシテ百五十日トセリ茲ニ時宜ヲ酌ミ妻ノ服モ亦之ニ同クス但シ夫ノ母ノ喪ハ其ノ離婚又ハ再婚ヲ爲シタルニ拘ハラズ亦之ヲ服スルモノトス夫ノ祖母及第六條妻ノ母之ニ傚フ』

第四條　曾祖父母、母方祖父母、父ノ兄弟姉妹、兄弟姉妹ノ喪ハ九十日トス。

『恭デ按ズルニ本條ノ喪ハ令制以來變更ナキモノナリ因テ之ニ從フ但シ母方祖父母ノ喪ハ母ノ離婚又ハ再婚ヲ爲シタルニ由リテ之ヲ降殺スルコトナシ以下母ノ兄弟姉妹、母ノ畢父兄弟姉妹母方高祖父母、母方曾祖父母、母ノ兄弟姉妹ノ子之ニ傚フ曾祖父母トハ祖父ノ父母ヲ謂ヒ次條高祖父母トハ曾祖父ノ父ヲ謂ヒ祖母ノ父母、曾祖母ノ父母ハ包含セサルモノトス母方曾祖父母母方高祖父母亦之ニ准ズ』

第五條　高祖父母、嫡母、繼母、夫ノ祖父母、母ノ兄弟姉妹、父ノ異父兄弟姉妹、異父兄弟姉妹、子ノ喪ハ三十日トス。

『恭デ按ズルニ本條ノ嫡母トハ庶子ヨリ父ノ妻ヲ謂ヒ繼母トハ前妻ノ子ヨリ父ノ後妻ヲ謂フ但シ嫡母繼母ハ庶子繼子ノ爲ニ喪ヲ服スル限ニ在ラズ夫ノ祖父母ハ令制及假服令服忌令ノ未ダ及バザル所然レドモ本令已ニ第三條ニ於テ妻ノ服紀ヲ增シテ百五十日トシ又第六條ニ於テ妻ノ父母ヲ加ヘタル而シテ夫ノ祖父母ノ無服トスルハ情理未ダ允ハザルモノアリ故ニ茲ニ之ヲ補フ令制子孫ノ服ヲ三等ニ分チ嫡子ヲ三月トシ家子嫡孫ヲ一月トシ家孫ヲ七日トス假服令服忌令之ニ同ジ蓋家督相續ノ義ヲ重ムセシガ爲ナリ皇室ハ一家ニシテ皇族ニ家督相續ノ事ナシ故ニ嫡子

嫡孫ノ制ヲ取ラズ令制及假服令ニハ父母ノ異父兄弟姉妹ノ爲ニスル喪ヲ載セズ惟々服忌令ニ父母種替リノ兄弟姉妹孫ノ目アリ今之ヲ酌存シ父ノ異父兄弟姉妹ヲ本條ニ補フ次條母ノ異父兄弟姉妹之ニ傚フ』

第六條　父ノ兄弟ノ子、母ノ異父兄弟姉妹、兄弟ノ子、夫ノ嫡母繼母、妻ノ父母ノ喪ハ七日トス。

『恭デ按ズルニ令制及假服令服忌令ニハ妻ノ父母ナシ今本條令第三條ニ於テ妻ノ喪等ヲ陞タルノ義ヲ推シテ夫ノ嫡母、繼母ヲ加フ』

第七條　母方高祖父母、母方曾祖父母、曾孫、玄孫、父ノ姉妹ノ子、姉妹ノ子、異父兄弟姉妹ノ子母ノ兄弟姉妹ノ子、女子ノ子ノ喪ハ五日トス。

『恭デ按ズルニ本條ノ規定ハ大抵令制及假服令ノ未ダ及バザル所ニシテ獨服忌ニ見エタルモノトス本令其ノ喪期ヲ參酌シテ之ヲ揭グルハ敦倫ノ誼ヲ擴メムトナリ曾孫、玄孫トハ男系ノ曾孫、玄孫ヲ謂フ』

第八條　七歳未滿ノ殤ニハ喪ヲ服セズ心喪ニ止ム。

『恭デ按ズルニ令制生レテ三月ヨリ以上七歳ニ至ルヲ無服殤ト稱シ職事官此ノ殤ニ遭フトキハ本服三月ニハ三日ノ假ヲ給シ本服一月ニハ二日、七月ニハ一日ノ假ヲ給ス假服令之ニ同ジ服忌令ニハ七歳未滿ノ殤ニハ父母ハ三日遠慮其ノ他ノ親戚ハ一日遠慮トアリ本條ハ七歳未滿ノ殤ニハ喪ヲ服セスシテ心喪ニ止マル旨ヲ揭ゲ心喪ニ關スル規定ハ別ニ之ヲ定ム但シ年齡ヲ算スルハ現行ノ制ニ從フ

七歳未滿ノ小兒ニシテ其父母若ハ親族ノ喪ニ丁リシ際古來往々紛議アリ服忌令ニハ八歳ニ達セザレバ一切服喪セズ父母ノ喪ハ五十日ノ遠慮親族ノ喪ハ一日ノ遠慮ニ止メタリ（令制ニハ明文ナシ醍醐天皇延喜七年保明太子五歳ニシテ姉ノ喪アルニ遭フ當時明法博士惟宗善經及直本ノ勘文ニ曰、七歳以下不可着親服、令條無之、名例律云、七歳以下、雖有死罪不加刑、又職制律云、可着服入聞喪匿不舉哀者、共徒罪以下也、由是案之死罪之重、不可加刑、何況徒罪以下、無可更論、既無罪者、不可有御服ト後世相沿ヒテ終ニ七歳以下ハ親喪ヲ服セザルノ證トス正德中德川家宣薨去ニ當リテ嗣子猶幼ナリ爲ニ林信篤新井君美等ノ爭議ヲ滋クスルニ至レリ然レドモ鳥羽天皇五歳ニシテ父皇堀河天皇ノ喪ヲ服シ給ヒ六條天皇二歳ニシテ父皇二條天皇ノ諒闇ニ居リ給フ其ノ餘安德天皇四條天皇ノ如キ史書ニ見ユルモノ一ニシテ足ラス七歳未滿ノ童形ニ喪服ナシト云フコトヲ得ザルナリ）本令ハ服喪ニ年齡ヲ限定セズ卽チ七歳未滿ノ小兒ト雖定式ノ喪ヲ服スルコトト知ルベシ特ニ之ガ條規ヲ設ケザルハ大寶令ノ例ニ依ル』

第九條　皇族ニ非ザル親族ノ爲ニハ別ニ定ムルモノノ外喪ヲ服セズ心喪ニ止ム。

『恭デ按ズルニ古者天皇外戚ノ爲ニ喪ヲ服スルノ特例無キニ非ズ又皇族ニ於テ臣籍ニ在ル戚屬

ノ爲ニ喪ヲ服スルノ例アリト雖今之ヲ取ラザルハ愼ヲ名分ニ致スニ在リ』

第十條　二樣ノ親族關係アルトキハ喪ハ其ノ重キニ從フ。

『恭デ按ズルニ本條ノ場合ハ父ノ兄弟姉妹ノ子ニシテ妻タリ母ノ兄弟姉妹ノ子ニシテ夫タル者夫又ハ妻ノ喪ヲ服スルガ如キ卽チ是ナリ』

第十一條　兩喪重複スルトキハ重複ノ間其ノ重キニ從フ。

『恭デ按ズルニ本條ノ場合ハ或ハ兩喪踵起シテ其ノ輕重同ジカラズ或ハ一喪將ニ終ラムトシテ又一喪ニ遭ヘルガ如キ卽チ是ナリ』

第十二條　服喪ノ日數ハ崩御又ハ薨去ノ日ヨリ起算ス。

『恭デ按ズルニ古來隔遠ノ地ニ在リテ父母ノ喪ニ丁ルトキハ多ク聞訃ノ日ヨリ起算ス之ヲ聞忌ト曰フ今之ヲ取ラズ』

第十三條　大喪ニハ皇族其ノ他臣民喪ヲ服ス。

宮中喪ニハ皇族及宮中又ハ皇族ノ殿邸ニ奉仕スル者喪ヲ服ス。

前二項ノ規定ハ神祇ニ奉仕スル職員ニシテ別ニ規定アル者ニハ之ヲ適用セズ。

皇族親族ノ喪ニ丁ルトキハ其ノ殿邸ニ奉仕スル者喪ヲ服ス。

『恭デ按ズルニ大喪ハ國家ノ凶禮タリ故ニ神祇ニ奉仕シテ常ニ祭事ニ與ル者ノ外皇族臣民宜ク皆喪ヲ服スベシ但シ一般臣民服喪ノ細規ニ至リテハ之ヲ本令ニ揭クルノ限ニ在ラズ。

宮中喪及皇族ノ喪ハ大喪ノ場合ト同ジカラズ從テ臣民一般喪ヲ服スベキモノニ非ズト雖宮中喪ニハ皇族及宮中又ハ皇族ノ殿邸ニ奉仕スル者ハ宜ク宸憂ヲ奉體シテ喪ヲ服スベシ皇族ノ殿邸ニ奉仕スル者其ノ皇族ニ於テ親族ノ喪ニ丁ルトキ亦之ニ准ズベキナリ』

第二章　大喪

第十四條　天皇大行天皇太皇太后皇太后皇后ノ喪ニ丁ルトキハ大喪トス。

『恭デ按ズルニ大喪トハ天子居喪ノ最重キモノナリ大行天皇トハ天皇已ニ崩レテ未タ謚號アラザルノ稱ニシテ獨父皇ヲ指シテ言フノミニアラズ又太皇太后皇太后ト云フモ固ヨリ祖后母后ニ限ラザルナリ』

第十五條　天皇ハ第三條第四條第五條第六條第七條第八條ノ規定ニ拘ハラズ太行天皇及皇太后ノ爲ニハ一年ノ喪ヲ服シ太皇太后ノ爲ニハ百五十日ノ喪ヲ服ス但シ太皇太后皇妣タルトキハ一年ノ喪ヲ服ス。

『恭デ按ズルニ本條ノ適用ハ皇太孫繼承ノ場合及支系ヨリ入テ大統ヲ承クル場合等ニ在リ』

第十六條　大行天皇及皇太后ノ爲ニスル大喪ヲ諒闇トス皇妣タル太皇太后ノ爲ニスル大喪亦同ジ。

『恭デ按ズルニ諒闇ノ文字ハ史臣始メテ之ヲ綏靖天皇紀ニ用キタリ其ノ義或ハ喪廬ト解シ或ハ信默ト訓ス要スルニ天子皇考皇妣ノ喪ニ居ルヲ以テ本義トス而シテ皇祖父（後鳥羽天皇ノ其ノ皇祖父後白河天皇ノ大喪ニ於ケル）皇叔父（仁明天皇ノ其ノ皇叔父淳和天皇ノ大喪ニ於ケル）皇兄（淳和天皇ノ其ノ皇兄平城天皇ノ大喪ニ於ケル）皇弟（後櫻町天皇ノ其ノ皇弟桃園天皇ノ大喪ニ於ケル）タル天皇ノ喪ニ丁ルトキ亦之ヲ諒闇ト謂フ蓋天皇一タビ大統ヲ承クルトキハ其ノ先帝先后ニ於ケル義猶親子ニ同ジケレバナリ』

第十七條　大喪中特別ノ事由ノ爲除喪スルハ臨時ノ勅定ニ依ル。

『恭デ按ズルニ本條ハ踐祚ノ式其ノ他特ニ吉禮ニ從ハザルベカラザル場合ノ爲ニ之ヲ規定ス』

第十八條　大喪ニ關スル事項ハ宮內大臣之ヲ公告ス但シ其ノ一般臣民ニ關スルモノハ內閣總理大臣之ヲ公告ス。

『恭デ按ズルニ本條ハ大喪ノ場合ニ於ケル公告ノ手續ヲ定メ宮室ノ典禮ト國家ノ政務トノ區分ヲ明ニス』

第三章　宮中喪

第十九條　天皇喪ニ丁ルトキハ大喪ヲ除クノ外宮中喪トス。

『恭デ按ズルニ本條ハ宮中喪ノ定義ヲ示ス宮中喪ノ稱ハ今代ニ創マル其ノ義自ラ明カナリ』

第二十條　天皇ハ第五條第六條ノ規定ニ拘ハラズ皇太子皇太孫ノ爲ニハ九十日ノ喪ヲ服ス但シ七歲未滿ノ殤ニハ第八條ノ規定ニ拘ハラズ三日ノ喪ヲ服ス。

『恭デ按ズルニ皇太子皇太孫ハ繼體ノ儲貳ニシテ皇室ノ家嗣タリ故ニ第五條第六條第八條ノ規定ニ對シ此ノ特例ヲ設ク』

第二十一條　天皇ハ第六條第七條ノ規定ニ拘ハラズ皇太子妃皇太孫妃ノ爲ニハ三十日ノ喪ヲ服ス。

『恭デ按ズルニ凡テ子孫ノ妻ノ爲ニハ服喪ノ限ニ在ラズ而シテ皇太子妃皇太孫妃ノ爲ニ特例ヲ設クルモノハ其ノ嗣后タルヲ重ムスルナリ』

第二十二條　服喪範圍外ノ皇族ノ爲ニハ臨時勅定ニ依リ特ニ五日以內ノ宮中喪ヲ發スル事アルベシ

『恭デ按ズルニ明治十九年一月幟仁親王ノ爲ニ五日ノ宮中喪ヲ發セラル此猶皇室典範制定以前ノ事ナリ乃チ二十四年朝彥親王ノ薨去以來皆其ノ例ニ從ヘリ故ニ本條ニ於テ服喪範圍外ノ皇族ト雖時ニ此ノ特典アルベキヲ規定ス』

第二十三條　宮中喪ニ關スル事項ハ宮內大臣之ヲ公告ス。

第二十四條　宮中喪ニハ第十七條ノ規定ヲ准用ス。

『恭デ按ズルニ宮中喪ハ皇室ノ凶禮タリ故ニ宮內大臣ノ公告ニ止ム第十七條ノ規定ヲ准用スルハ其ノ事項タルハ猶大喪ノ場合ト大差ナカルベケレバナリ』

第二十五條　外國帝室ノ凶事ニ對シテハ臨時ノ勅定ニ依リ特ニ宮中喪ヲ發スルコトアルベシ。

前項ノ宮中喪ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム。

『恭デ按ズルニ明治十四年以來外國帝室ノ爲二十一日以下ノ宮中喪ヲ發セラレタルコト其ノ例少カラズ而シテ之ヲ發スルハ彼此兩國ノ關係ニ基クモノタリ故ニ臨時ノ勅定ニ依ル』

第四章　喪期區分

第二十六條　一年ノ喪ハ之ヲ三期ニ分ツ第一期第二期各五十日トシ殘ル日數ヲ以テ第三期トス。

第二十七條　百五十日ノ喪ハ之ヲ三期ニ分ツ第一期第二期ハ各三十日トシ第三期ハ九十日トス。

第二十八條　九十日ノ喪ハ之ヲ二期ニ分ツ第一期ハ二十日トシ第二期ハ七十日トス。

第二十九條　三十日ノ喪ハ之ヲ二期ニ分ツ第一期ハ十日トシ第二期ハ二十日トス。

第三十條　七日以下ノ喪ハ期ヲ分タズ。

『恭デ按ズルニ銜恤ノ情ハ宜ク哀毀ニ過グベカラズ以テ之ヲ制スル所ヲ知ラシムベシ故ニ親疎輕重ノ度ヲ考較シテ玆ニ喪期ヲ區分ス』

第五章　喪服

第三十一條　喪服ノ規程ハ別ニ之ヲ定ム

『恭デ按ズルニ喪ノ禮ヲ表章スルハ服裝ノ規程ハ勢繁瑣ニ涉ラザルコトヲ得ズ因テ別ニ之ヲ定ム』

皇室服喪令附則喪服規程

第一條　天皇太皇太后皇太后皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃ノ喪服ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

第二條　大喪宮中喪皇族ノ喪ニ於ケル男子ノ服裝ハ左ノ如シ。

一、大禮服及宮內高等官小禮服

第一期

一　黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ
一　黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ帽ノ飾章ヲ覆フ
一　黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ劍ノ柄ヲ卷ク
一　襟飾及手套白

第二期

一　黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ
一　黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ劍ノ柄ヲ卷ク
一　襟飾及手套白

第三期

一　黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ
一　襟飾及手套白

一　通常禮服

第一期及第二期

一　黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ
一　帽黑黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ之ヲ卷ク
一　襟飾及手套白

第三期

一　黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ
一　襟飾及手套白

一　通常服

第一期及第二期

一　上衣下衣及袴黑（夏季ハ白下衣白袴ヲ用フルモ妨ナシ）
一　黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ

一 帽黑、黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ之ヲ卷ク
一 襟飾及手套黑第二期ハ鼠色ノ手套ヲ用フルモ妨ナシ

第三期

一 黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ
一 襟飾黑

一 陸軍正裝正服禮裝禮服其ノ他帶劔アル正裝正服禮裝

第一期

一 黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ
一 肩章アルモノハ黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ肩章ヲ覆フ
一 黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ劔ノ柄ヲ卷ク

第二期

一 黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ
一 黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ劔ノ柄ヲ卷ク

第三期

一 黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ

一 陸海軍軍裝軍服通常禮裝通常軍服略裝其ノ他帶劔アル常裝略服及宮內官供奉服

第一期第二期及第三期

一 黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ
一 陸海軍ノ下士ハ服制ニ拘ハラズ喪期中黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ卒ハ喪章ヲ附スルニ及バズ
一 臺灣總督府文官林務官等帶劔アル制服

第一期第二期及第三期

一 黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ但シ通常禮服ニ換用スル場合ニ於テハ第一期第二期ニ限リ黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ劔ノ柄ヲ卷キ肩章アルモノハ第一期中黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ肩章ヲ覆フ
一 帶劔ナキ制服

第一期第二期及第三期

一 黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ但シ濶袖ノ制服ニハ左肩ニ黑色ノ布片ノ紗、絽、絹、麻、木綿ヲ附ス
一 宮中奉仕判任官以下ノ制服

第一期第二期及第三期

一　黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ但シ劍ヲ帶フルモノハ第一期第二期ニ限リ黑紗又ハ黑羅紗ヲ以テ劍ノ柄ヲ卷ク

一　前各項外ノ衣服

第一期第二期及第三期

一　和服ノトキハ左肩ニ黑色ノ布片ヲ附ス

一　洋服ノトキハ黑紗又ハ黑羅紗ヲ左腕ニ纏フ

第三條　大喪宮中喪皇族ノ喪ニ於ケル女子ノ服裝ハ左ノ如シ

一　第一種掛袴皇族及高等官同待遇者從六位勳六等以上

第一期及第二期

一　髮　垂髮鬢ヲ引ク

一　元結　白

一　素服　布白

一　袴　布黑椽

一　袴　布柑子色

一　扇　ボンボリ　骨黑地鈍色

一　足袋　白

一　草履　緒柑子色

一　手套傘ヲ用ウルトキハ　黑

一　靴及靴足袋ヲ用ウルトキハ柑子色又ハ黑

但シ第二期ニハ表服ヲ撤ス

第三期

一　髮　垂髮

一　元給　白

一　褂　生絹鈍色冬ハ裏平絹萱草色

一　袴　生絹萱草色

一　扇　ボンボリ　骨黑地鈍色

一　足袋　白

一　草履　緒萱草色

一　手套傘ヲ用ウルトキハ黑又ハ鼠色

一　靴及靴足袋ヲ用ウルトキハ萱草色又ハ黑

一　第二種袿袴判任官、同待遇者正七位勳七等以下

第一期及第二期

一　髮　垂髮鬢ヲ引ク
一　元結　白
一　袿　布白
一　袴　布白
一　扇　ボンボリ　骨黑地鈍色
一　足袋　白
一　草履　緒白
一　手套傘ヲ用ウルトキハ　黑
一　靴及靴足袋ヲ用ウルトキハ　黑

第三期

一　髮　垂髮
一　元結　白
一　袿　平絹鼠色

一　袴　平絹萱草色
一　手套傘ヲ用ウルトキハ黑又ハ鼠色
一　扇、足袋、草履、靴及靴足袋ハ第一期第二期ニ同ジ

一　通常服

第一期

一　服黑地毛織、飾黑縮紗夏季ハ毛織ニ代ヘ黑紗ヲ用ウルモ妨ナシ
一　帽黑飾黑縮紗但シ大喪及一年ノ喪ニハ高縮紗ヲ背後ニ垂ル
一　覆面黑
一　手套、扇、傘及飾具黑
一　靴及靴足袋黑

第二期

一　服黑　地無紋、飾黑
一　帽黑　飾黑
一　覆面黑
一　手套、扇、傘及飾具黑

一　靴及靴足袋黑

但シ大喪ニハ仍第一期ノ服裝ヲ用ウ

第三期

一　服黑　飾黑

一　帽黑　飾黑

一　手套黑又ハ鼠色

一　前各項外ノ衣服

第一期第二期及第三期

一　和服ノトキハ左肩ニ黑色ノ布片ヲ附シ頭飾ヲ撤ス

但シ白無垢ノトキハ布片ヲ附セズ

一　洋服ノトキハ服飾及帽飾黑

第四條　二期ニ分ツ喪ニハ第一期ニ於テ第二期ノ服裝第二期ニ於テ第三期ノ服裝ヲ用ヰ期ヲ分タザル喪ニハ第三期ノ服裝ヲ用ウ但シ女子ハ總テ第三期ノ服裝ヲ用ウルコトヲ得。

第五條　正七位勳七等功六級以下及判任官以下通常服ノトキハ總テ第三期ノ服裝ヲ用ウルコトヲ得。

第六條　判任女官禮式ニ關係セザルトキハ第二種褂袴ヲ用ヰズ第一期第二期ニ於テ柑子色ノ布袴ヲ用ヰ第三期ニ於テ萱草色ノ平絹袴ヲ用ウ。

第七條　心喪ニハ華美ノ服裝飾具ヲ用ヰザルモノトス。

第八條　左ニ掲グル者ハ大喪宮中喪ノ間第二條第三條第四條第五條ニ規定スル服裝ヲ用ウルモノトス但シ高等官同待遇者判任官同待遇者有位有勳有功有爵者ノ妻女褂袴ノトキハ其ノ夫又ハ父ノ身分ニ從ヒ第一種第二種ノ服裝ヲ用ウルモノトス。

一　宮中行在所御在所又ハ行幸行啓ノ場所ヘ祗候若ハ參入スル者及供奉奉送奉迎ヲ爲ス者

一　皇族ノ殿邸旅館又ハ臨席ノ場所ヘ祗候若ハ參入スル者及扈從送迎ヲ爲ス者

第九條　皇族ノ喪ヲ服スル者ハ左ノ場合ニ於テハ喪服ヲ撤スルモノトス

一　宮中行在所又ハ行幸ノ場所ヘ祗候若ハ參入シ又ハ供奉奉送奉迎ヲ爲ストキ

一　皇族ノ喪ヲ服セザル太皇太后皇太后皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃ノ宮殿御在所又ハ行啓ノ場所ヘ祗候若ハ參入シ又ハ供奉奉送奉迎ヲ爲ストキ

第十條　皇族ノ喪ヲ服スル皇族ニ謁見スル者ハ第二條第三條第四條第五條ニ規定スル服裝ヲ用ウルモノトス此ノ場合ニ於テハ第八條但書ヲ准用ス。

第十一條　神宮神職神道各教派管長教師佛道各宗派管長僧侶及一般臣民ノ喪服ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

皇室服喪令第九號ニ因ル服喪規程

第一條　皇族ハ皇族ヨリ華族ニ列セラレ又ハ華族ノ家ヘ入リタル者ノ爲ニハ左ノ喪ヲ服ス。

一、一年ノ喪
　父　母

二、百五十日ノ喪
　祖父母

三、九十日ノ喪
　曾祖父母、母方祖父母、父ノ兄弟姉妹、兄弟姉妹

四、三十日ノ喪
　高祖父母、母ノ兄弟姉妹、子

五、七日ノ喪
　孫

第二條　皇族ハ前條ノ外華族ノ家ニ在ル者ノ爲ニハ左ノ喪ヲ服ス。

一、一年ノ喪
　父　母

二、百五十日ノ喪
　祖父母

三、九十日ノ喪
　曾祖父母、母方祖父母、父ノ兄弟姉妹、兄弟姉妹

第三條　第一條第二條ニ依リ喪ヲ服スベキ者華族養女ナルトキハ養方及實方ノ親族ノ爲前二條ニ定メタル喪ヲ服ス。

第四條　本條規程中母トアルハ實母タル父ノ妻ヲ謂フ。

心喪內規

『…』ハ朱書

第一條　皇室服喪令第八條ノ心喪ハ九十日ノ喪ニ三日三十日ノ喪ニ二日、七日又ハ五日ノ喪ニ一日トス。

『本條ハ大寶令ニ於ケル無服ノ殤及假服令服忌令ニ於ケル七歲未滿ノ殤ノ規定ヲ酌衷シ心喪ノ期日ヲ定ム』

第二條　皇室服喪令第九條ノ心喪ニハ本內規ニ特ニ規定アルモノヲ除クノ外皇室服喪令總則ノ規定ヲ准用ス。

『本條ハ皇族ニ非ザル親族ノ爲ニスル心喪ノ原則ヲ示スモノニシテ本內規ニ於ケル特例ヲ除キ凡ソ皇室服喪令總則ノ規定スル所ハ之ヲ心喪ニ准用ス卽服喪ノ範圍及期間ノミナラズ二樣ノ親族關係、日數ノ起算、皇族及宮中又ハ殿邸奉仕者(宮中喪)神祇奉仕職員、皇族殿邸奉仕者(皇族ノ喪)等ノ規定皆准用ノ限內ニ在リ』

第三條　生母ノ爲ニスル心喪ハ百五十日トス。

『本條ハ舊例(近クハ孝明天皇ノ新待賢門院ニ於ケル如キ是ナリ)ヲ參酌シテ之ヲ定ム』

第四條　繼父ノ爲ニハ心喪ス其ノ期間ハ三十日トス。

『臣籍ニ在ル親族ニシテ繼父ノ關係ヲ有スル者ノ爲ニ本條ヲ規定ス期間ハ大寶令以來ノ制ニ基ク』

第五條　皇室服喪令第九條ニ因ル服喪規程ニ依リ服喪スル場合ヲ除クノ外養方親族ノ爲ニハ心喪ス其ノ範圍及期間ハ實方親族ノ爲ニスルモノニ同ジ。

『本條ハ華族ノ養女ニシテ皇族ニ嫁シタル者皇室服喪令第九條ニ因ル服喪規程第三條ニ依リ服喪スルノ外爾餘ノ養方及實方親族ニ對シテハ仍同一ノ範圍及期間ニ於テ心喪スベキヲ定ム』

第六條　婚嫁ノ約成リタル者ノ爲ニハ心喪ス其ノ期間ハ男子ノ爲ニハ三十日、女子ノ爲ニハ二十日トス。

『本條ハ服忌令「婚儀イマタ相調ハザル內ニテモ祝儀取カハシ候ヘバ夫婦相互ニ定式ノ忌ノ日數可遠慮但シ服無之」ト云フニ基キ之ヲ定ム』

第七條　華族ノ家ニ在ラザル者ノ爲ニハ父母及生母ヲ除クノ外心喪セズ。

『本條ハ華族ノ家ニ在ラザル者ノ爲ニハ心喪セザルヲ本則トス特ニ父母及生母ノ爲ニ心喪スルハ至親ニ敦クスルナリ』

心喪内規上奏案

臣久元　等帝室制度調査ノ大命ヲ恪ミ茲ニ心喪内規ノ案ヲ具シ愼重審議之ヲ査定スルコトヲ得タリ因テ謹デ叡覽ニ供シ恭シク聖裁ヲ仰ク

明治三十六年七月十五日

帝室制度調査局總裁心得伯爵　土　方　久　元　華押

心喪内規

第一條　皇室服喪令第八條ノ心喪ハ九十日ノ喪ニ三日、三十日ノ喪ニ二日、七日又ハ五日ノ喪ニ一日トス。

『本條ハ大寶令ニ於ケル無服ノ殤及假服令服忌令ニ於ケル七歳未滿ノ殤ノ規定ヲ酌衷シ心喪ノ期日ヲ定ム』

第二條　皇室服喪令第九條ノ心喪ニハ本内規ニ特ニ規定アルモノヲ除クノ外皇室服喪令總則ノ規定ヲ准用ス

『本條ハ皇族ニ非ザル親族ノ爲ニスル心喪ノ原則ヲ示スモノニシテ本内規ニ於ケル特例ヲ除キ凡ソ皇室服喪令總則ノ規定スル所ハ之ヲ心喪ニ准用ス卽服喪ノ範圍及期間ノミナラズ二樣ノ親族關係、日數ノ起算、皇族及宮中又ハ殿邸奉仕者（宮中喪）神祇奉仕職員、皇族殿邸奉仕者（皇族ノ喪）等ノ規定皆准用ノ限内ニ在リ』

第三條　生母ノ爲ニスル心喪ハ百五十日トス。

『本條ハ舊例（近クハ孝明天皇ノ新待賢門院ニ於ケル如キ是ナリ）ヲ參酌シテ之ヲ定ム』

第四條　繼父ノ爲ニハ心喪ス其ノ期間ハ三十日トス。

『臣籍ニ在ル親族ニシテ繼父ノ關係ヲ有スル者ノ爲ニ本條ヲ規定ス期間ハ大寶令以來ノ制ニ基ク』

第五條　皇室服喪令第九條ニ因ル服喪規程ニ依リ服喪スル場合ヲ除クノ外養方親族ノ爲ニハ心喪ス其ノ範圍及期間ハ實方親族ノ爲ニスルモノニ同ジ。

『本條ハ華族ノ養女ニシテ皇族ニ嫁シタル者皇室服喪令第九條ニ因ル服喪規程第三條ニ依リ服喪スルノ外爾餘ノ養方及實方親族ニ對シテハ仍同一ノ範圍及期間ニ於テ心喪スベキヲ定ム』

第六條　婚嫁ノ約成リタル者ノ爲ニハ心喪ス其ノ期間ハ男子ノ爲ニハ三十日、女子ノ爲ニハ二十日トス。

『本條ハ服忌令「婚儀イマダ相調ハザル内ニテモ祝儀取カハシ候ヘバ夫婦相互ニ定式ノ忌ノ日數可遠慮但シ服無之」ト云フニ基キ之ヲ定ム』

第七條　華族ノ家ニ在ラザル者ノ爲ニハ父母及生母ヲ除クノ外心喪セズ。

『本條ハ華族ノ家ニ在ラザル者ノ爲ニハ心喪セザルヲ本則トス特ニ父母及生母ノ爲ニ心喪スルハ至親ニ敦クスルナリ』

皇族會議令上奏案

臣博文　前ニ乙夜ノ
覽ニ供セル皇族會議令ニ關シ
御下問ヲ恪ミ愼思熟度シ玆ニ
御下問ノ趣旨ヲ朱書シ奉答ヲ墨書シ謹デ上奏シ恭シク
聖鑒ヲ仰グ

明治三十七年　月　日

帝室制度調査局總裁侯爵　伊藤博文

臣久元　等帝室制度調査ノ大命ヲ恪ミ玆ニ皇族會議令ヲ審議シ其ノ査定スル所ノ案ヲ具シ謹デ
叡覽ニ供シ恭シク
聖拜ヲ仰グ

明治三十四年二月

帝室制度調査局總裁心得伯爵　土方久元　華押

皇族會議令

『…』ハ朱書

第一條　皇族會議ハ勅命ヲ以テ之ヲ召集ス。

『恭デ按ズルニ本條ヨリ第四條ニ至ルマデハ皇族會議召集ノ手續ヲ規定ス而シテ本條ハ其ノ原則タリ但シ攝政在任ノ時ハ攝政召集ノ事ヲ攝行スベキモノトス』

第二條　皇族會議ハ皇室典範第十九條第二項ノ場合ニ於テハ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集ス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第十九條第二項ノ場合ニ於テハ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集スルヲ至當トス因テ本條ヲ規定ス』

第三條　皇族會議ハ皇室典範第二十五條ノ場合ニ於テハ次ニ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集ス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第二十五條ノ場合ニ於テハ當サニ順序ヲ換ヘラルベキ攝政又ハ攝政タルベキ者ニ對シ次ニ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集スルヲ至當トス因テ本條ヲ規定ス』

第四條　前二條ノ場合ニ於テ皇族會議ノ召集ハ成年皇族男子三分ノ一以上又ハ樞密顧問ノ請求ニ依リ之ヲ行フ。

『恭デ按ズルニ皇族典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テハ皇族會議ノ召集ハ特ニ愼重ヲ加ヘザルベカラズ因テ本條ヲ規定ス』

第五條　皇族會議ハ成年皇族男子三分ノ二以上出席スルニ非ザレバ議決ヲ爲スコトヲ得ズ。

『恭デ按ズルニ皇族會議ノ議事ハ重要ノ案件ニ非ザルハ無シ因テ本條ヲ規定ス』

第六條　皇族會議ハ皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テハ會議ヲ召集シタル者ヲ以テ議長トス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テハ直ニ其ノ第五十六條ノ規定ニ依リ難キモノアリ因テ本條ヲ規定ス』

第七條　皇族會議ニ參列スル內大臣樞密院議長宮內大臣司法大臣大審院長ハ議事ニ付意見ヲ陳述スルコトヲ得但シ表決ノ數ニ加ハラズ。

『恭デ按ズルニ本條ハ皇室典範第五十五條ノ參列者ノ權域ヲ示ス』

第八條　皇族會議ノ議事ハ皇室典範第九條第六十二條ノ場合ニ於テハ出席者三分ノ二以上ノ多數ニ依リ其ノ他ノ場合ニ於テハ過半數ニ依リ之ヲ決ス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第九條第六十二條ハ事體特ニ重大ナルモノナリ故ニ出席三分ノ二以上ノ多數ニ依リテ之ヲ決スルモノトス又議長議事ノ統理ヲナストキハ議長ハ皇族會議員ノ一人トシテ表決ノ數ニ加ハルノ外之ガ議決ヲ裁斷スルコトナシ若シ可否同數ナルトキハ之ヲ否決ト認ム』

第九條　皇族會議員ハ皇室典範第九條第二十五條第二十七條第二十九條第五十二條第五十三條ノ場合ニ於テ議事自己ニ關スルトキハ其ノ會議ニ參與スルコトヲ得ズ。

『恭デ按ズルニ本條ハ茲ニ列擧シタル皇室典範ノ各條ノ事故ノ爲ニ會議ヲ開カルヽ場合ニ於テ其ノ事故ニ該當スル皇族ノ忌避ノ例ヲ示ス』

第十條　皇族會議ノ議決ハ議長ヨリ之ヲ上奏スベシ。

『恭デ按ズルニ本條ハ特ニ議長議事ヲ統理スルトキノ爲メニ此ノ規定ヲ設ク天皇親臨議事ヲ統理セラルヽトキハ固ヨリ上奏ヲ須ツコト無シ』

第十一條　皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テ皇族會議發議ヲ爲ストキ又ハ樞密顧問ノ發議ニ依リ議決ヲ爲シタルトキハ皇族會議ノ議長ハ之ヲ樞密院議長ニ通報スベシ。

樞密顧問發議ヲ爲シタル場合ニ於テ皇族會議議決樞密顧問議決ト一致シタルトキハ皇族會議ノ議長ハ之ヲ內閣總理大臣ニ通報スベシ。

『恭デ按ズルニ本條ハ皇族會議ト樞密顧問トノ議ヲ經ベキ場合ニ於テ皇族會議決議ノ後其ノ通リニ行フベキ手續ヲ示ス』

第十二條　皇族會議ニ關スル事務ハ宮內大臣之ヲ管掌シ宮內高等官ヲシテ庶務及議事ノ筆記ヲ擔任セシム。

『恭デ按ズルニ本條ハ皇族會議ノ事務ヲ處理スル順序ヲ定ム』

第十三條　皇族會議ノ記錄ハ圖書寮ニ於テ之ヲ尙藏ス。

『恭デ按ズルニ本條ハ皇族會議ノ記錄ヲ保存スル手續ヲ定ム』

皇族會議令義解增補

皇族會議令第四條義解ノ下ニ左項ヲ增補ス

樞密顧問ノ請求ト云フハ樞密顧問ハ元來諮詢ヲ待テ始テ審議スルモノナルモ獨前二條ノ場合ハ進デ其誠ヲ致シ自カラ發議スルコトアルベキカ故ニ其ノ發議ヲ爲シタル場合ニ於テハ宜ク當然ノ順序トシテ皇族會議ノ召集ヲ請求スベキヲ以テナリ第十一條第二項之ヲ倣フ。

皇族會議令

明治三十八年三月廿五日配付

『恭デ按ズルニ皇族會議ハ皇室典範ニ基キ諸般重要ノ事件ニ付キ諮詢ヲ受クベキモノニシテ皇室典範第十九條第二項及第二十五條ノ場合ニ至リテハ則チ進テ其ノ誠ヲ致シ樞密顧問ト相待テ宮禁ノ大事ヲ議決スベキモノトス其ノ任ノ至重ナル是ノ如シ而シテ典範ハ惟々其ノ大綱ヲ挈ケ議事ノ規則ノ若キハ却テ之ヲ別段ノ規程ニ讓レリ是レ本令ヲ制定セザルベカラザル所以ニシテ將來發布セラルベキ皇室ノ諸規則モ亦皇族會議ノ諮詢ヲ經ベキモノ實ニ指數ニ違アラズ本令ノ制定特ニ趕緊ヲ要スルハ職トシテ是レニ由ルナリ』

第一條　皇族會議ハ勅命ヲ以テ之ヲ召集ス。

『恭デ按ズルニ本條ヨリ第四條ニ至ルマデハ皇族會議召集ノ手續ヲ規定ス而シテ本條ハ其ノ原則タリ但シ攝政在任ノ時ハ攝政召集ノ事ヲ攝政スベキモノトス』

第二條　皇族會議ハ皇室典範第十九條第二項ノ場合ニ於テハ攝政タルベキ順位ニ在ル或年皇族男子之ヲ召集ス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第十九條第二項ノ場合ニ於テハ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集スルヲ至當トス因テ本條ヲ規定ス』

第三條　皇族會議ハ皇室典範第二十五條ノ場合ニ於テハ次ニ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集ス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第二十五條ノ場合ニ於テハ當ニ順序ヲ換ヘラルベキ攝政又ハ攝政タルベキ者ニ對シ次ニ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集スルヲ至當トス因テ本條ヲ規定ス』

第四條　前二條ノ場合ニ於テ皇族會議ノ召集ハ成年皇族男子三分ノ一以上又ハ樞密顧問ノ請求ニ依リ之ヲ行フ。

『恭デ按ズルニ皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テハ皇族會議ノ召集ハ特ニ愼重ヲ加ヘザルベカラズ因テ本條ヲ規定ス。

樞密顧問ノ請求ト云フハ樞密顧問ハ元來諮詢ヲ待テ始テ審議スルモノナルモ獨前二條ノ場合ハ進テ其ノ誠ヲ致シ自ラ發議スルコトアルベキカ故ニ其ノ發議ヲ爲シタル場合ニ於テハ宜ク當然ノ順序トシテ皇族會議ノ召集スベキヲ以テナリ第十一條第二項之ニ倣フ』

第五條　皇族會義ハ皇室典範第九條第六十二條ノ場合ニ於テハ皇族會議員三分ノ二以上、其ノ他ノ場合ニ於テハ半數以上出席スルニ非ザレバ議決ヲ爲スコトヲ得ズ。

『恭デ按ズルニ皇族會議ノ議事中皇室典範第九條第六十二條ニ係ル事項ハ特ニ其ノ重大ナルモノナリ故ニ三分ノ二ヲ以テ定足數トス餘モ亦重要ノ案件ニ非ザレバ無シ因テ定メテ半數トシタリ定足數既ニ定マル則チ或ハ出征留學等ノ原因ニ由リ多數ノ皇族不在ナル場合ニ於テモ未ダ少數ヲ以テ事ヲ議了スルノ簡易ニ就クベカラズ必其ノ歸朝ヲ俟ツベク事緊急ニ屬スル場合ニ在リテハ亟ニ其ノ歸朝ヲ促シテ定足數ニ滿タシメラルベキモノナリ』

第六條　皇族會議ハ皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テハ會議ヲ召集シタル皇族ヲ以テ議長トス但シ會議ヲ召集シタル皇族出席セザルトキハ出席者中上席者ヲ以テ議長トス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テハ直ニ其ノ第五十六條ノ規定ニ依リ難キモノアリ因テ本條ヲ規定ス』

第七條　皇室典範第五十五條ニ依リ皇族會議ニ參列スル者ハ議事ニ就キ意見ヲ陳述スルコトヲ得ルモ表決ノ數ニ加ハラズ。

『恭デ按ズルニ本條ハ皇室典範第五十五條ノ參列者ノ權域ヲ示ス』

第八條　皇族會議ノ議事ハ皇室典範第九條第六十二條ノ場合ニ於テハ出席者三分ノ二以上ノ多數ニ依リ其ノ他ノ場合ニ於テハ過半數ニ依リ之ヲ決ス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第九條第六十二條ノ場合ニ於テ出席者三分ノ二以上ノ多數ニ依リテ之ヲ決スルモノトシタルハ其ノ旨趣第五條ニ同ジ但シ議長ハ皇族會議員ノ一人トシテ表決ノ數ニ加ハルノ外可否同數ノ場合ニ於テハ之ヲ決スルノ權ナシ而シテ其ノ結果當然否決トス』

第九條　皇族會議員ハ自己ノ利害ニ關係スル議事ニ付キ表決ノ數ニ加ハルコトヲ得ズ。

前項利害關係ノ有無ニ付キ疑議アルトキハ皇族會議之ヲ決ス。

『恭デ按ズルニ本條ハ會議ノ事件ガ皇族會議員ノ利害ニ關スル場合ニ於テ其ノ忌避ノ例ヲ示ス本人自ラ回避セザルトキハ他ノ皇族ヨリ動議ヲ起シ皇族會議ノ決議ヲ求ムルコトアルベキナリ』

第十條　皇族會議ノ議決ハ天皇議事ヲ統理セラレザルトキハ議長ヨリ之ヲ上奏スベシ。

『恭デ按ズルニ本條ハ天皇親臨議事ヲ統理セラレザルトキノ爲ニ之ヲ規定ス』

第十一條　皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テ皇族會議ノ議決アリタルトキハ皇族會議ノ議長ハ宮内大臣ヲシテ之ヲ樞密院議長ニ通報セシム。

樞密顧問ノ請求ニ依リ皇族會議ヲ召集シタル場合ニ於テ其ノ議決樞密顧問ノ議決ト一致シタルトキハ皇族會議ノ議長ハ宮内大臣ヲシテ之ヲ内閣總理大臣ニ通報セシム。

『恭デ按ズルニ本條ハ同一ノ事件ニ就キ皇族會議ト樞密顧問トノ議ヲ經ベキ場合ニ於テ皇族會議決議議ノ後其ノ應ニ行フベキ手續ヲ示ス宮内大臣ヲシテ之ヲ通報セシムルハ宮内大臣ハ第十三條ニ依リ皇族會議ニ關スル事務ノ管掌者タレバナリ』

第十二條　皇族會議ノ議ニ付セラレタル議案ニ就テハ宮内大臣ヲシテ說明ノ任ニ當ラシム但シ必要ノ場合ニ於テハ特ニ說明委員ヲ勅選セラルヽコトアルベシ。

『恭デ按ズルニ皇族會議ノ議ニ付セラレタル議案ニ就キ說明セシムベキ者ヲ一定スルハ議事整頓ノ便ヲ圖ルニ在リ專攻ノ意見ヲ徵スル必要アル場合ニ於テハ宮内大臣ノ外特ニ適任ノ者ヲ簡選シテ臨時說明委員ニ勅任セラレムコトヲ期ス』

第十三條　皇族會議ニ關スル事務ハ宮内大臣之ヲ管掌ス

皇族會議ノ議事ハ宮内高等官ヲシテ筆記セシメ宮内大臣之ニ署名ス。

『恭デ按ズルニ本條ハ皇族會議ノ事務管掌者ヲ定ム宮内大臣議事筆記ニ署名スルコトトシタルハ其ノ正確ヲ表明スルニ在リ』

第十四條　皇族會議ノ記錄ハ圖書寮ニ於テ之ヲ尙藏ス。

『恭デ按ズルニ本條ハ皇族會議ノ記錄保存ノ場所ヲ一定スルニ在リ』

皇族會議令

第一條　皇族會議令ハ勅令ヲ以テ之ヲ召集ス。

『恭デ按ズルニ本條ヨリ第四條ニ至ルマデハ皇族會議召集ノ手續ヲ規定ス而シテ本條ハ其ノ原則タリ但シ攝政在任ノ時ハ攝政召集ノ事ヲ攝行スベキモノトス』

第二條　皇族會議ハ皇室典範第十九條第二項ノ場合ニ於テハ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集ス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第十九條第二項ノ場合ニ於テハ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集スルヲ至當トス因テ本條ヲ規定ス』

第三條　皇族會議ハ皇室典範第二十五條ノ場合ニ於テハ次ニ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集ス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第二十五條ノ場合ニ於テハ當サニ順序ヲ換ヘラルベキ攝政又ハ攝政タルベキ者ニ對シ次ニ攝政タルベキ順位ニ在ル成年皇族男子之ヲ召集スルヲ至當トス因テ本條ヲ規定ス』

第四條　前二條ノ場合ニ於テ皇族會議ノ召集ハ成年皇族男子三分ノ一以上又ハ樞密顧問ノ請求ニ依リ之ヲ行フ

『恭デ按ズルニ皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テハ皇族會議ノ召集ハ特ニ愼重ヲ加ヘザルベカラズ因テ本條ヲ規定ス』

第五條　皇族會議ハ成年皇族男子三分ノ二以上出席スルニ非ザレバ議決ヲ爲スコトヲ得ズ。

『恭デ按ズルニ皇族會議ノ議事ハ重要ノ案件ニ非ザルハ無シ因テ本條ヲ規定ス』

第六條　皇族會議ハ皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テハ會議ヲ召集シタル者ヲ以テ議長トス但シ會議ヲ召集シタル者出席セザルトキハ出席者中上席者ヲ以テ議長トス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テハ直ニ其ノ第五十六條ノ規定ニ依リ難キモノアリ因テ本條ヲ規定ス』

第七條　皇族會議ニ參列スル內大臣樞密院議長宮內大臣大審院長ハ議事ニ付意見ヲ陳述スルコトヲ得但シ表決ノ數ニ加ハラズ。

『恭デ按ズルニ本條ハ皇室典範第五十五條ノ參列者ノ權域ヲ示ズ』

第八條　皇族會議ノ議事ハ皇室典範第九條第六十二條ノ場合ニ於テハ出席者三分ノ二以上ノ多數ニ依リ其ノ他ノ場合ニ於テハ過半數ニ依リ之ヲ決ス。

『恭デ按ズルニ皇室典範第九條第六十二條ハ事體特ニ重大ナルモノナリ故ニ出席者三分ノ二以上ノ多數ニ依リテ之ヲ決スルモノトス又議長議事ノ統理ヲナストキハ議長ハ皇族會議員ノ一人トシテ表決ノ數ニ加ハルノ外之ガ議決ヲ裁斷スルコトナシ若シ可否同數ナルトキハ之ヲ否決ト認ム』

第九條　皇族會議員ハ皇室典範第九條第二十五條第二十七條第二十九條第五十二條第五十三條ノ場合ニ於テ議事自己ニ關スルトキハ其ノ會議ニ參與スルコトヲ得ズ。

『恭デ按ズルニ本條ハ玆ニ列擧シタル皇室典範ノ各條ノ事故ノ爲ニ會議ヲ開カル丶場合ニ於テ其ノ事故ニ該當スル皇族ノ忌避ノ例ヲ示ス』

第十條　皇族會議ノ議決ハ議長ヨリ之ヲ上奏スベシ。

『恭デ按ズルニ本條ハ特ニ議長議事ヲ統理スルトキノ爲ニ此ノ規定ヲ設ク天皇親臨議事ヲ統理セラレタルトキハ固ヨリ上奏ヲ須ツコト無シ』

第十一條　皇室典範第十九條第二項第二十五條ノ場合ニ於テ皇族會議發議ヲ爲ストキ又ハ樞密顧問ノ發議ニ依リ議決ヲ爲シタルトキハ皇族會議ノ議長ハ之ヲ樞密院議長ニ通報スベシ。

樞密顧問發議ヲ爲シタル場合ニ於テ皇族會議ノ議決樞密顧問ノ議決ト一致シタルトキハ皇族會議ノ議長ハ之ヲ內閣總理大臣ニ通報スベシ。

『恭デ按ズルニ本條ハ皇族會議ト樞密顧問トノ議ヲ經ベキ場合ニ於テ皇族會議決議ノ後其ノ應サニ行フベキ手續ヲ示ス』

第十二條　皇族會議ニ關スル事務ハ宮內大臣之ヲ管掌シ宮內高等官ヲシテ庶務及議事ノ筆記ヲ擔任セシム。

『恭デ按ズルニ本條ハ皇族會議ノ事務ヲ處理スル順序ヲ定ム』

第十三條　皇族會議ノ記錄ハ圖書寮ニ於テ之ヲ尙藏ス。

『恭デ按ズルニ本會ハ皇族會議ノ記錄ヲ保存スル手續ヲ定ム』

請願令中修正

請願令第十條條文及説明ヲ左ノ如ク定ム。

第十條　請願書ハ封皮ニ請願ノ二字ヲ朱書シ其ノ天皇ニ奉呈スルモノハ侍從長ニ宛テ其ノ他ノモノハ請願ノ事項ニ付キ職權ヲ有スル當該廳ニ宛テ郵便ヲ以テ差出スベシ

恭テ按ズルニ本條ハ請願書提出ノ手續ヲ示シタルナリ其ノ提出ヲ郵便ニ依ルトスルハ他ナシ一ハ請願ノ必文書ヲ以テスベキノ本旨ニ副フコトヲ期シ一ハ當該廳ノ職員ニ面接陳情ヲ迫リ或ハ多數麕至シテ紛擾ヲ釀生スルヲ豫防スルニ在リ其ノ至尊ニ奉呈スルモノハ從來文事秘書官長ニ宛テタル執奏願ヲ添付セシムルヲ例トシタルモ之ヲ必須ノ條件トナスノ要ナク且至尊直達ノ趣旨ニ副フ爲侍從長ニ宛テ提出セシムルヲ穩當ト認メ本條ノ如ク規定シタリ但シ文事秘書官ヲシテ從前ノ如ク其ノ事務ヲ掌理セシムルハ固ヨリ妨ナキナリ。

第十四條　條文及説明ヲ左ノ如ク改ム。

第十四條　天皇ニ奉呈スル請願書ハ侍從長奏聞シ旨ヲ奉シテ之ヲ處理ス。

恭デ按ズルニ本條ハ至尊ニ奉呈スル請願書ヲ處理スルノ手續ヲ定メ以テ請願ノ主意ヲ上聞ニ達スルノ途ヲ明ニスルニ外ナラズ。

請願内規

第一條　宮中ニ於テ樞密院顧問ノ内三人ヲ命ジテ請願書審査委員トシ人民ヨリ上進セル請願書ヲ審査シ處分ノ意見ヲ具ヘシム。

第二條　請願書審査委員ハ請願書ヲ受取ショリ七日以内ニ案ヲ擬シテ裁ヲ仰グベシ。

第三條　請願ノ程式ニ違フコトナクシテ採納セラルベキ者ハ旨ヲ得テ直ニ之ヲ主務ノ閣省ニ送付シ處分セシメ其ノ採納セラレ難キ者ハ其ノ理由ヲ付シテ之ヲ請願者ニ下達ス。

請願書ノ下達セラルヽ者ハ主任ノ顧問官一人以上其ノ達書ニ署名シ書記官之ニ副署スベシ。

第四條　請願書ハ郵便ヲ以テ宮内省ニ差出スベシ自ラ引謁ヲ乞フコトヲ許サズ。

第五條　請願書ハ邦語ヲ以テ之ヲ手記スベシ。

第六條　請願ノ文言ハ相當ノ敬禮ヲ失ハザルベシ。

皇族及帝國議會ニ對シテ不敬ノ文言ヲ用ウルコトヲ得ズ。

第七條　請願書ハ請願者自ラ署名スベシ他人ニ託シテ署名シ又ハ他人ノ姓名ヲ記入スルコトヲ得ズ

但請願者疾病及其ノ他ノ事故ニ依リ自ラ署名スルコト能ハザルノ場合ニ於テ之ヲ保證スベキ官吏

ノ面前ニ於テ他人代テ請願者ノ爲ニ其ノ姓名ヲ記載スル者ハ例外トス。

第八條　法律ヲ以テ認メタル法人ノ權アル團體ヲ除クノ外會社ノ名義ヲ以テ請願スルコトヲ得ズ。

第九條　府縣會其他地方行政會議及自治團體ハ其ノ地方ノ利益ノ外大政ニ係ル請願ヲ呈スルコトヲ得ズ。

第十條　司法及行政裁判所ノ裁判ヲ經タル者ハ請願スルコトヲ許サズ。

第十一條　第四條以下ノ規程ニ違ヒ及請願書ノ載スル所刑法ニ觸ルヽ者ハ理由ヲ付シテ之ヲ却下スベシ。

請願ニ關スル問答

井上　毅

問

請願ノ權利ハ大別シテ三種トナリ行ハル、一ハ君主ニ請願ス、二ハ議院ニ請願ス、三ハ官廳ニ訴願ス是レナリ。

議院ニ當ル請願ハ議院規則ヲ以テ其ノ規程ヲ定メ、官廳ニ當ル訴願ハ勅令ヲ以テ其ノ規程ヲ定ムベシ。

獨リ君主ニ當ル請願ニ至リテハ各國ニ未ダ其ノ制限又ハ程式ヲ定メタルノ成文例アルヲ見ズ。

敢テ問フ君主ニ當ル請願ハ何等ノ制限モ程式モ用ヰズシテ此ノ貴重ナル權利ノ範圍ヲ自由ナラシムベキ乎又ハ相當ノ規程ヲ制定スベキ乎、貴下ノ高意ニ於テ如何ン。

ロエスレル氏
モス　セ氏

請願ニ關スル問答　五五

答

君主ニ當ル請願ハ之レヲ制限セザルヲ例トス。何トナレバ君主ハ此ノ制限ナキモ任意ニ之レガ處分ヲ爲スヲ得ルト、又此ノ請願ハ當人ノ最後ノ方便ト做シ、其ノ苦情ヲ除ク爲メ可及的、之ヲ自由ナラシム可キガ故ナリ。

子ガ知ル所ニ依レバ、英國ニ於テハ止ダ國事又ハ教會事件ニ關スル請願ノ署名人ハ二十名ヲ超ユ可カラズ〔地方廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ格別ナリ〕又十六名以上ヨリ提出スルヲ許サヾルノ規定アルノミ。其ノ他「ウエストミユンステル」皇宮ヨリ一里以内ノ地ニ於テ請願ヲ評決スル爲メ五十名以上、公然集會スルヲ禁止セリ。然レドモ近來ニ至リテハ既ニ此レ等ノ規定ヲ遵奉セズ。

孛國ニ於テ千八百十年二月十四日ノ勅令ニ載スル所ノ規定ハ國王ニ當ル請願ニモ適用スルモノニシテ、國王及ビ官廳ニ當ル請願非常ニ增加シ、且ツ往々不當ニシテ體裁ヲ失スルモノアルヲ防ガン爲メ發布シタルナリ。此ノ勅令ノ要旨ヲ擧グレバ左ノ如シ。

〔一〕 管轄廳ヲ超エテ請願スルヲ許サズ。

〔二〕 裁判所ノ判決ニ對シテハ特赦ノ請願ヲ除ク外一般ニ請願スルヲ許サズ。

〔三〕 凡ソ請願ハ書面ニ認メ關係總員ノ署名ヲ有ス可シ又訴願ニ在リテハ其ノ不服ニ對スル命令書ヲ添付ス可シ。

〔四〕 裁判所若シクハ下級官廳ニ於テ請願ノ旨意ヲ陳述シ之レヲ筆記セシメテ上司ニ廻送セシムルヲ得ベシ。

〔五〕 請願ノ送付ハ郵便ニ依ルヲ例トス又十名以下ノ請願人ナルトキハ自身ニ提出スルヲ許ス事アレドモ是レ專ラ主權者ノ任意ニ在ルモノナルハ豫メ其ノ許可ヲ受ケザル可カラズ。

〔六〕 不當且ツ强請ノ場合ニ於テハ請願ヲ處罰ス。

〔七〕 規定上ノ要件及ビ式樣ニ違フ所ノ請願ハ一般ニ之レヲ放置シ若シクハ却下ス。

請願ハ國王ノ秘密閣ニ於テ審査シ、然ル後之レヲ國王ニ上呈シテ其ノ裁可ヲ請フヲ例トス。佛國ニ於テハ千八百五十二年十二月十八日ノ勅令ニ依ルニ總テ主權者ニ當テタル請願ハ參議院ノ特定委員ニ於テ審査シ委員長ヨリ毎週一回之ヲ皇帝ニ上奏ス。

前記規定ノ如キハ事ノ自然ニ準據スルモノナルガ故、請願權ノ不當ノ制限ト見做スヲ得ズ依リテ之レヲ採用スルモ不可ナル事ナシ。

リヨースレル　再拜

貴問『君主ニ上マツル請願（ペチヽヨン）ニ制限ヲ設ケ又ハ其ノ體裁ニ就キテ規則ヲ定ムルヲ可トスルヤ』ニ對シ左ニ卑見ヲ陳ズ。

請願ニ關スル問答

國家ノ機關ニ就キテ願フノ權〔廣義ノ請願權卽チ訴願ノ權及ビ狹義ノ請願權共ニ此ノ中ニ在リ〕ニシテ、一般ニ法律及ビ憲法ヨリ受クル所ノ制限ハ其ノ君主ニ上マツルノ請願ニモ効力アルコト固ヨリ疑ヲ容レズ卽チ此ノ種ノ制限ハ左ノ如シ。

甲　憲法上裁判所ノ獨立〔尋常裁判幷ニ行政裁判ノ獨立〕ヨリ起ル所ノ制限ニシテ、卽チ司法事件ニ付キテハ裁判ノ延滯又ハ裁判ノ拒絕ニ對シテノミ裁判所外ニ訴願ヲ爲スヲ許サレ効力アル刑事ノ判決ニ對シテハ特赦ノ請願ノミヲ許サルヽ者トス。

乙　官吏ノ請願幷ビニ軍人ノ請願ニ付キテ或ハ若干ノ制限アリ。

丙　多數連合ノ請願ニ對スル規則。

丁　自治體ノ請願權ニ對スル制限就中其ノ自治體ノ事務ニ屬スル事件ニ限リテ請願スルヲ許シ一般ノ國事ニ關スル請願ノ權ヲ許サズ〔此ノ制限ハ甚ダ要用ノ制限トス〕

君主ニ上マツル請願ニ付キ特ニ設ケラル規則ニシテ、其ノ孛國ニ存在スル者ハ今茲ニ詳述セズ。

リヨンネ氏ノ書第四板第二卷第百四十四條第一項幷ニ其ノ所ニ註セル規則ヲ參照アランコトヲ乞フ。

右規則中已ニ其ノ請願ヲ却下セラレ、且ツ其ノ不條理ヲ諭サルヽモ、尙ホ繰返シテ請願スル者所謂隱秘ナル記者、放恣ナル好訟者ニ對スル罰ハ普通ノ性質ヲ有スル者ニシテ、獨リ君主ニ對スル請願ニ限レル者ニアラズ。此クノ如キ規則ヲ設クルノ必要、日本ニモ存在スルヤ否ヤハ予未ダ其ノ國ノ事情ニ通ゼザルヲ以テ判定スル能ハズ。若シ果シテ必要アリトセバ必ズ此ノ規則ニ普通ノ性質ヲ帶有セシメ特ニ君主ヲ保護スル爲メニ設ケタルガ如キ體裁ニ作爲ス可カラズ。隱秘ナル記者及ビ放恣ナル好訟者ハ社會ノ害ナリ、故ニ社會ノ爲メニ之レヲ防ガザル可カラズ。此ノ他尙ホ存スル問題ハ〔第一〕自身親カラ君主ニ願書ヲ捧呈スルノ禁〔第二〕君主ニ捧呈スル願書ノ體裁ニ關スル規則、是レナリ予ハ此ノ二件ニ付キ特ニ規則ヲ定メラルヽヲ非トス。

第一　君主ノ威儀安全靜寧ハ刑法中陛下ニ對スル犯罪ノ條ト君主ヲ圍繞スル軍備及ビ警察上ノ力ヲ以テ充分ニ保護セラレタリ。故ニ請願者アル場合ニ於テ君主ニシテ其ノ請願書ヲ受ケヨト近侍ニ命ズルカ、或ハ君主自身ニ其ノ書面ヲ受クルコトアルノ外ハ、請願者自身ニ其ノ願書ヲ捧呈シ得ル程ニ君主ニ接近スルコト難カル可シ。獨逸ニテハ皇帝出御ノ途中、皇帝ニ捧呈スベキ願書ヲ携フル者ヲ見玉フトキハ、近侍ノ文武官ニ命ジ其ノ願書ヲ取來ラシメ玉ヒシコト屢々之レアリ。皇帝ハ通常無蓋ノ御車ニ召サセラル而シテ曾テ請願者ニシテ其ノ願書ヲ御車中ニ投込ミタル者モ亦之レアリ〔此ノ事曩ニ伯林ニ於テ皇帝ガ露士亞皇帝ヲ最後ニ訪ハセラレシ時ニモアリシ〕而シテ此クノ如ク自身ニ請願ヲ捧呈セシ者ガ罰セラレシトノコトハ予ノ曾テ聞カザル所ナリ。孛國昔日ノ規則ハ警察國ノ時代ニ屬セリ、予ハ今日ノ日本ノ事情ニ於テ此クノ如キ

規則ヲ設ケバ民心ヲ離レシムルノ結果アルベシト信ズ。日本古代ノ皇帝、例之バ孝德天皇ノ如キ人民ヲシテ訴願、請願ヲ爲スコトヲ容易ナラシムル爲メ、種々特別ノ方法ヲ設ケ玉ヒ、此ノ目的ノ爲メニ鐘ヲ懸ケサセ玉ヘシコトアルヲ聞ケリ〔憲法史料〕此ノ方法不思議ニモカヽル大帝ノ時ニ獨逸ニモ設ケラレタリ。今日復タ此クノ如キ方法ノ行ハル可カラザルコト、若シクハ不用ナルコトハ辯ヲ待タズ。然レドモ昔時ニ在リテ此ノ方法ヲ設ケシメシ精神ハ今日更ニ君主ト人民トノ關係ヲ警察上ノ規則ヲ以テ整理スルコトヲ抑制スルニ足ル可シ。蓋シ人民ハ君主ニ於テ父ト保護者トシテ見ル可キ者ナリ。

第二　君主ニ捧呈スベキ願書ノ體裁ニ付キ、特別ノ規則ヲ設クルコトモ予ハ前條ト同一ノ理由ヨリシテ適當ナラズトス。抑々君主ト人民トノ關係ハ法理上ノ性質ヲ帶ブル者ニアラズシテ德義上ノ性質ヲ帶ブベキ者ナリ。法律上ノ規則ニ基カズシテ情義、尊敬、愛慕ニ基クベキ者タリ。然ルニ今君主ニ上マツル書面ニ其ノ體裁ニ付キ一定ノ規則ヲ設クルハ甚ダ此ノ關係ト符合セザルガ如シ。且ツ予ヲ以テ之レヲ見ルニ、君主ニ願書ヲ上マツルニ猶ホ之レヲ一官廳ニ呈出スルガ如ク一定ノ規則ヲ守ラザル可カラズトスルハ、却リテ君主ノ尊嚴ヲ傷クル者ト云フ可シ。蓋シ現今ノ國法學ノ見解ニ依レバ、君主ハ順當ノ訴願廳ニアラズ、然ルニ若シ今前文ノ如キ規則ヲ設ケバ君主ハ則チ恰モ順當ノ訴願廳ナルガ如キノ觀ヲ爲ス可シ。抑モ君主ハ正理ノ最高保護者タリ、人民ノ最後ニ庇隱ヲ求ムル所ナリ。小弱者、困難者ノ救助者タリ。人民ハ君主ニ於テ國家ノ生活ヲ支配スベキ大原則ノ成形スルヲ見ル者ナリ。尋常國家ノ事務ハ君主ノ設定セル官廳ト臣民トノ間ニ生起交錯スル者ニシテ、卽チ此ノ交渉ノ爲メニハ必ズ一定ノ體裁ナカル可カラズ。然レドモ君民ノ關係ハ事務上ノ關係ニアラズ、故ニ事務上ノ交渉ニ適スルガ如キ規則ヲ此ノ關係ニ設クルハ予ノ取ラザル所ナリ。人民ヨリ君主ニ上マツル請願ノ條理アル者ニシテ唯々其ノ體裁ノ規則ニ合ハザルガ爲メニ却下セラレザル可カラズトスル如キハ、君主ノ高大ナル地位ニ適合セズ。其ノ捧呈スベキ書面ノ相當禮式ヲ守ルベキハ勿論ナリト雖モ、是レ等ハ宜ク人民ノ感情ニ任スベシ。而シテ實際果シテ侵犯ノ處爲アルトキハ普通刑法ノ規則ヲ以之ヲ處スルニ充分ナリトス。

卑見ヲ以テスルニ今日本ニ於テ皇帝ニ上マツル書面ニ若干ノ要件ヲ設ケ體裁ヲ定ムルトキハ、一ハ人民ノ從來君主ノ至尊ニ就キテ抱ケル觀念ト相反シ、一ハ却テ請願ヲ君主ニ上マツルノ例ヲ多カラシムルニ至ルベシ。

依リテ予ハ卑見ヲ左ノ如ク總括スベシ。

第一　請願權ニ關スル一般ノ制限ハ君主ニ當テタル請願ニモ効力アリ。

第二　君主ニ上マツル請願ノ爲メニ特ニ規則ヲ設クルハ不可ナリ

第三　特赦ノ請願ニ規則ヲ設クベキヤ否ヤハ治罪法ト連續シテ解決スベキ特別ノ問題トス。

參事院內ニ請願委員ノ設置ヲ命令スル一千八百五十二年十二月十八日ノ勅令

第一條　參事院內ニ請願委員ヲ設ケ參事院議官一名ヲ以テ之ヲ組織ス。

第二條　朕ガ權內ニ對シ訴願スル目的ヲ以テ朕ニ捧呈スル總テノ請願ハ之ヲ委員ニ送附シ直ニ審査セシムルモノトス。

第三條　委員長ハ每週參內シ朕ガ注意スベシト思惟スル條件ヲ指定シ該委員ノ事務ト簡明ナル報告ヲ上奏スベシ。

第四條　請願委員ハ三ケ月每ニ改選スルモノトス。

皇室誕育令草案

第一條　皇子誕生シタルトキハ宮內大臣直ニ之ヲ公告ス。

第二條　皇子誕生シタルトキハ天皇之ニ名ヲ命ス。

第三條　皇子命名セラレタルトキハ宮內大臣直ニ之ヲ公告ス。

第四條　皇子ノ誕生命名ハ之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告ス。

第五條　皇子誕生シテ五十日ニ至ルトキハ賢所皇靈殿神殿ニ謁ス。

但シ事故アルトキハ其ノ期ヲ延フルコトヲ得。

第六條　皇太子皇太孫ノ子[男女]誕生シタルトキハ天皇之ニ命スヘキ名ヲ賜フ。

第七條　皇太子皇太孫ノ子ニハ第一條第三條第四條第五條親王、王ノ子ニハ第一條第三條第五條ノ規定ヲ准用ス。

第八條　皇族ノ誕生ニ關スル事項ハ圖書頭之ヲ皇統譜ニ登錄ス。

皇室誕育令ニ關スル意見書

侯爵　伊藤博文

第一條

皇子ノ誕生ニハ宮内大臣ヲシテ産殿ニ候セシムルノ外、仍ホ内大臣及内閣總理大臣ヲシテ參候セシムルヲ可トス。此ノ如ク厥ノ初メヲ鄭重ニスルハ神器ノ繫ル所ヲ崇敬スル所以ニシテ永ク潢統ニ關スル疑端ヲ杜絶スルニ在リ。

第八條

天皇皇太子皇太孫ノ子ニ命ズベキ名ヲ賜フト曰フハ稍々迂闊ナルノ感アリ。故ニ此ノ條ハ第三條ト齊シク天皇直ニ之ニ名ヲ命ズトスルノ直截ナルニ加カズ。

第十一條

皇族ノ子ノ誕生ニハ已ニ第七條ノ規定アリ、此ノ規定ヲ遵用スベカラザルモノハ斷ジテ之ヲ認知スルコトヲ得ズ。從テ皇族ハ皇位繼承ノ順序ノ及ブベキ限内ニ在ルヲ以テ、普通法ノ所謂庶子認知ノ義ヲ參用スル能ハザルハ明白ナルモノトス。且本令ノ如キ大典ニシテ庶子認知等ノ事ヲ規定スルハ皇室ノ尊嚴ヲ保ツ所以ニ非ズ、恐ラク失體タルヲ免カレザルナリ。故ニ庶子ニ關スル一切ノ規定ハ之ヲ不言ノ中ニ於テ無限ノ制裁ヲ存スルコトトシ、本條ハ削除セラレムコトヲ希望ス。

皇室成年式令案 同附式

第一章　天皇成年式

第一條　天皇成年ニ達シタルトキハ其ノ當日成年式ヲ行フ但シ事故アルトキハ其ノ期日ヲ延ブルコトアルベシ。

第二條　天皇成年式ヲ行フ期日ハ宮內大臣之ヲ公告ス。

第三條　天皇成年式ヲ行フ當日之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告シ勅使ヲシテ神宮神武天皇山陵竝先帝先后ノ山陵ニ奉幣セシム。

第四條　天皇ノ成年式ハ別ニ定メタル式ニ依リ賢所大前ニ於テ之ヲ行フ。

第五條　天皇成年式ヲ訖リタルトキハ皇靈殿神殿ニ謁ス。

第六條　天皇成年式ヲ訖リタルトキハ太皇太后皇太后ニ謁ス。

第七條　天皇成年式ヲ訖リタルトキハ正殿ニ御シ朝賀ヲ受ク。

第八條　天皇成年式ヲ訖リタルトキハ宮中ニ於テ饗宴ヲ賜フ。

第二章　皇族成年式

第九條　皇太子皇太孫親王王成年ニ達シタルトキハ其ノ當日別ニ定メタル式ニ依リ賢所大前ニ於テ成年式ヲ行フ但シ事故アルトキハ勅許ヲ經テ其ノ期日ヲ延ブルコトヲ得。

第十條　皇太子皇太孫成年式ヲ行フ當日之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告ス。

第十一條　皇太子皇太孫親王王成年式ヲ訖リタルトキハ天皇皇后太皇太后皇太后ニ朝見ス。

第十二條　皇太子皇太孫ノ成年式ニハ第二條第五條第八條ノ規程ヲ準用シ親王王ノ成年式ニハ第五條ノ規定ヲ準用ス。

第十三條　親王王成年式ヲ訖リタルトキハ其ノ當日宮內大臣之ヲ公告ス。

皇室成年式令附式

第一編　天皇成年式

賢所奉告祭ノ儀

當日早旦御殿ヲ裝飾ス

時刻宮內省勅任官奏任官着床
　但シ服裝大禮服白下衣袴
次ニ御扉ヲ開ク
　此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ神饌ヲ供ス
　此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス
次ハ御代拜御玉串ヲ奉ル
次ニ神饌ヲ撤ス
　此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ御扉ヲ閉ツ
　此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ各々退下

皇靈殿奉告祭ノ儀

其ノ儀賢所ノ式ノ如シ

神殿奉告祭ノ儀

其ノ儀賢所ノ式ノ如シ

神宮山陵奉幣ノ儀

神宮奉幣ノ儀ハ神嘗祭奉幣ノ式ニ準ジ山陵奉幣ノ儀ハ四月三畝傍山東北陵奉幣ノ式ニ準ス。
幣物神饌色目時ニ臨ミ之ヲ定ム

賢所大前成年式ノ儀

時刻文武高官有爵者優遇者朝集所ニ參集ス
　但シ服裝大禮服白下衣袴正裝正服
次ニ天皇綾綺殿ニ渡御
　是ヨリ先キ攝政參入ス
次ニ御服御束帶ヲ供ス侍從奉仕

次ニ攝政御冠（先帝ノ御物ヲ用ヰラル）ヲ加ヘ奉ル

次ニ御手水ヲ供ス（侍從奉仕）

此間扈從ノ諸官服裝ヲ易フ（衣冠單）

次ニ式部官前導諸員拜殿ニ參進シ本位ニ就ク

次ニ御扉ヲ開ク

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ神饌幣物ヲ供ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス

次ニ天皇出御

式部長宮內大臣前行シ侍從劍璽ヲ奉ジ侍從長御後ニ候ス攝政親王王侍從侍從武官長侍從武官扈從ス

注意（攝政女儀ナルトキハ扈從セズ以下同ジ）

次ニ天皇內陣ノ御座ニ着御侍從劍璽ヲ奉ジ外陣ノ左右ニ候ス

次ニ御拜（御鈴常儀ノ如シ）

次ニ御告文ヲ奏シ給フ

次ニ天皇外陣ノ御座ニ移御

此ノ時劍璽ヲ奉ズル侍徒簀子ニ候ス

次ニ掌典神盃ヲ天皇ニ獻ス掌典長御瓶子ヲ執ル天皇神盃ヲ掌典ニ授ケ給フ

次ニ天皇御拜訖テ綾綺殿ニ入御

次ニ幣物神饌ヲ撤ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ御扉ヲ閉ヅ

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ各々退下

皇靈殿御拜ノ儀

時刻宮內省勅任官奏任官着床

次ニ御扉ヲ開ク

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ神饌幣物ヲ供ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス

次ニ天皇出御

式部長宮內大臣前行シ侍從劍璽ヲ奉ジ侍從長御後ニ候ス攝政親王王侍從侍從武官長侍從武官扈從ス

次ニ天皇內陣ノ御座ニ着御侍從劍璽ヲ奉ジ外陣ノ左右ニ候ス

次ニ天皇御拜訖テ入御

次ニ幣物神饌ヲ撤ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ御扉ヲ閉ヅ

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ各々退下

神殿御拜次第

其ノ儀皇靈殿ノ式ノ如シ

皇太后本宮ヘ行幸ノ儀

時刻天皇御正裝儀衞ヲ備ヘ皇太后ノ本宮ニ幸ス皇太后宮大夫奉迎ス

但シ服裝男子ハ大禮服白下衣袴正裝正服女子ハ大禮服

次ニ皇太后大禮服正殿ノ廂ニ於テ迎ヘ給フ

次ニ正殿ノ御座ニ着御

次ニ天皇御拜皇太后御答拜

次ニ還幸皇太后正殿ノ廂ニ於テ送リ給フ

太皇太后本宮ヘ行幸ノ儀

其ノ儀皇太后本宮ノ式ノ如シ

天皇朝賀ヲ受クルノ儀

時刻文武高官有爵者優遇者正殿ノ本位ニ就ク

次ニ天皇出御

式部長宮内大臣前行シ侍從劍璽ヲ奉ジ侍從長御後ニ候ス親王王侍從侍從武官長侍從武官扈從ス
次ニ内閣總理大臣壽詞ヲ奏ス
次ニ勅答ヲ賜フ
次ニ諸員萬歲ヲ稱フ
次ニ入御
次ニ各々退下

宮中饗宴ノ儀

其ノ儀大婚後饗宴第一日第二日ノ儀ニ準ジ時ニ臨ミ之ヲ定ム

第二編　皇太子成年式

皇太孫成年式之ニ準ズ

賢所奉告祭ノ儀

當日早旦御殿ヲ裝飾ス
時刻宮内省勅任官奏任官着床
但シ服裝大禮服白下衣袴
次ニ御扉ヲ開ク
此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ神饌ヲ供ス
此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス
次ニ皇太子代拜玉串ヲ奉ル
次ニ神饌ヲ撤ス
此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ御扉ヲ閉ヅ
此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ各々退下ス

皇靈殿奉告祭ノ儀

其ノ儀賢所ノ式ノ如シ

神殿奉告祭ノ儀

其ノ儀賢所ノ式ノ如シ

皇太子ニ御冠並御笏ヲ賜フノ儀

當日又ハ前日時刻勅使旨ヲ奉ジ皇太子ノ本宮ニ參入ス東宮大夫奉迎ス

但シ服裝勅使及關係諸員小禮服

次ニ皇太子正寢ノ座ニ着ク

次ニ勅使御冠並御笏ヲ賜フ旨ヲ宣フ

此ノ時東宮大夫御冠並御笏ヲ案上ニ置ク

次ニ皇太子奉答ス

次ニ勅使退出ス

賢所大前成年式ノ儀

時刻文武高官有爵者優遇者朝集所ニ參集ス

但シ服裝大禮服白下衣袴　正裝正服

次ニ親王王綾綺殿ニ參入ス

次ニ皇太子綾綺殿ニ參入ス

次ニ皇太子ニ儀服東帶ヲ供ス東宮侍從奉仕

次ニ首席ノ親王賜冠ヲ加フ

次ニ皇太子ニ手水ヲ供ス東宮侍從奉仕

此ノ間扈從ノ諸官服裝ヲ易フ衣冠簞

次ニ式部官前導諸員拜殿ニ參進シ本位ニ就ク

次ニ御扉ヲ開ク

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ神饌幣物ヲ供ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス

次ニ皇太子內陣ニ參進ス

式部長東宮大夫前行シ東宮侍從壺切御劍ヲ奉ジ東宮侍從長後ニ候ス東宮侍從武官長東宮侍從武

官扈從ス

次ニ皇太子座ニ着ク東宮侍從壺切御劍ヲ奉ジ外陣ニ候ス

次ニ皇太子拜禮告文ヲ奏ス

次ニ皇太子綾綺殿ニ退下

次ニ幣物神饌ヲ撤ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ御扉ヲ閉ヅ

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ各々退下

皇靈殿拜禮ノ儀

時刻宮內省勅任官奏任官着床

次ニ御扉ヲ開ク

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ神饌幣物ヲ供ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス次ニ皇太子內陣ノ座ニ着ク東宮侍從壺切御劍ヲ奉ジ外陣ニ候ス扈從員ハ賢所大前ノ式ニ同ジ

次ニ皇太子拜禮訖テ退下

次ニ幣物神饌ヲ撤ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ御扉ヲ閉ヅ

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ各々退下

神殿拜禮ノ儀

其ノ儀皇靈殿ノ式ノ如シ

參內拜謁ノ儀

時刻皇太子正裝儀衞ヲ備ヘ參內式部長奉迎ス

但シ服裝男子ハ大禮服正裝正服女子ハ大禮服

次ニ皇太子掖殿ニ參入ス

次ニ式部長出御ヲ奏請ス
次ニ天皇（御正裝）皇后（大禮服）便殿ニ出御
次ニ式部長前導皇太子御前ニ參進シ恩ヲ謝ス
次ニ勅語アリ
次ニ皇太子御掖座ニ着ク
次ニ御臺盤ヲ立ツ
次ニ御饌御酒ヲ供ス
次ニ天皇皇后御盃ヲ皇太子ニ賜フ
次ニ御箸ヲ立テ給フ
次ニ入御
次ニ皇太子掖殿ニ退下

皇太后本宮ヘ行啓ノ儀

時刻皇太子（正裝）儀衞ヲ備ヘ皇太后ノ本宮ニ行啓皇太后宮大夫奉迎ス
但シ服裝男子ハ大禮服正裝正服女子ハ大禮服

次ニ皇太后（大禮服）正殿ニ出御
次ニ皇太子御前ニ參進シ恩ヲ謝ス
次ニ皇太后懿旨アリ
次ニ皇太子退下

太皇太后本宮ヘ行啓ノ儀

其ノ儀皇太后本宮ノ式ノ如シ

宮中饗宴ノ儀

當日皇太子參內其ノ儀天皇成年式ノ饗宴ニ準ズ

第三編　親王成年式（王成年式之ニ準ス）

親王御冠ヲ賜フノ儀

當日（又ハ前日）時刻勅使旨ヲ奉ジテ親王ノ邸ニ至ル別當家令奉迎ス

次ニ親王正寢ノ座ニ着ク
次ニ勅使御冠ヲ賜フ旨ヲ宣フ
　此ノ時別當御冠ヲ案上ニ置ク
次ニ親王奉答ス
次ニ勅使退出ス

賢所大前成年式ノ儀

當日早旦御殿ヲ裝飾ス
時刻親王綾綺殿ニ參入ス
次ニ首席親王綾綺殿ニ參入ス
次ニ儀服東帶ヲ供ス
　但シ儀服ハ時ニ臨ミ衣冠單ヲ換用スルコトヲ得
次ニ首席親王賜冠ヲ加フ
次ニ親王手水ノ儀アリ
次ニ宮內省勅任官奏任官總代各々一員別當家令拜殿ニ參進シ本位ニ就ク

次ニ御扉ヲ開ク
　此間神樂歌ヲ奏ス
次ニ神饌幣物ヲ供ス
　此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス
次ニ親王外陣ニ參入シ座ニ着ク
次ニ親王拜禮告文ヲ奏ス
次ニ親王綾綺殿ニ退下
次ニ幣物神饌ヲ撤ス
　此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ御扉ヲ閉ヅ
　此ノ間神樂歌ヲ奏ス
次ニ各々退下

皇靈殿拜禮ノ儀

時刻宮内省勅任官奏任官總代各々一員別當家令着床

次ニ御扉ヲ開ク

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ神饌幣物ヲ供ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス

次ニ親王外陣ニ參入シ座ニ着ク

次ニ親王拜禮訖テ退下

次ニ幣物神饌ヲ撤ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ御扉ヲ閉ヅ

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ各々退下

神殿拜禮ノ儀

其ノ儀皇靈殿ノ式ノ如シ

參内拜謁ノ儀

其ノ儀皇太子成年式參内拜謁ノ式ニ準ズ

皇太后本宮拜謁ノ儀

其ノ儀皇太子成年式皇太后本宮拜謁ノ式ニ準ズ

太皇太后本宮拜謁ノ儀

其ノ儀皇太子成年式太皇太后本宮拜謁ノ式ニ準ズ

第四編　書　式

天皇成年式公告ノ書式

來ル何月何日成年式行ハセラル

右告示ス

年　月　日　　宮内大臣　爵　氏　名

皇太子皇太孫成年式公告ノ書式

來ル何月何日皇太子皇太孫某親王殿下成年式行ハセラル

右告示ス

年　月　日　　宮内大臣　爵　氏　名

親王王成年式公告ノ書式

本日某親王殿下成年式行ハセラレタリ

右告示ス

年　月　日　　宮内大臣　爵　氏　名

參考

令義解　繼嗣令　凡皇兄弟皇子皆爲親王中略以外竝爲諸王自親王五世雖得王名不在皇親之限

續日本紀　文武　慶雲三年二月庚寅准令五世之王雖有王名不在皇親之限今五世之王雖有王名已絶皇親之藉遂入諸臣之例顧念親王之息不勝絶藉之痛自今以後五世之王在皇親之限其承嫡者相承爲王自餘如令

享祿本類聚三代格　勅依令五世之王雖得王名不在皇親之限變逮慶雲昇居親限如聞頑闇之輩苟規微祿携養庸流名爲己胤遂附屬藉以汚宗室非徒速禍於一己固亦延黷於七廟朕所以丁寧過於再三曾不改悟彌長姦濫靜言其弊深合懲清宜停後格一依令條俾夫玉石珠貫蘭芝不雜主者施行

延曆十七年潤五月廿三日

政事要略　勅中略夫王氏者王號乃止於五世資蔭不過於六世典制斯存沼來浸久今諸王等以天河末流還少液流若木下枝早虧榮拂仍抗章表殊祈優恤凡所彌引抑亦可採朕情在權惠事尙德音是以推校古今聽其所請宜七世以下計數至于五世課役蠲除其既賜姓者不論先後一依王蔭計世

容レ之亦同ニ此例一豈非ニ糾ニ合枝幹一式薙ニ帝載一之義乎主者明レ之稱ニ朕意一焉

天長九年十二月十五日又見享祿本類聚三代格三代實錄

令義解　職員令　正親司　正一人　掌ニ皇親名藉、謂二世以下四世以上名藉案戸令皇親爲二不課一故知於二京職一亦可レ有二皇親戸藉一也事ニ佑一人大令史一人少令史一人使部十人直丁一人

令義解　戸令　凡戸主皆以ニ家長一爲レ之戸內有課口者爲ニ課戸一無課口者爲ニ不課戸一不課謂皇親（謂四世以上其五世王者本蔭五位雖レ非ニ皇親一理宜ニ不課一六世王者懸准ニ本蔭一比ニ五位子一女是不課七世王者雖レ云ニ絕蔭一比ニ五位孫一故輸レ調免レ傜可レ得ニ出仕一八世以下者資蔭已絕差ニ科賦役一准ニ白丁一也）

政事要略　勅中略夫王氏者王號乃至止ニ於五世一資蔭不レ過ニ於六世一典制斯存沿來浸久今諸王等以ニ天河末流一還少ニ液流一若木下枝早虧ニ榮拂一仍抗ニ章表一殊祈ニ優恤一凡所ニ稱引一抑亦可レ採朕情在ニ推惠一事尙ニ德音一是以推ニ校古今一聽ニ其所レ請宜ニ七世以下計一數至ニ于五世一課ニ役蠲除一其旣賜レ姓者不レ論ニ先後一一依ニ王蔭一計レ世容レ之亦同ニ此例一豈非ニ糾ニ合枝幹一式薙帝載一之義乎主者明之稱ニ朕意一焉

天長九年十二月十五日又見享祿本類聚三代格三代實錄

三代實錄　清和　貞觀五年十月廿七日丙戌攝津國河邊郡人九世散位正六位上川原公清宗正七位上川原公清貞從八下川原公清方十一世大膳大進正六位上爲奈眞人菅雄等五人之戸竝蠲ニ課役一清水等宣化天皇皇子火焰之後計ニ其世數一未レ可レ徵ニ課役一也

三代實錄　陽成　元慶四年十月廿七日丁未免攝津國河邊郡人九世從七位下川原公福貞無位川原公福繼有馬郡人無位川原公千被河邊郡人十世從八位下川原公憂吉大初位下川原公有利等五戸課傜一福貞等自言宣化天皇第二皇子火焰親王是川原公爲奈眞人等之祖謹檢天長九年十二月十五日詔書一偁中略爲奈眞人菅雄川原公清永等賴詔書一貞觀五年閏六月十九日被レ免課傜福貞等未レ蒙ニ恩弊一望請同被ニ蠲除許一之

○按ズルニ本文ニ據ル　皇親ハ十一世ニ及ビ賜姓ノ後モ猶課傜ヲ蠲免セラルヽナリ

續日本紀　桓武　延曆二年九月丙子近江國言除ニ王姓一從ニ百姓一戸五烟口一百一人戸主槻村井上大岡大魚動神等五人竝山村王之孫也其祖父山村王以ニ去養老五年一編ニ附北部一自レ爾以來子孫蕃息或七八世兮爲ニ數烟一依レ格六世以下除ニ承レ嫡者之外可科ニ課役一望請承レ嫡之戸遷ニ附京戸一自除與レ姓科レ課於是下ニ所司一檢皇親藉無ニ山村王之名一仍從百姓之例一但不レ與ニ眞人之姓一

皇室財産令立案要旨

第一章　總則

一、皇室ノ財産ハ其ノ不動産タルト動産若ハ債權タルトヲ問ハズ總括シテ之ヲ御料ト稱スルコト。

二、御料ニ關スル法律行爲及訴訟行爲ニ付テハ宮内大臣ヲ以テ其ノ當事者トナスコト、但シ宮内大臣ハ其ノ部局ノ長官ニ代理ヲ委任スルコトヲ得。

三、御料ノ歳出入ニ關スルコト及第二章十二及十三ニ包含セザル財産ノ管理及處分ニ關スルコトハ、皇室會計令ヲ以テ之ヲ定ムルコト。

四、御料ニ屬スル債券ノ關係及皇族ノ債權關係ニ付テハ本令其ノ他ノ皇室令ニ別段ノ定アル場合ノ外大體民法第三編ノ規定ヲ準用スルコト。

五、民法第一編第三章乃至第六章ノ規定ハ大體本令ニモ之ヲ準用スルコト、但シ第六章第一節ノ規定ハ皇室訴訟令ノ規定ニ基キ參酌取捨スベシ。

六、普通御料及皇族所有ノ土地ニ對シ土地收用法ヲ適用スル必要アル場合ニ於テハ、該法ニ定ムル條件及手續ニ依リ、其ノ目的トスル土地ヲ交付シ又ハ其ノ使用ヲ許スコト、但シ訴訟ヲ認メズ。

七、御料及皇族ノ財産ニ付テハ本令中別段ノ定アル場合ノ外人民ガ之ヲ所有スル場合ニ其ノ財産又ハ之ヨリ生ズル所得ニ對シ賦課セラルベキ金額ヲ國廳府縣市町村其ノ他公共團體ニ交付スルコト、但シ細則ハ宮内大臣之ヲ定ム。

八、未成年ノ皇族ガ財産ニ關スル法律行爲ヲ爲スニハ、本令其ノ他ノ皇室令ニ別段ノ定アル場合ノ外、其ノ法定代理人ノ同意ヲ要スルコト、但シ單ニ權利ヲ得又ハ義務ヲ免カルベキ行爲ハ此ノ限ニ在ラズ（民四）

前項ノ規定ニ反スル行爲ハ之ヲ取消スヲ得ルコト（民四）

九、皇族心神ニ故障アルコト久シキニ亙ルトキハ、勅旨ヲ以テ治産ノ禁ヲ宣告シ之ヲ後見ニ附スルコト（民七、八）

禁治産者ノ爲シタル財産ニ關スル法律行爲ハ之ヲ取消スヲ得ルコト（民九）

十、皇族心神耗弱者、聾者、啞者又ハ盲者ナルトキハ勅旨ヲ以テ禁治産者ニ準ズルコトヲ宣告シ之ニ保佐人ヲ附スルコト（民一一）

十一、準禁治産者又ハ皇室典範第五十三條ニ依ル禁治産者ガ民法第十二條ニ掲ゲタル行爲及勅旨ニ依リ指定シタル行爲ヲ爲スニハ、保佐人又ハ管財者ノ同意ヲ得ルヲ要スルコト、但シ民法第十二

條ニ揭ゲタル行爲ハ之ヲ本令中ニ揭グ。

前項ノ規定ニ反スル行爲ハ之ヲ取消スヲ得ルコト（民一二）

十二、禁治産又ハ準禁治産ノ原因止ミタルトキハ勅旨ヲ以テ其ノ宣告ヲ取消スコト（民一〇及一三）皇室典範第五十三條ニ依ル禁治産ノ宣告ニ付テモ亦同ジ。

十三、右九、十及十二ハ皇族會議ニ諮詢セラルヽコト（皇室典範五四）

第二章　御　料

一、皇室ノ財産ハ之ヲ世傳御料及普通御料トシ、世傳御料ニ編入セラレタルモノヲ除ク外一切ノ財産ヲ普通御料トスルコト、世傳御料ヲ解除セラレタルトキ亦同ジ。

二、御陵墓ハ之ヲ世傳御料ニ編入セラルベキモノトスルコト、但シ世傳御料ニ屬スベキ動産ハ別段ノ規定ニ依ル。

三、世傳御料ハ其ノ種類ニ從ヒ歷史アルモノハ歷史ヲ附シ、土地ニ付テハ其ノ所在、坪數、境界、圖面等、建物ニ付テハ其ノ構造、建坪圖面等其ノ他ノ物件ニ付テハ形狀、品目、箇數、作者筆者製作年代等ヲ詳細ニ世傳御料簿ニ登錄スルコト但シ其ノ增減異動アルトキ亦同ジ。

四、世傳御料簿ハ之ヲ圖書寮ニ尙藏シ、管理ノ部局ニハ所管ニ從ヒ其ノ謄寫目錄ヲ備フルコト。

五、世傳御料ハ必要アルトキハ之ヲ解除シ、又ハ變更ヲ加ヘ若ハ修補改築ヲ爲スヲ得ルコト。

六、世傳御料ノ解除ハ樞密顧問ニ諮詢シ、勅書ヲ以テ之ヲ定メ、宮內大臣之ヲ公告スルコトトシ、世傳御料編入ノトキニ於ケル方式ニ同カラシムルコト、但シ變更、修補、改築ハ此ノ限ニ在ラズ。

七、世傳御料ニ編入セラレタル不動産上ノ權利ハ登記ヲ要セズシテ第三者ニ對抗スルヲ得ルコト、但シ編入前ニ登記アリタルモノニ付テハ編入ト共ニ其ノ登記抹消ノ手續ヲ爲ス。

八、世傳御料ヨリ生ジタル果實ハ之ヲ普通御料トスルコト、其ノ變更、修補、改築ニ依リテ生ジタル材料其ノ他代採ニ係ル林木等亦同ジ。

九、普通御料ハ遺命ナキトキハ世傳御料ト共ニ總テ踐祚天皇ノ繼承ニ歸スルモノトシ、遺産相續ノ開始ヲ認メズ又天皇ハ遺産相續人タラザルコト。

十、普通御料ノ遺賜ニ付テハ大略左ノ制限ヲ加フルコト。

（イ）學校、博物館、公園其ノ他公益慈善ノ用ニ供スル土地建物及物件ハ之ヲ遺賜ノ目的トナスヲ得ザルコト。

（ロ）遺賜ハ遺命ノ効力ヲ生ズル時ニ存スル普通御料ノ三分ノ一ヲ超過スルヲ得ザルコト、但シ三分ノ一ヲ超過シタル遺賜アリタルトキハ之ヲ各遺賜ニ割合ヒ三分ノ一ニ減ズ。

十一、御料ニ付テハ本令中別段ノ定アル場合ヲ除ク外大體民法第二編第一章乃至第六章ノ規定ヲ準

用スルコト

十二、普通御料ニ屬スル林野ノ管理及處分ニ付テハ大體國有林野法(明治三十二年法律第八十五號)ノ主意ニ依リ規定シ、境界査定、貸付、使用ニ付テハ世傳御料ニモ其ノ規定ヲ適用スルコト。

十三、普通御料ニ屬スル林野以外ノ不動産及有體動産ノ管理及處分ニ付テハ大體官有財産管理規則(明治二十三年勅令第二百七十五號)及官有地特別處分規則(明治二十三年勅令第百三十五號)ノ規定ノ主意ニ依ルコト。

十四、御料ニ屬スル土地ノ上ニ新ニ物權ヲ設定スルハ公共ノ用ニ供スル場合及其ノ土地ノ利用上必要ナル場合ニ限ルコト。

十五、左ニ掲ゲタル御料ニ付テハ第一章第九號ヲ適用セザルコト、但シ之ヨリ生ズル所得ニ付テモ亦同ジ。

(イ)　世傳御料

(ロ)　普通御料中學校博物館公園其ノ他公益慈善ノ用ニ供スル財産

(ハ)　御料ノ歳入ニ屬スル國庫ノ支出金

(ニ)　御料車馬

第三章　皇族財産

一、皇族財産ニ付テハ本令中別段ノ定アル場合ヲ除ク外、大體民法第二編第一章乃至第十章ノ規定ヲ準用スルコト、但シ皇室訴訟令ノ規定ニ基キ參酌取捨スベシ。

二、皇族ノ遺産相續ハ皇族ノ薨去ニ依リ開始スルモノトシ、其ノ相續ニ付テハ本令ニ別段ノ定アル場合ノ外大體民法第五編第二章ノ規定ヲ準用スルコト。

三、太皇太后皇太后及皇后ハ遺産相續人タラズ、又其ノ遺産ニ付テハ遺産相續ノ開始ヲ認メズ、總テ御料ニ歸屬スルコト。

四、皇族ノ遺産中不動産、墳墓系譜及祭器ハ先主ヨリ出タル男系ノ皇族男子皇位繼承ノ順序ニ依リ之ヲ相續スルコト、但シ本文ニ依リ相續スルモノナキトキハ第五號以下ノ規定ニ依ル。

五、右四ニ掲ゲタル財産ハ之ヲ遺贈ノ目的トナスヲ得ザルコト。

六、右四ニ屬セザル遺産ハ左ノ順位ニ依リ之ヲ相續スルコト。

(イ)　直系卑屬

(ロ)　配偶者

(ハ)　直系尊屬

七、右六ニ揭ゲタル相續人ナキトキハ遺產ハ御料ニ歸屬スルコト。

八、直系卑屬數人アル場合ニ於テ遺產相續開始シタルトキハ共有ヲ認メズ、遺產ニ付テハ管財人ヲ勅選シテ之ヲ整理シ相續分ニ從ヒ勅許ヲ受ケ之ヲ相續人ニ分割セシムルコト、但シ其ノ分割ニ對シテハ訴訟ヲ許サズ。

九、民法第五編第三章及第四章及第五章ノ規定ハ大體皇族ニモ之ヲ準用スルコト、但シ裁判所ニ代スルニ宮內大臣ヲ以テス。

十、民法第九百六十五條乃至第九百六十七條及第五編第七章ノ規定ハ皇族ノ遺產相續ニ之ヲ準用スルコト。

十一、左ニ揭ゲタル皇族ノ財產ニ付テハ第一章九ヲ通用セザルコト、但シ之ヨリ生ズル所得ニ付テモ亦同ジ。

（イ）皇族本邸

（ロ）歲費

（ハ）皇族所有ノ車馬

第四章　皇室經濟會議

一、皇室ノ經濟ニ關シ重要ノ事項ヲ諮詢スル爲皇室經濟會議ヲ設クルコト。

二、世傳御料ノ編入及解除ニ付テハ皇室經濟會議ノ議決ヲ要スルコト。

三、皇室經濟會議ノ組織ハ勅命セラレタル皇室經濟顧問、宮內大臣、內大臣ヲ以テ之ヲ組織スルコト。

四、內藏頭御料局長帝室會計審查局長ハ會議ニ列シ意見ヲ述ブルヲ得セシムルコト。

皇室財産令

第一章　總　則
第二章　世傳御料
第三章　普通御料
第四章　皇室經濟會議
第五章　皇族財産
第六章　財産相續
第七章　皇族歳費及嫁資
第八章　公課補助

第一章　總　則

第一條　御料及皇族財産皇族歳費嫁資公課補助ハ本令ノ定ムル所ニ依ル。

第二條　御料ハ世傳御料普通御料ノ二種トス。

第三條　普通御料トハ世傳御料ニ編入セラレタルモノヲ除クノ外在ノ財産ヲ總稱ス。

一　土地建物
二　貴重ノ物件
三　各種ノ資金

第四條　皇室經費ノ剩餘及御料ヨリ生ズル收益其ノ他獻納遺贈若ハ遺産相續ニ依リ收得シタル財産ハ普通御料ニ編入スベシ。

第五條　御料ハ宮内大臣之ヲ管理ス。

第二章　世傳御料

第六條　世傳御料ハ左ノ種別ニ從ヒ目錄二通ヲ調製シ其ノ增減異動ヲ詳記シ一通ヲ主管部局ニ一通ヲ圖書寮ニ保管ス但シ土地建物ハ各其ノ圖面ヲ添フベシ。

一　土　地　　段別坪數及境界
二　建　物　　構造及建坪
三　其ノ他寶器　　形狀品目及箇數

第七條　世傳御料ニ編入シタル土地建物其他寶器ハ樞密顧問ニ諮詢シ勅書ヲ以テスルニ非ザレバ之ヲ解除スルコトヲ得ズ。

第八條　世傳御料ヨリ解除シタル土地建物其ノ他寶器ヲ處分シタルニ因リテ生ズル收入アルトキハ世傳御料ニ關スル費途ニ供スルノ外之ヲ使用スルコトヲ得ズ。

第九條　世傳御料ニ編入シタル土地ノ上ニ物件ヲ設定スルハ公共ノ用ニ供スル場合及其ノ土地ノ利用上心要ナル場合ニ限ル。

第十條　世傳御料ニ編入シタル建物ハ必要アルトキハ之ニ變更ヲ加ヘ又ハ之ヲ改築スルコトヲ得。

第十一條　第九條第十條ニ依リ世傳御料ニ編入シタル土地建物其ノ他寶器ヲ處分セントスルトキハ勅許ヲ請フベシ。

第十二條　世傳御料ニ編入シタル土地建物其ノ他寶器ノ段別坪數構造建坪又ハ品目箇數ハ宮內大臣之ヲ公告スベシ其ノ增減異動アリタルトキ亦同ジ。

第三章　普通御料

第十三條　普通御料ハ左ノ種別ニ從ヒ目錄ヲ調製シ其ノ增減異動ヲ詳記シ主管部局ニ保管ス但シ土地建物ハ其ノ圖面ヲ添フベシ。

一　土　地　段別坪數及境界

二　建　物　構造及建坪

三　其ノ他貴重ノ物件　形狀品目及箇數

四　各種ノ資金　種類及金額

第十四條　普通御料ニ屬スル學校博物館公園其ノ他公益慈善ノ用ニ供スル土地建物ハ其ノ用ヲ廢スルニ非ザレバ賣却讓與スルコトヲ得ズ但シ其ノ事業ヲ繼續セシムル契約ヲ以テ國廳府縣市區町村其ノ他ノ公共團體ニ賣却讓與スルトキハ此ノ限ニ在ラズ。

第十五條　普通御料ノ土地建物ヲ貸付シ又ハ使用セシムルトキハ料金ヲ徵收スベシ但シ公用若ハ公益事業ノ爲貸付シ又ハ使用セシムルトキハ之ヲ徵收セザルコトヲ得。

第十六條　普通御料ノ土地建物ヲ貸付シ又ハ使用セシムルトキハ植樹ノ場合ニ於テハ八十年工作物又ハ耕作ノ場合ニ於テハ三十年其ノ他ノ場合ニ於テハ十五年ヲ超ユルコトヲ得ズ但シ其ノ期間ハ之ヲ更新スルコトヲ妨ゲズ。

第十七條　普通御料ノ土地ハ其ノ種類價格ノ均シキモノト交換スルコトヲ得。

第十八條　普通御料ノ土地建物其ノ他ノ物件ハ必要アルトキハ之ヲ賣却讓與スルコトヲ得但シ其ノ賣却讓與ハ別ニ定メタル規定ニ依ル。

第十九條　普通御料ノ資金ハ勅旨ニ由ルモノヲ除クノ外左ノ場合ニ非ザレバ之ヲ支出スルコトヲ得ズ。

一　土地建物ヲ購入スルトキ

二　皇室經費ノ補足ニ充ツルトキ

前各號ノ場合ニ於テハ勅許ヲ請フベシ

第二十條　普通御料ノ資金ハ債券株券其ノ他物件ニ轉換スルコトヲ得其ノ轉換シ得ベキ債券株券其ノ他物件ノ種類制限ハ別ニ之ヲ定ム。

第二十一條　皇族ヨリ臣籍ニ降リタル者ニ特ニ賜フベキ基本財産ハ普通御料ノ中ヨリス。

第二十二條　普通御料ノ土地ハ其ノ區域ヲ限定シ其ノ收益ヲ特ニ皇族ニ賜フコトヲ得。

第四章　皇室經濟會議

第二十三條　皇室經濟會議ハ勅命セラレタル皇室經濟顧問及宮内大臣宮内大臣宮内次官内藏頭御料局長帝室會計審査局長ヲ以テ組織ス。

第二十四條　皇室經濟會議ニハ天皇親臨スルコトアルベシ。

第二十五條　世傳御料ノ編入解除及本令ニ依リ勅許ヲ請フモノハ總テ皇室經濟會議ノ議決ヲ要ス。

第二十六條　前條ノ外皇室經濟會議ニ付スベキ事項ハ別ニ之ヲ定ム。

第五章　皇族財産

第二十七條　皇族ハ勅許ヲ經テ基本財産ヲ創設スルコトヲ得。

第二十八條　基本財産ハ土地、建物其ノ他貴重ノ物件及債券株券ニ限ル其ノ債券株券ノ種類ハ別ニ之ヲ定ム。

第二十九條　皇族本邸、皇族歳費及基本財産ハ賣却讓與又ハ負債ノ抵償ト爲スコトヲ得ズ。

第六章　財産相續

第三十條　世傳御料及御陵墓學校博物館公園其ノ他公益慈善ノ用ニ供スル土地建物ハ踐祚天皇ノ繼承ニ歸スルモノトス。

第三十一條　前條ニ規定セルモノヲ除クノ外御料ノ遺贈ハ其ノ總額ノ二分ノ一ヲ超エザルモノトス。

第三十二條　御料ハ遺詔ナキトキハ總テ踐祚天皇ノ繼承ニ歸スベシ。

第三十三條　皇族ノ基本財産ハ之ヲ創設シタル者ヨリ出デタル男系ノ皇族男子皇位繼承ノ順序ニ依リ之ヲ相續ス。

前項ニ依リ相續スル者ナキトキハ次條以下ノ規定ヲ適用ス。

第三十四條　皇族ノ遺産ハ左ノ順位ニ依リ之ヲ相續ス但シ皇族ノ列ニ在ラザル者ハ之ニ與カルコトヲ得ズ。

一　直系卑屬

二　配偶者

三　直系尊屬

前項直系卑屬又ハ直系尊屬ノ遺産相續ヲ爲スハ親等ノ異ナリタル者ノ間ニ在リテハ其ノ近キ者ヲ先ニシ親等同ジキ者ハ同順位ニ於テス。

第三十五條　前條ニ依リ遺産相續ヲ爲スベキ直系ノ卑屬ニシテ相續前薨去シタル場合ニ於テ其ノ者ニ直系ノ卑屬アルトキハ其ノ直系卑屬ハ其ノ者ト同順位ニ立ツモノトス。

第三十六條　皇族ノ遺産ハ相續者數人アルトキハ之ヲ等分スルモノトス但シ直系卑屬數人アルトキハ庶子ノ相續分ハ嫡子ノ相續分ノ二分ノ一トス。

第三十七條　第三十六條ニ依リ相續者タル直系卑屬ノ相續分ハ其ノ直系尊屬ノ受クベカリシモノニ同ジ但シ直系卑屬數人アルトキハ其ノ各自ノ相續分ハ其ノ直系尊屬ノ受クベカリシ部分ニ付前條ノ規定ヲ適用ス。

第三十八條　皇族財産ノ遺贈ハ其ノ總額ノ二分ノ一ヲ超ユルコトヲ得ズ。

第三十九條　皇族ハ遺言ヲ以テ相續分ヲ定ムルコトヲ得但シ前條ノ規定ニ違フコトヲ得ズ。

第四十條　皇族ノ遺言書ハ自書封緘ヲ爲スベシ自書シ能ハザル場合ニ於テハ成年以上ノ皇族男子又ハ其處ニアル身分最モ高キ者ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得但シ此ノ場合ニ於テハ證人二人以上ノ立會ヲ要ス。

第四十一條　皇族ノ遺言書ハ圖書寮ニ保管セシム。

第四十二條　皇族ノ遺言書ハ勅許ヲ得ルニアラザレバ之ヲ執行スルコトヲ得ズ。

第四十三條　皇族遺言書ノ執行及遺産ノ處分ハ宮内大臣ヲシテ之ヲ行ハシム。

第四十四條　皇族ノ遺産ハ相續者ナキトキハ御料ニ歸屬ス。

第七章　皇族歳費及嫁資

第四十五條　皇族ニハ皇室經費ノ中ヨリ歳費又ハ嫁資ヲ賜フ。

第四十六條　太皇太后皇太后皇后皇太子皇太孫攝政ノ歳費ハ勅旨ニ依リ別ニ之ヲ定ム其ノ他ノ皇族ノ歳費及嫁資ハ次條以下ノ定ムル所ニ依ル。

第四十七條　皇族男女成年ニ達スルトキハ左ノ區別ニ依リ歳費ヲ賜フ。

一　一世皇族男子ノ歳費ハ拾萬トス

二　二世以下皇族男子ノ歳費ハ五世ニ至ルマデ一世ヲ降ル毎ニ一世皇族男子ノ五分ノ一ヲ減ズ六世以下ハ五世ニ同ジ

三　皇族女子ノ歳費ハ世數ノ同ジキ皇族男子ノ二分ノ一トス

第四十八條　妃ノ歳費ハ其ノ夫ノ二分ノ一ヲ賜フ寡居スルトキハ五分ノ二ヲ減ズ。

第四十九條　皇族女子皇族ニ嫁スルトキハ其ノ歳費ハ多キ方ニ從ヒ之ヲ賜フ。

第五十條　皇女及皇太子皇太孫ノ女臣籍ニ嫁スルトキハ特ニ歳費ヲ賜フコトアルベシ。

第五十一條　皇族女子出嫁スルトキハ左ノ區別ニ依リ嫁資ヲ賜フ。

一　皇女及皇太子皇太孫ノ女ノ嫁資ハ勅旨ニ依リ之ヲ定ム。

二　一世皇族女子ノ嫁資ハ拾萬圓トス。

三　二世以下皇族女子ノ嫁資ハ五世ニ至ルマデ一世降ル毎ニ皇族女子ノ五分ノ一ヲ減ズ六世以下ハ五世ニ同ジ。

第五十二條　庶出皇族ノ歳費及嫁資ハ嫡出皇族ノ十分ノ一ヲ減ズ。

第五十三條　父ナキ未成年ノ皇族男女ニハ養育料トシテ成年ニ達スルトキ賜フベキ歳費ノ五分ノ二以内ヲ賜フ。

第八章　公課補助

第五十四條　世傳御料御陵墓學校博物館公園皇族本邸皇族墓地其ノ他公益慈善ノ用ニ供スルモノヲ除クノ外御料及皇族所有ノ不動産ニ付テハ人民ガ之ヲ所有スル場合ニ於テ其ノ不動産又ハ之ヨリ生ズル所得ニ對シ賦課セラルベキ國税府縣税市税區税町村税其ノ他ノ公課ニ均シキ金額ヲ國廳府縣市區町村其ノ他ノ公共團體ニ付與スベシ。

皇室財産令目錄及同令

第一章　御料
第二章　普通御料繼承
第三章　皇族財産
第四章　皇族財産相續
第五章　世傳御料管理
第六章　普通御料管理
第七章　公課補助
第八章　皇族經濟會議

第一章　御料

第一條　御料ハ世傳御料普通御料ノ二種トス。

第二條　世傳御料ニ編入セラレタルモノヲ除クノ外左ニ掲グルモノヲ普通御料トス。

一　土地建物

修正世傳御料外ノ財産ヲ普通御料トス

二　貴重ノ物件

三　各種ノ資金

第三條　皇室經費ノ剩餘及御料ヨリ生ズル純益其ノ他獻納遺贈若ハ遺産相續ニ依リ取得シタル財産ハ普通御料ニ編入スベシ。

第二章　普通御料繼承

第四條　御陵墓學校博物館公園其ノ他公益慈善ノ用ニ供スル土地建物ハ踐祚天皇ノ繼承ニ歸スルモノトス。

第五條　前條ニ規定スルモノヲ除クノ外普通御料ノ遺贈ハ其ノ總額ノ二分ノ一ヲ超ヘザルモノトス。

修正普通御料ノ遺贈ハ前條ニ規定スルモノヲ除キ其ノ總額ノ二分ノ一ヲ超ヘザルモノトス

第六條　普通御料ハ遺詔ナキトキハ總テ踐祚天皇ノ繼承ニ歸スベシ。

第三章　皇族財産

第七條　皇族男子ハ勅許ヲ經テ基本財産ヲ創設スルコトヲ得。

第八條　基本財産ハ土地建物其ノ他貴重ノ物件及債券株券ニ限ル其ノ債券株券ノ種類ハ別ニ定ムル

所ニ依ル

第九條　皇族本第皇族墓地系譜祭器及基本財産ハ賣却讓與又ハ負債ノ抵償ト爲スコトヲ得ズ。

第四章　皇族財産相續

第十條　皇族ノ基本財産ハ之ヲ創設シタル者ヨリ出テタル男系ノ皇族男子皇位繼承ノ順序ニ依リ之ヲ相續ス。

前項ニ依リ相續スルモノナキトキハ次條以下ノ規定ヲ適用ス。

第十一條　皇族ノ遺産ハ左ノ順序ニ依リ之ヲ相續ス。

但シ皇族ノ列ニ在ラザル者ハ之ニ與カルコトヲ得ズ。

一　直系卑屬

二　配偶者

三　直系尊屬

前項直系卑屬又ハ直系尊屬ノ遺産相續ヲ爲スハ親等ノ異ナリタル者ノ間ニ在リテハ其ノ近キ者ヲ先ニシ親等ノ同ジキ者ハ同順位ニ於テス。

第十二條　前條ニ依リ遺産相續ヲ爲スベキ直系卑屬ニシテ相續前薨去シタル場合ニ於テ其ノ者ニ直系卑屬アルトキハ其ノ直系卑屬ハ其ノ者ト同順位ニ立ツモノトス。

第十三條　皇族ノ遺産ハ相續者數人アルトキハ之ヲ等分スルモノトス但シ直系卑屬數人アルトキハ庶子ノ相續分ハ嫡子ノ相續分ノ二分ノ一トス。

第十四條　第十二條ニ依リ相續者タル直系卑屬ノ相續分ハ其ノ直系尊屬ノ受クベカリシモノニ同ジ

但シ直系卑屬數人アルトキハ其ノ各自ノ相續分ハ其ノ直系尊屬ノ受クベカリシ部分ニ付前條ノ規定ヲ適用ス。

第十五條　皇族財産ノ遺贈ハ其ノ總額ノ二分ノ一ヲ超ユルコトヲ得ズ。

第十六條　皇族ハ遺言ヲ以テ相續分ヲ定ムルコトヲ得。

但シ前條ノ規定ニ違フコトヲ得ズ。

第十七條　皇族ノ遺言書ハ自書封緘ヲ爲スベシ自書シ能ハザル場合ニ於テハ成年以上ノ皇族男子又ハ其ノ所ニ在ル身分最モ高キ者ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得但シ此ノ場合ニ於テハ證人二人以上ノ立會ヲ要ス。

第十八條　皇族ノ遺言書ハ圖書寮ニ保管セシム。

第十九條　皇族ノ遺言書ハ勅許ヲ經ルニ非ザレバ之ヲ執行スルコトヲ得ズ。

第二十條　皇族ノ遺言書ノ執行及遺産ノ處分ハ宮内大臣ヲシテ之ヲ行ハシム。

第二十一條　皇族ノ遺産ハ相續者ナキトキハ普通御料ニ歸屬ス。

第五章　世傳御料管理

第二十二條　世傳御料ノ土地物件ハ左ノ種別ニ從ヒ目錄ヲ調製シ其ノ增減異動ヲ詳記シ一通ヲ主管部局ニ一通ヲ圖書寮ニ保管ス但シ土地建物ハ圖面ヲ添フベシ。

一　土地ハ其段別坪數及境界

二　建物ハ其ノ構造及建坪

三　寶器其ノ他ノ物件ハ其ノ形狀品目及箇數

第二十三條　世傳御料ニ編入シタル土地建物其ノ他ノ物件ハ樞密顧問ニ諮詢シ勅書ヲ以テスルニ非ザレバ之ヲ解除スルコトヲ得ズ。

第二十四條　世傳御料ヨリ解除シタル土地建物其ノ他ノ物件ヲ處分シタルニ因リテ生ズル收入アルトキハ世傳御料ニ關スル費途ニ供スルノ外之ヲ使用スルコトヲ得ズ。

第二十五條　世傳御料ニ編入シタル土地ノ上ニ新ニ物權ヲ設立スルハ公共ノ用ニ供スル場合及其ノ土地ノ利用上必要ナル場合ニ限ル。

第二十六條　世傳御料ニ編入シタル建物ハ必要アルトキハ之ニ變更ヲ加ヘ又ハ之ヲ改築スルコトヲ得。

第二十七條　第二十五條第二十六條ニ依リ世傳御料ニ編入シタル土地建物其ノ他ノ物件ヲ處分セントスルトキハ勅許ヲ請フベシ。

第二十八條　世傳御料ニ編入シタル土地建物其ノ他ノ物件ノ段別坪數構造建坪又ハ品目個數ハ宮內大臣之ヲ公告スベシ其ノ增減異動アリタルトキ亦同ジ。

第六章　普通御料管理

第二十九條　普通御料ノ土地物件及資金ハ左ノ種別ニ從ヒ目錄ヲ調製シ其增減異動ヲ詳記シ主管部局ニ保管ス但シ土地建物ハ圖面ヲ添フベシ。

一　土地ハ其ノ段別坪數及境界

二　建物ハ其ノ構造及建坪

三　貴重ノ物件ハ其ノ形狀品目及個數

四　各種ノ資金ハ其ノ種類及金額

第三十條　普通御料ニ屬スル土地建物ヲ貸付シ又ハ使用セシムルトキハ料金ヲ徵收スベシ但シ公共ノ用ニ供スル爲貸付シ又ハ使用セシムルトキハ此ノ限ニ在ラズ。

第三十一條　普通御料ニ屬スル土地建物ヲ貸付シ又ハ使用セシムルトキハ植樹ノ場合ニ於テハ八十年工作物又ハ耕作ノ場合ニ於テハ三十年其ノ他ノ場合ニ於テハ十五年ヲ超ユルコトヲ得ズ但シ其ノ期間ハ之ヲ更新スルコトヲ妨ゲズ。

第三十二條　普通御料ニ屬スル土地ハ其ノ種類價格ノ均シキモノト交換スルコトヲ得。

第三十三條　普通御料ニ屬スル土地建物其ノ他ノ物件ハ必用アルトキハ之ヲ賣却讓與スルコトヲ得。

第三十四條　普通御料ニ屬スル資金ハ勅旨ニ由ルモノヲ除クノ外左ノ場合ニ限リ勅許ヲ經テ之ヲ支出スルコトヲ得。

一　土地建物ヲ購入スルトキ

二　皇室經費ノ補足ニ充ツルトキ

第三十五條　御料ニ屬スル資金ハ債券株券其ノ他ノ物件ニ轉換スルコトヲ得其ノ轉換シ得ベキ債券株券其ノ他物件ノ種類制限ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

第三十六條　皇族ヨリ臣籍ニ降リタル者ニ賜フベキ基本財産ハ普通御料ノ中ヨリス。

第三十七條　普通御料ニ屬スル土地ハ其ノ區域ヲ限定シ其ノ收益ヲ特ニ皇族ニ賜フコトヲ得。

第七章　公課補助

第三十八條　世傳御料御陵墓學校博物館公園皇族本第皇族墓地其ノ他公益慈善ノ用ニ供スルモノヲ除クノ外御料及皇族所有ノ不動産ニ付テハ人民ガ之ヲ所有スル場合ニ於テ其ノ不動産又ハ之ヨリ生ズル所得ニ對シ賦課セラルベキ租稅其ノ他ノ公課ニ均シキ金額ヲ國廳府縣市區町村其ノ他ノ公共團體ニ付與スベシ。

第八章　皇室經濟會議

第三十九條　皇室經濟會議ハ勅命セラレタル皇室經濟顧問及宮內大臣內大臣宮內次官內藏頭御料局長帝室會計審査局長ヲ以テ組織ス。

第四十條　皇室經濟會議ニハ天皇親臨スルコトアルベシ。

第四十一條　世傳御料ノ編入解除及本令ニ依リ勅許ヲ經ベキモノハ總テ皇室經濟會議ノ議決ヲ要ス。

第四十二條　前條ノ外皇室經濟會議ニ付スベキ事項ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

皇室財産令修正案　自第一條至第四十七條

第一章　御料

第一節　總則

第一條　御料ハ世傳御料及普通御料トス。

第二條　御料ニ關スル法律上ノ行爲ニ付テハ宮内大臣ヲ以テ其ノ當事者トス但シ宮内大臣ハ主管部局ノ長官ヲシテ代理セシムルコトヲ得。

第三條　御料ニ屬スル財産ハ其ノ種類ニ從ヒ各臺帳ヲ設ケ之ニ其ノ現況異動ヲ登錄シ土地建物ニ付テハ圖面ヲ添付スベシ。

第四條　御料ニ屬スル土地ノ彊界線上ニハ界標圍障牆壁又ハ溝渠ヲ設クベシ。

第五條　御料ニ屬スル土地ノ彊界査定ハ宮内大臣ニ於テ豫メ期日ヲ定メ隣接地所有者ニ通告シテ其ノ立會ヲ求メ之ヲ執行スベシ但シ豫定期日ニ於テ隣接地所有者立會ヲナサザルコトアルモ彊界査定ヲナスコトヲ妨ゲズ。

前項ノ彊界査定ヲ終ヘタルトキハ宮内大臣ハ其ノ旨ヲ隣接地所有者ニ通告スベシ。

第六條　御料ニ屬スル土地ノ彊界査定又ハ測量ノ爲目標ヲ設置シ若ハ支障木竹ヲ伐採スル必要アルトキハ其ノ土地若ハ木竹ノ所有者ハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ズ但シ相當ノ補償ヲ求ムルコトヲ妨ゲズ。

第七條　第五條ノ規定ニ依リテナシタル彊界査定ニ不服アルトキハ隣接地所有者ハ彊界査定ノ通告ヲ受ケタル日ヨリ三ケ月内ニ訴訟ヲ提起スルコトヲ得。

第八條　御料ニ屬スル不動産ノ貸付ハ左ニ揭ゲタル場合ニ限リ隨意契約ニ依ルコトヲ得。

一　勅命ニ依リ特ニ貸付スルトキ

二　公用又ハ公益事業ノ爲貸付スルトキ

三　牧畜ノ爲林野ヲ貸付スルトキ

四　牛馬放牧ノ爲林野ヲ貸付スルトキ

五　林野經濟ノ爲其ノ林野ヲ貸付スルトキ

第九條　山陵及其ノ附屬物ニ關スル事項ハ皇室陵墓令ノ定ムル所ニ依ル。

第十條　御料ニ屬スル歲入歲出資金工事及土地物件ノ貸借取得讓渡ニ關スル事項ハ本令ニ別段ノ定アルモノノ外皇室會計令ノ定ムル所ニ依ル。

第十一條　民法第一編乃至第三編商法及附屬法令ノ規定ハ皇室典範及本令其ノ他ノ皇室令ノ規定ニ牴觸セザル範圍内ニ於テ御料ニ關シテ之ヲ準用ス但シ御料ニ屬スル物ニ關シテハ民法第一編第六章第二節ノ規定ヲ準用スル限ニ在ラズ。

第二節　世傳御料

第十二條　世傳御料ニ屬スル財産ノ臺帳ニハ左ノ事項ヲ登錄スベシ。

一　土地ハ其ノ所在字地目地番面積彊界及由緒

二　建物ハ其ノ所在種類構造建坪建造年代建造者及由緒

三　其ノ他ノ物件ハ品目個數製作者筆者製作年代及由緒

前項ニ揭ゲタルモノノ外宮内大臣ニ於テ必要ト認メタル事項ハ勅裁ヲ經テ之ヲ臺帳ニ登錄スルコトヲ得

第十三條　世傳御料ニ屬スル財産ノ臺帳ハ圖書寮ニ於テ尙藏ス。

第十四條　世傳御料ニ屬スル財産ハ重大ナル事故ヲ生ジタル場合ニ限リ其ノ解除ヲナスコトヲ得。

前項ノ解除ハ樞密顧問ニ諮詢シ勅書ヲ以テ之ヲ定メ宮内大臣之ヲ公告ス。

第十五條　世傳御料ノ解除アリタルトキハ臺帳ニ事由ヲ附記シテ其ノ登錄ヲ抹消スベシ。

第十六條　世傳御料ニ屬スル財産ハ必要アルトキハ勅裁ヲ經テ之ニ變更ヲ加ヘ又ハ之ヲ修補改築スルコトヲ得。

前項ノ場合ニ於テハ事由ヲ臺帳ニ附記スベシ。

第十七條　左ニ揭ゲタル場合ニ於テハ勅裁ヲ經テ臺帳ノ登錄又ハ附記ヲ訂正スルコトヲ得。

一　登錄又ハ附記ノ事項若ハ文字ニ錯誤アリタルトキ

二　土地ノ登錄面積ト實測面積トニ相違アリタルトキ

第十八條　前二條ノ場合ニ於テ公告ヲ經タル事項ニ變更ヲ生ジタルトキハ宮内大臣之ヲ公告ス。

第十九條　第十二條第十五條乃至第十七條ノ規定ニ依リテ登錄附記抹消又ハ訂正ヲナシタルトキハ臺帳ニ其ノ年月日ヲ記入シ宮内大臣主管部局ノ長官及圖書頭之ニ認印スベシ。

第二十條　世傳御料ヨリ生ジタル果實ハ之ヲ普通御料トス其ノ變更修補又ハ改築ニ因リテ生ジタル材料亦同ジ。

第二十一條　世傳御料ニ屬スル土地ノ上ニ新ニ物權ヲ設定スルハ公用又ハ公益事業ノ爲ニ必要ナル場合ニ限ル。

前項ノ規定ニ依リテ物權ヲ設定スルニハ樞密顧問ニ諮詢シタル後之ヲ勅裁ス。

第二十二條　世傳御料ニ編入シタル不動産ニ關スル權利ハ登記ヲ要セズシテ第三者ニ對抗スルコト

ヲ得但シ編入前ニ登記アリタルモノニ付テハ編入後速ニ其ノ登記抹消ノ手續ヲナスベシ。

第三節　普通御料

第二十三條　普通御料ニ屬スル財産ノ臺帳ハ主管部局ニ於テ保管ス。

第二十四條　普通御料ニ屬スル財産ヲ無償ニテ處分スルコトヲ得ルハ左ニ揭ゲタル場合ニ限ル。

一　下賜又ハ遺賜ニ依ルトキ

二　公用又ハ公益事業ノ爲交付スルトキ

三　第三十一條ニ依リ公課ニ相當スル金額ヲ交付スルトキ

四　林野經濟ノ爲其ノ林野ヨリ生ジタル果實ヲ交付スルトキ

第二十五條　普通御料ニ屬スル不動産ノ賣拂ハ左ニ揭ゲタル場合ニ限リ隨意契約ニ依ルコトヲ得。

一　公用又ハ公益事業ノ爲賣拂フトキ

二　特別ノ緣故アル不動産ヲ其ノ緣故アル者ニ賣拂フトキ

三　國有地公有地私有地道路河川等ニ介在スル十町歩以内ノ土地ヲ賣拂フトキ

第二十六條　普通御料ニ屬スル不動産ヲ交換スルコトヲ得ルハ同一種類ノ不動産ニシテ少クモ評定價格相均キモノニ限ル。

宅地森林原野及田畑ハ之ヲ同一種類ノ不動産ト看做ス

第二十七條　普通御料ニ屬スル不動産ヲ用途ヲ指定シテ讓渡シタル場合ニ於テ指定ノ期間内ニ之ヲ其ノ用途ニ使用セザルトキ又ハ指定ノ期間其ノ使用ヲ繼續セザルトキハ之ヲ返還セシムルコトヲ得。

前項ノ場合ニ於テハ第三者ノ不動産ノ上ニ有スル權利ハ消滅ス。

前二項ノ規定ハ制限ノ登記アル場合ニ限リ第三者ニ對シテ之ヲ適用ス。

第二十八條　普通御料ニ屬スル不動産ハ必要ナル場合ニ限リ市町村ニ其ノ保護ヲ委托スルコトヲ得。

第二十九條　遺賜ハ遺命ノ效力ヲ生ズル時ニ現存スル普通御料ノ價格ノ十分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ズ。

前項ノ價格ハ普通御料ニ屬スル財産ノ臺帳ニ登錄セル價格ニ基キ前條ノ普通御料ニ該當スル價格ヲ控除シテ之ヲ算定ス。

第三十條　前條第一項ノ規定ニ反シタル遺賜ハ其ノ目的ノ價格ノ割合ニ應ジテ之ヲ減殺ス。

第三十一條　普通御料ニ屬スル不動産ニ付テハ人民之ヲ所有スル場合ニ於テ其ノ不動産又ハ之ヨリ生ズル所得ニ對シテ賦課セラルベキ公課ニ相當スル金額ヲ北海道廳府縣市區町村其ノ他公共團體

ニ交付スベシ。

第三十二條　所得稅法ノ規定ハ普通御料ニ屬スル國債劵ヨリ生ジタル收入ニ關シテ之ヲ準用ス。

第三十三條　土地收用法ノ規定ハ普通御料ニ屬スル土地ニ關シテ之ヲ準用ス。

第二章　皇族財産

第一節　總則

第三十四條　太皇太后　皇太后　皇后　皇太子　皇太子妃　皇太孫妃ノ財産ノ經理ニ關スル事項ハ皇室會計令中ニ之ヲ定ム。

第三十五條　前條ノ財産ニ關スル法律上ノ行爲ニ付テハ各其ノ宮職ノ長官ヲ以テ當事者トス。

第三十六條　皇族ノ墳墓及其ノ附屬ニ關スル事項ハ皇室陵墓令ノ定ムル所ニ依ル。

第三十七條　第十一條第三十一條乃至第三十三條ノ規定ハ皇族ノ財産ニ關シテ之ヲ準用ス。

第三十八條　皇族臣籍ニ在ル者ノ遺贈ニ因リテ受遺者タルトキハ民法第五編第六章及第七章ノ規定スル所ニ依ル。

第三十九條　本章第二節第三節及前條ノ規定ハ太皇太后　皇太后　皇后　皇太子　皇太子妃　皇太孫皇太孫妃ニ之ヲ通用セズ。

第二節　皇族ノ治産能力

第四十條　未成年ノ皇族ニシテ財産ニ關スル法律上ノ行爲ヲナスニハ其ノ法定代理人ノ同意ヲ受クベシ。

前項ノ規定ニ反シタル行爲ハ之ヲ取消スコトヲ得。

第四十一條　皇族精神ノ重患アルトキハ勅旨ヲ以テ之ニ禁治産ヲ宣告スルコトアルベシ。

前項ノ規定ニ依リ禁治産ヲ宣告セラレタル者ハ之ヲ後見ニ付ス。

第四十二條　皇族精神ノ耗弱ナルトキ又ハ身體ノ重患アルトキハ勅旨ヲ以テ之ニ準禁治産ヲ宣告スルコトアルベシ。

前項ノ規定ニ依リ準禁治産ヲ宣告セラレタル者ニハ之ニ保佐人ヲ附ス。

第四十三條　皇室典範第五十三條ニ依リ禁治産ヲ宣告セラレタル者ニハ準禁治産者ニ關スル規定ヲ準用ス。

第四十四條　禁治産又ハ準禁治産ノ原因止ミタルトキハ勅旨ヲ以テ之ヲ解除ス。

第四十五條　禁治産又ハ準禁治産ノ宣告及解除ハ皇族會議ニ諮詢シタル後之ヲ勅裁ス。

第四十六條　保佐人ハ親族會ニ於テ選定シ勅許ヲ受クベシ。

第四十七條　皇室後見令第五條乃至第八條ノ規定ハ保佐人及管財者ニ之ヲ準用ス。

皇室財産令修正案　自第四十八條至第九十二條

第三節　皇族ノ遺留財産

第四十八條　成年ノ皇族男子ハ遺留財産ヲ設定シ又ハ之ヲ增加スルコトヲ得。

第四十九條　遺留財産ノ設定又ハ增加ヲナサムト欲スル者ハ遺言ヲ以テ其ノ意思ヲ表示スルコトヲ得ズ。

第五十條　遺留財産ハ土地建物其ノ他貴重ノ物件及國債券地方債券株券ニ限ル。

第五十一條　遺留財産ノ設定又ハ增加ヲナサムト欲スル者ハ財産目錄ヲ添ヘ其ノ旨ヲ宮內大臣ニ申述スベシ。

遺言ヲ以テ遺留財産ノ設定又ハ增加ヲナサムトスル意思ヲ表示シタルトキハ其ノ遺言ノ効力ヲ生ジタル後遺言執行者ニ於テ前項ノ手續ヲナスベシ。

第五十二條　前條ノ規定ニ依リ遺留財産ノ設定又ハ增加ヲナサムトスル申述アリタルトキハ宮內大臣ハ財産目錄ヲ審査シタル後其ノ旨ヲ一週間公告スベシ。

前項ノ公告ニハ土地ニ付テハ其ノ所在字地目地番面積建物ニ付テハ其ノ所在種類其ノ他ノモノニ付テハ種類個數ヲ示スベシ。

第五十三條　前條第一項公告ノ期間滿了ノ後三十日ヲ經テ公示ノ財産ニ關シ故障ヲ申出ル者ナキトキハ宮內大臣ハ遺留財産ノ設定又ハ增加ノ申述ニ付勅裁ヲ受クベシ。

第五十四條　遺留財産ノ設定又ハ增加ノ申述ニ付キ勅裁アリタルトキハ宮內大臣ハ皇族遺留財産臺帳ニ左ノ事項ヲ登錄スベシ。

一　遺留財産設定又ハ增加ノ申述者

二　申述及勅裁ノ年月日

三　土地ハ其ノ所在字地目地番面積及彊界

四　建物ハ其ノ所在種類構造及建坪

五　其ノ他物件ハ品目及個數

六　國債券地方債券株券ハ種類及個數

第五十五條　前條ノ規定ニ依リ皇族遺留財産臺帳ニ登錄ヲナシタルトキハ宮內大臣ハ其ノ旨及登錄ノ事項ヲ公告スベシ。

第五十六條　遺留財産ノ相續ハ其ノ所有者タル皇族ノ薨去ニ因リテ開始ス。

第五十七條　遺留財産ハ設定者ヨリ出タル男系ノ皇族男子皇位繼承ノ順序ニ依リ之ヲ相續ス。

第五十八條　世傳財産ノ相續ハ之ヲ拋棄スルコトヲ得ズ。

第五十九條　遺留財産ノ相續アリタルトキハ宮內大臣ハ其ノ旨ヲ皇族遺留財産臺帳ニ附記シ且之ヲ公告スベシ。

第六十條　遺留財産ハ勅許ヲ經テ其ノ管理ヲ宮內大臣ニ委托スルコトヲ得。

第六十一條　遺留財産ハ之ヲ處分シ又ハ擔保ニ供スルコトヲ得ズ但シ土地收用法及徵發令ノ準用ヲ妨ゲズ。

第六十二條　遺留財産ハ之ヲ差押フルコトヲ得ズ。

第六十三條　遺留財産ハ勅許ヲ經テ其ノ全部又ハ一部ヲ廢止スルコトヲ得。

第四十九條ノ規定ハ遺留財産ノ廢止ニ之ヲ準用ス。

前項ノ意思表示ニ付テハ遺言ノ効力ヲ生シタル後遺言執行者ニ於テ其ノ勅許ヲ受クベシ。

第六十四條　遺留財産廢止ノ勅許アリタルトキハ宮內大臣ハ皇族遺留財産臺帳ノ登錄ヲ抹消シ且其ノ旨ヲ公告スベシ。

第六十五條　遺留財産相續人ナキ場合ニ於テハ次節ノ規定ニ依ル。

第四節　皇族ノ遺産相續

第六十六條　遺産相續ハ皇族ノ薨去ニ因リテ開始ス。

第六十七條　遺産ハ左ノ順位ニ依リ之ヲ相續ス。

一、直系卑屬

二、配偶者

三、直系尊屬

前項ノ規定ニ依リ直系卑屬又ハ直系尊屬ノ間ニ於テ遺産相續ヲナスハ親等ノ異リタル者ノ間ニ在リテハ其ノ近キ者ヲ先ニシ親等ノ同キ者ハ同順位ニ於テス。

第六十八條　前條ノ規定ニ依リ遺産相續ヲナスベキ直系卑屬ニシテ相續開始前死亡シタル場合ニ於テ其ノ者ニ直系卑屬アルトキハ其ノ直系卑屬ハ其ノ者ト同順位ニ在ルモノトス。

第六十九條　遺産相續人ハ自己ノ爲ニ相續ノ開始アリタルコトヲ知リタル時ヨリ三個月內ニ其ノ承認又ハ抛棄ヲナスベシ。

遺産相續人承認又ハ抛棄ヲナサズシテ死亡シタル場合及遺産相續人ノ無能力者ナル場合ニ於テ前項ノ期間ノ起算ニ關シテハ民法第千十八條及第千十九條ノ規定ヲ準用ス。

第七十條　遺産相續人ニシテ相續ノ抛棄ヲナサムト欲スルトキハ其ノ旨ヲ宮內大臣ニ申述スベシ。

第七十一條　遺産相續人ニシテ第六十九條第十一項ノ期間內ニ申述ヲナサザリシトキハ相續ノ承認ヲナシタルモノト看做ス。

第七十二條　遺産相續人ハ相續ノ承認ヲナシタル後ニアラザレバ相續財産ヲ處分シ又ハ擔保ニ供スルコトヲ得ズ。

第七十三條　遺産相續人相續ノ承認ヲナスマデハ相續財産ハ宮內大臣之ヲ管理ス。

第七十四條　同順位ノ遺産相續人數人アルトキハ其ノ各自ノ相續分ハ相均シキモノトス但シ直系卑屬數人アルトキハ庶子ノ相續分ハ嫡出子ノ相續分ノ二分ノ一トス。

第七十五條　第六十八條ニ依リテ遺産相續人タル直系卑屬ノ相續分ハ其ノ直系尊屬ノ受クベカリシモノニ同ジ但シ直系卑屬數人アルトキハ其ノ各自ノ直系尊屬數人アルトキハ其ノ各自ノ直系尊屬ノ受クベカリシ部分ニ付キ前條ノ規定ニ從ヒテ其ノ相續分ヲ定ム。

第七十六條　被相續人ハ前二條ノ規定ニ拘ラズ遺言ヲ以テ共同遺産相續人ノ相續分ヲ定ムルコトヲ得。

被相續人ニ於テ共同遺産相續人中ノ一人又ハ數人ノ相續分ノミヲ定メタルトキハ他ノ共同遺産相續人ノ相續分ハ前二條ノ規定ニ依リテ之ヲ定ム。

第七十七條　共同遺產相續人中被相續人ヨリ遺贈ヲ受ケタル者アルトキハ前三條ノ規定ニ依リテ算定シタル相續分ノ中ヨリ其ノ遺贈ノ價格ヲ控除シ其ノ殘額ヲ以テ其ノ者ノ相續分トス。

遺贈ノ價格ニシテ相續分ノ價格ニ等ク又ハ之ニ超過スルトキハ受遺者ハ相續分ヲ受クルコトヲ得ズ。

被相續人遺言ヲ以テ前二項ノ規定ニ異リタル意思ヲ表示シタルトキハ其ノ意思ニ從フ。

第七十八條　被相續人ハ遺言ヲ以テ相續財產分割ノ方法ヲ定ムルコトヲ得。

第七十九條　各共同遺產相續人ハ相續財產ノ分割前ニ在リテハ其ノ相續分ヲ處分シ又ハ擔保ニ供スルコトヲ得ズ。

第八十條　相續財產ノ價格ハ宮內大臣ノ命ジタル評價人ノ評價ニ依リ之ヲ算定ス。

第八十一條　民法第九百六十九條第千一條乃至第千三條第千十一條乃至第千十六條及第千三十九條ノ規定ハ皇族ノ遺產相續ニ關シテ之ヲ準用ス。

第八十二條　遺產相續人ナキ場合ニ於テハ宮內大臣ヲ以テ遺產ノ淸算人トス。

前項ノ場合ニ於テハ宮內大臣其ノ旨ヲ公告スベシ。

第八十三條　前條ノ公告ヲナシタル後三十日ヲ經テ公示ノ遺產ニ關シ權利ヲ主張スル者ナキトキハ其ノ遺產ハ普通御料ニ歸屬ス。

第八十四條　第八十二條ノ場合ニ於テハ遺產ノ限度ニ於テノミ被相續人ノ債務及遺贈ヲ辨濟ス。

第八十五條　皇族臣籍ニ在ル者ノ遺產相續人タルトキハ民法第五編第二章乃至第四章及第七章ノ規定スル所ニ依ル。

第八十六條　本節ノ規定ハ太皇太后皇太后及皇后ニ適用セズ但シ其ノ遺產ハ普通御料ニ歸屬ス。

第三章　皇室經濟會議

第八十七條　皇室ノ經濟ニ關スル事項ヲ諮詢スル爲皇室經濟會議ヲ置ク。

第八十八條　皇室經濟會議ニ諮詢スベキ事項ノ概目左ノ如シ。

一　皇室經費ノ豫算及決算ニ關スル事項

二　世傳御料ノ編入及解除ニ關スル事項

三　豫算外ノ支出ニ關スル事項

四　資金ト國債券地方債券トノ轉換ニ關スル事項

五　世傳御料ニ屬スル土地ニ設定スル物權ニ關スル事項

六　不動產又ハ重要ナル動產ノ權利ノ得喪ニ關スル事項

第八十九條　皇室經濟會議ハ勅命セラレタル皇室經濟顧問五人以內及宮內大臣內大臣ヲ以テ之ヲ組

織ス。

第九十條　內藏頭御料局長帝室會計審査局長ハ皇室經濟會議ニ列シ意見ヲ述ブルコトヲ得。

第九十一條　皇室經濟會議ニ關シ必要ナル規程ハ其ノ會議ニ於テ之ヲ議定シ勅裁ヲ受クベシ。

第九十二條　皇室經濟會議ニ關スル庶務ハ宮內高等官ヲシテ之ヲ管掌セシム。

皇室財産令義解草案

第一章　御　料

第一節　總　則

第一條　御料ハ世傳御料及普通御料トス。

恭テ按ズルニ本條御料ヲ大別シテ二種トス世傳御料ハ皇室典範ノ昭揭スル所ナリ世傳御料ニ非ザル皇室ノ財産ハ其ノ何項タルニ論ナク今之ヲ目シテ普通御料ト曰フ。

第二條　御料ニ關スル法律上ノ行爲ニ付テハ本令其ノ他ノ皇室令又ハ官制ニ別段ノ定アル場合ノ外宮內大臣ヲ以テ其ノ當事者トス但シ宮內大臣ハ主管部局ノ長官ヲシテ代理セシムルコトヲ得。

恭テ按ズルニ御料ノ主體ハ至尊タルコト言說ヲ待テ始メテ知ルベキニ非ズ然レドモ御料ニ關スル法律上ノ行爲ニ付キ至尊卽チ其ノ當事者タル地位ニ在ルトナスハ宸嚴ヲ干冒スルノ虞ナキコト能ハズ因テ定メテ宮內大臣ヲ以テ當事者トス是レ其ノ地位ニ視テ當ニ然ルベキニ由ルナリ而シテ行爲ニ細大アリ事體ニ輕重アリ其ノ末節ニ至テモ猶宮內大臣ヲシテ之ニ當ラシムルハ實際ノ運用ヲ

捷活ニスル所以ニ非ズ從テ本令其ノ他ノ皇室令又ハ宮內部局ノ官制ニ於テ之ガ除外例ナキコト能ハザルハ固ヨリ其ノ理ニシテ卽チ之ナキモ亦宜ク宮內大臣ハ主管部局ノ長官ヲシテ代理セシムルコトヲ妨ゲザルモノトスルヲ要スベキナリ本條中法律上ノ行爲トアルハ法律上ノ效果ヲ生ズベキ一切ノ行爲ヲ指示ス故ニ訴訟ニ關スル行爲ノ如キモ亦此ノ中ニ包含ス。

第三條　山陵ニ關スル事項ハ皇室陵墓令ノ定ムル所ニ依ル。

恭テ按ズルニ山陵及之ニ關係ノ土地物件モ亦皆御料ナリ然レドモ一般御料ニ關スル條規ヲ以テ律スベカラザルヲ以テ本條之ヲ除外シ別段ノ皇室令ニ依ルベキコトヲ示ス其ノ山陵ニ關スル事項ト謂フハ卽チ止々山陵ノミナラズ山陵ニ關係シ歷史上參考トシテ保存スベキ土地其ノ他ノ物件ニ關スル事項ノ如キヲモ包含セルヲ知ルベシ。

第四條　歲入歲出工事財產ノ管理及財產上ノ權利ノ得喪ニ關スル事項ハ本令ニ別段ノ定アルモノノ外皇室會計令ノ定ムル所ニ依ル。

恭テ按ズルニ皇室ノ歲入歲出工事財產ノ管理及財產上ノ權利ノ得喪ニ關スル事項ハ固ヨリ本令ノ範圍ニ屬シ本令中亦實ニ二三之ニ關スル規定ヲ設ケタルモノアリ然レドモ此等ノ度支會計ニ關スル事項ハ勢多岐ニ涉ルヲ以テ其ノ專規ヲ別行シ彼此對勘シテ之ヲ確覈スルノ便トス皇室典範第四十八條ニ於テモ亦既ニ皇室會計法ヲ以テ之ヲ定ムベキコトヲ言ヘリ。

第五條　御料ニ屬スル土地ノ疆界線上ニハ界標圍障牆壁又ハ溝渠ヲ設クベシ。

恭テ按ズルニ御料ニ屬スル土地ハ常ニ其ノ疆界ヲ淸劃シ以テ侵潤滋擾ノ漸ヲ防制スルコトヲ要ス本條ハ卽チ之カ爲ニ設ク。

第六條　國有林野法第四條乃至第六條ノ規定ハ御料ニ屬スル土地ニ關シ之ヲ準用ス。

前項ノ規定ニ依リテナシタル疆界査定ニ不服アルトキハ隣接地所有者ハ疆界査定ノ通告ヲ受ケタル日ヨリ三個月內ニ限リ訴訟ヲ提起スルコトヲ得。

恭テ按ズルニ御料ニ屬スル土地ハ私人ノ所有ト同視スベカラズ世傳御料尤然リ而シテ所謂土地ハ森林原野ヲ包含ス故ニ國有林野法ノ規定ヲ準用セリ其ノ第四條乃至第六條ハ大要疆界査定及測量等ノ踏勘ヲナスニ當リ隣地ノ圈內ニ入リ若ハ支障トナルベキ隣地ノ木竹ヲ伐採スルノ必要アルニ於テ必シモ其ノ所有者ノ承諾ヲ經ズシテ之ヲ行フコトヲ得ルニ在ルナリ隣接地所有者ニ疆界査定不服ノ訴訟ヲ提起スルコトヲ許シ其ノ期限ヲ三個月內ト定メタルハ疆界ハ永ク懸案トシテ之ヲ不定ニ置クニ宜カラザルヲ以テナリ。

第七條　民法第一編第二章乃至第六章第二編第三編商法及附屬法令ノ規定ハ皇室典範及本令其ノ他ノ皇室令ニ牴觸セザル範圍內ニ於テ御料ニ關シ之ヲ準用ス。

恭テ按ズルニ凡ソ財產上ノ權利關係ニ付テハ上下ノ通軌トシテ大體ニ於テ其ノ轍ヲ異ニセザルベ

カラザルノ必要ナシ故ニ民法第一編第二章乃至第六章第二編第三編商法及附屬法令ノ規定ハ皇室諸令ニ牴觸セザル範圍内ニ於テ御料ニ關シ之ヲ準用スルコトトセリ民法第一編中其ノ第一章ヲ除キタルハ之ニ相當スル特別ノ規定ヲ皇族身位令及本令ニ設ケタルニ由ルナリ又附屬法令トハ其ノ包容スル所甚ダ泛廣ナルモ民法及商法ノ施行法不動産登記法供托法競賣法等ハ蓋其ノ尤ナルモノナリ現ニ普通法ニ於テモ此ノ用例ヲ見ル卽チ商法施行法第九十四條私設鐵道法第九十七條ノ如キ是ナリ惟フニ民法第一編第二章乃至第六章ノ規定ハ財産ニノミ關スルモノニ非ズ商法亦然リ而シテ本條特ニ御料ニ關シ之ヲ準用スルコトヲ示ストキハ則チ其ノ財産ニ關セザルモノハ自ラ除外セラレタルヲ知ルベシ他ノ法律上ノ行爲ニ至テハ之ヲ準用スルコトヲ謂ハザルモ皇室諸令ノ運用ニ於テ何等支障ヲ見ルコトナキナリ。

太政官職制章程及諸規則

天皇陛下親臨

正　院

太政大臣

天皇陛下ヲ輔弼シ萬機ヲ統理スルコトヲ掌ル諸上書ヲ奏聞シテ制可ノ裁印ヲ鈐ス

左右大臣

職掌太政大臣ニ亞ク太政大臣缺席ノ時ハ其事務ヲ代理スルヲ得ル

參議

萬機ニ參與議判スル事ヲ掌ル

大　内　史

諸機務ノ文書法案ヲ勘査シ國史ヲ修メ官記位記等ノ事ヲ掌ル

權　大　内　史

職掌大内史ニ同シ

少内史

機務ノ文案ヲ草シ官記位記ヲ造リ記錄ノ事ヲ掌ル

權少内史

職掌少内史ニ同シ

大外史

文書記錄傳達受付官中用度等ノ事ヲ掌ル

權大外史

職掌大外史ニ同シ

少外史

文書法案記錄等ノ事ヲ掌ル

權少外史

職掌少外史ニ同シ

大主記

中主記

權中主記

少主記

權少主記

各課ヲ分テ官中書記計算其他ノ事務ヲ處ス

内史所管五課一局ヲ置キ各其事務ヲ處ス其課長局長ハ奏任以上ノ官之ヲ專任又ハ兼任ス

履歷課

監部課

庶務課

歷史課

地誌課

飜譯局

外史所管二課二局ヲ置キ各其事務ヲ處ス其課長局長ハ奏任以上ノ官之ヲ專任又ハ兼任ス

記錄課

用度課

印書局

博覽會事務局

式部寮

頭

寮中諸官員ノ首長ニシテ式禮祭祀一切ノ事務ヲ管理スル事ヲ掌ル

寮中諸官員ノ處務ヲ指令シ各課ノ事ヲ統督ス

寮中諸般ノ事務章程成規ニ照シテ之ヲ踐行整理ス

掌管ノ事務ニ於テハ三職ニ對シ其當否ヲ辯明スルヲ得ル

各課ヲ廢立シ及寮中ノ諸規則ヲ更正スル等ノ事アレハ正院ノ決裁ヲ乞テ之ヲ處置ス

寮中諸官員ノ能否勤惰ヲ監視シテ之ヲ進退黜陟スルト其員ヲ增減スル等ハ審按具狀シテ正院ノ決裁ヲ乞フ

權頭

職掌頭ニ同シ

助

寮中各課ノ長トナリ其事務ヲ擔當スル事ヲ掌ル

權助

職掌助ニ同シ

大掌典

祭事神饌ヲ掌ル

大屬

中掌典

權大屬

少掌典

中屬

權中屬

大神部

大舍人番長

大伶人

少屬

中神部

大舍人

中伶人
權少屬
少神部
權大舍人
少伶人
各課ヲ分テ寮中諸般ノ事務ヲ處ス

左院職制

議長　一員
會議ヲ提掌シ院中ノ規則ヲ監視シ諸務ヲ總判シ八等官以下ヲ任免ス
正院及各省竝國會議シテ本院ノ決議ヲ申明スルヲ得
會議ノ時可否同數ナル時ハ之ヲ判決スルヲ得

副議長　一員
議長ヲ輔佐スルヲ掌ル議長缺席或ハ缺員ノ時之ヲ代理ス

議官
會議ノ時其議事ノ要旨ヲ承ケ其可否ヲ議定ス
平常ハ分課ヲ以テ各其擔當課中ニ在テ其議事ヲ可否シ兼テ之ヲ編纂スルヲ掌ル

書記官
文案ヲ起シ垂問議案建白書ヲ査檢シ常額金ノ主守出納及書記生筆生ノ分課ヲ總轄シ等外以下ノ監督ヲ掌ル
各課ニ分配シテ議案及課中編纂等ヲ草案ス

書記生
書記官ニ付屬シテ記錄往復出納ノ事ヲ掌ル

筆生
淨寫計算ノ事ヲ掌ル

右院

各省長官次官
各當務實際ノ可否ヲ議スルヲ掌ル
勅命ヲ以テ臨時之ヲ開ク

太政官

正院事務章程

正院ハ

天皇陛下臨御シテ萬機ヲ總判シ太政大臣左右大臣之ヲ輔弼シ參議之ヲ議判シテ庶政ヲ奬督スル所ナリ

太政大臣左右大臣ハ各一員參議ハ各省（外務内務大藏陸軍海軍工部文部司法）ノ卿ヲ兼任ス

正院ハ立法行政ノ權ヲ統一シ得失緩急ヲ審案シ實際ニ附スヘキモノハ奏書ニ允裁ノ鈴印ヲナシ然ル後主任ニ下達シテ之ヲ處分セシム若シ大臣參議ノ内當痾不參ノ者アレハ回議ヲ其邸ニ送リ其所見ヲ取ルヘシ

凡ソ允裁ヲ乞フ奏書ハ三職議判ノ上國憲民法ニ係ルモノハ内史其部類ヲ分チ之ヲ本帖及副本ニ寫シ本帖ニハ三職ノ鈴印ヲ受ケテ之ヲ秘庫ニ藏ム

凡ソ國内一般ニ布告スル制度條例及勅旨特例ノ事件ハ太政大臣奉勅シテ本院ヨリ之ヲ發令ス

諸省使寮司局ヲ廢立分合シ行政事務取捨ノ便宜ヲ謀リ緩急ヲ判スルハ皆本院ノ特權タリ

勅書奏書ニ加名鈴印スルハ太政大臣ノ任タルヘシ

凡ソ勅任官ノ薦舉免黜ハ

震斷ニ出テ太政大臣之ヲ補贊シ必ス參議ニ諮リ以テ之ヲ奉行ス

凡ソ奏任官ノ進退ハ其所轄ノ奏聞ニヨルト雖モ必ス參議ニ諮リ太政大臣之ヲ處置ス

本院中判任官ノ進退ハ其所轄ノ具狀ヲ得内史ヲシテ之ヲ處置セシム

凡ソ裁判上重大ノ訟獄アレハ參議其事ヲ審議シ或ハ臨時裁判所ニ出席シテ之ヲ監視スル事アルヘシ

議政行政ニ屬スル諸文書法案又ハ勅書令條差除黜陟ノ記錄等ハ内史ニ付シテ司掌セシム

恒例ノ公文既發ノ命令通常ノ達書等ハ外史ニ付シテ司掌セシム

内外史所屬ノ各局課式部寮等ノ事務ハ各其主任ヲシテ之ヲ管理セシム

本院中專掌スル事務ノ條款左ノ如シ

第一款

一般行政事業ノ緩急利害ヲ考勘シ之ヲ裁定スル事

第二款

賞罰ヲ裁定スル事

第三款

諸制度諸法律及諸規則ヲ改革創立スル事

第四款

歲入ノ事

既定ノ諸租稅ヲ增減變更スル事

新ニ諸租稅ヲ興ス事

第五款

歲出ノ事

諸官省各局各地方官公費ノ額ヲ定ムル事

諸官祿及旅費其他雜費ノ制限ヲ定ムル事

諸族ノ秩祿及社寺給與ノ制限ヲ定ムル事

臨時諸費ノ制限ヲ定ムル事

非常ノ軍費及國費ヲ裁定スル事

第六款

貨幣制造ノ方法及其品量ヲ定ムル事

第七款

金券ヲ發行スル事

第八款

內外國債ノ事

第九款

度量衡等ヲ改正スル事

第十款

州郡ノ經界ヲ畫定シ及府縣ノ制置土地ノ名稱等ヲ更正スル事

第十一款

諸港津ヲ開閉スル事

第十二款

驛遞運輸ノ法及郵便規則ヲ改メ道路ヲ變換シ里程ヲ釐正スル事

第十三款

地方警邏ノ規則ヲ定メ或ハ之ヲ變革スル事

第十四款

鐵道電信ノ行線燈臺設置ノ場所ヲ定ムル事

第十五款

太政官職制章程及諸規則

兵制ヲ改革スル事

第十六款

兵員ヲ增減スル事

第十七款

鎭臺兵營及提督府等ヲ變更スル事

第十八款

城壘武庫等ヲ築造スル事

第十九款

裁判所ノ權限ヲ定ムル事

第二十款

各國條約ノ事

第二十一款

官員ヲ增減スル事

以上各款第三ヨリ以下ハ左院ノ議案ヲ具セシメ之ヲ裁定ス

御批

右職制事務章程

上裁欽定スル所ナリ能ク之ヲ守リ其程限ヲ愆ル勿レ

内史官事務章程

大内史

詔勅及官記位記ヲ掌リ直ニ太政大臣ノ宣ヲ奉行ス

太政大臣ノ秘書記ヲ兼任ス

太政官印及正院ノ大印ヲ預リ大臣ノ命ニヨリ之ヲ諸公書ニ押ス

大内史專任ノ科目左ノ通リ

詔勅國書委任狀

諸布告文規則案及各章程等ノ勘査

官記位記

諸官員進退ノ具狀

諸監察ノ事

官省月報考課ノ檢査

特命ニ出ツル事務

機密ニシテ未發ノ事件

凡ソ此條件ヲ專任トス故ニ少内史及奏任出仕ヲ統率シ之ヲ樞密ノ地ニ置キ他官ノ名刺ヲ通セスシテ入ルヲ許サヽル局トス

大内史ハ履歴監部二課ノ長タルヘシ

權大内史ハ各課ノ内ヲ分任シ又ハ一課ヲ專任スルコトアルヘシ

内史所管ノ各課左ノ通リ

履歴課

諸官員ノ履歴ヲ勘査ス

監部課

監察ノ事ヲ掌ル

庶務課

一般ノ諸雜務ヲ勘査ス

歴史課

國史ヲ編輯スル事ヲ掌ル

地誌課

地誌地圖ヲ編輯スル事ヲ掌ル

飜譯局

諸飜譯ノ事ヲ掌ル

凡ソ此五課一局ノ事務ヲ幹理結括スルハ大内史ノ任タルヘシ

左院ヨリ廻送シタル議案ハ之ヲ三職ニ出シ其決判ヲ取リ之ヲ左院ニ差返スヘシ

凡ソ諸公文書ヲ勘査スルニ其事務ノ重ニ關スル課ニテ主査シ其事ノ旁及スルモノヲ歴査ニ供スル事ト心得ヘシ

一、紙中數事項ヲ並擧シタルモノハ各課之ヲ歴査シ其事項ノ先書シタル課ニ於テ主査ト心得ヘシ

一、事項兩分課ノ勘査ニ屬スルモノ之ヲ合シテ一議案ニ立ツヘキモノハ主査ノ課ニテ某説ヲ收メテ立按シ其事ノ結束ヲナスヘシ

内史ハ外史ヨリ送致スル諸公文ノ件銘ヲ簿帖ニ登記シ議案ヲ造リ勘査謬リナキヲ保シテ議案ニ供スヘシ

三職ノ考案ニヨリ新ニ規則ヲ立テ又ハ舊規ヲ改正スル事アレハ其要旨ヲ記シテ議案ニ供ス

官中判任以下ノ進退正權大内史ノ具狀ヲ以テ參議之ヲ決ス

各課中處務ノ順序及課程等ハ各課長考案ヲ具シ大内史ニ商議シ三職ノ決定ヲ受クヘシ

歴史課章程

一　本課ハ國史ヲ編輯スルコトヲ掌ル所ナリ

一　本史ハ制度典章官省地方ノ沿革施設等ヨリ朝廷文書及ヒ列藩諸家ノ記錄ヲ博採シ之ヲ撰述シ以テ廟堂ノ廣視通鑑ニ供スヘシ一ハ順次其上ニ遡リ一ハ將來ニ就キ陸續編次以テ本史ノ上編下編ト爲スヘシ

一　藩史ハ慶元以降封建ノ形勢藩治ノ體裁ヲ誌シ戸口租徵會計法律刑法軍務等ノ志表ヲ制シ以テ本史ノ參考ニ備フヘシ

一　府縣史ハ廢藩置縣以來土地ノ分合民俗ノ趨舍ヨリ官員設置祿制ノ沿革等ニ至ル迄之ヲ詳ニシ以テ本史ノ考據ニ備フヘシ

一　課中ノ事務分テ六トス編輯校正幹事受付圖書書記是ナリ各務或ハ專任或ハ兼任以テ擔當從事スヘシ

一　課務ニ關スル議案文書ヲ草シ或ハ申達往復スル等必ス課長ノ示令ヲ受クヘシ

地誌課章程

一　本課ハ地誌地圖ヲ編輯スル所ナリ

一　誌圖ハ州縣ノ分合廢置戸口ノ贏縮租稅ノ多寡風俗ノ淳漓ヨリ以テ山海江湖礦植諸産等ニ至ル迄詳ニ之ヲ誌スヘシ

一　課中ノ事務分テ六トス編輯立按庶務受付製圖書記是ナリ各務或ハ專任或ハ兼任以テ擔當從事スヘシ

一　課務ニ關スル議案文書ヲ草シ或ハ申達往復スル等必ス課長ノ示令ヲ受クヘシ

外史官事務章程

大外史

正院ノ小印ヲ預リ太政大臣ノ命ニヨリ諸公書ニ押スヘシ

奏問受付傳達ヲ掌ル

大外史專任ノ科目左ノ通リ

詔勅國書委任狀諸布告指令等ノ傳達各省使寮司及府縣諸公文書ノ受付

官記位記ノ式部ニ送達スル事
官員出張在勤等ヲ命スル書及賞典等ノ諸達
官中諸達
恒例ニヨリ布達スル事
諸屆
恒例ニ照シテ處分スヘキ通常ノ事件
凡ソ此條件ヲ專任トス故ニ少外史及奏任出仕ヲ統率シ記錄課ノ長タルヘシ
外史所管ノ各課ハ左ノ通リ
記錄課　受付申達此課ニテ分任ス
官中一切ノ記錄ヲ編輯スルコトヲ掌ル
用度課
官中一切用度ノ事ヲ掌ル
印書局
一切印刷ノ事ヲ掌ル

博覽會事務局

此二課二局ノ事務ヲ幹理結括スルハ大外史ノ任トス
凡ソ各省使寮司府縣等ヨリ上進スル諸公文書中恒例通常ノ事件ハ成規ニ據リ舊格ニ照シテ指令ノ文案ヲ具シ之ヲ奏シ決裁ノ上奉行スヘシ
定式諸屆書ノ類ハ其事柄ニヨリ直ニ之ヲ奏シ或ハ其類ヲ合輯シテ毎週又ハ毎月ト定メ覽閲ニ供スヘシ
前兩條ニ所載ノ外ハ一切ノ公文書類各省使寮司府縣ヲ區別シ其件銘竝號數月日ヲ簿帖ニ登記シ卽日內史ニ送致スヘシ
奏聞允裁ノ諸公文書ハ卽日又ハ翌日迄ニ奉行スルヲ恒例トス
但奉行セハ其名ヲ簿帖ニ記スヘシ
諸公文書類允裁ヲ經テ奉行セシモノ直ニ記錄課ニ付シ謄寫編輯セシムヘシ
但編輯謄寫ノ體書冊簿帖ノ法一定ノ規則ニヨルヘシ
官中用度ノ定額ニ據リ恒例ニ照スヘキモノハ之ヲ處分シ都テ諸會計ノ證印ヲ押スヘシ
官中定額恒例外ノ諸用度ハ參議ノ議決ヲ受ケ處置スヘシ

正院月報書並各課考課狀ヲ毎月又ハ毎三月三職ニ送ルヘシ

外史所管判任以下ノ官員ノ進退等外ハ專決シ等內ハ大內史ノ決ヲ取ルヘシ

但等外ト雖トモ增減スル時ハ大內史ニ諮ルヘシ

各課中處務ノ順序規則等ハ制定改正增減トモ考案ヲ具シ大內史ニ商議スヘシ

印書局章程

一　本局ハ一切印刷ノ事ヲ掌ル所ナリ

一　局長ハ局中各課ノ事務ヲ總管シ官員ノ勤惰ヲ監シ判任以下ノ進退黜陟ヲ具狀シ外國教師ヲ雇ヒ諸職工ヲ督ス

一　本院ヨリ出ル所ノ布告日誌ノ類其他官版書籍並ニ際省使寮等ノ布令報告書類ヲ印行ス若シ印刷書類常額金ヲ以テ辨シ難キ者ハ前金ヲ受クヘシ

但シ右書類定數進達ノ餘ハ便宜發賣シ其金ハ毎月大藏省ヘ納付スヘシ

一　公私ノ需ニ應シ諸書類ヲ印行スル事

但シ名刺引札類ヲ除クノ外私ノ需ハ必ス豫メ官許ヲ得ヘシ其書類發賣金ハ入費ヲ除キ利益金ハ全ク大藏省ニ納付スヘシ

左ノ事件上下二款ニ分チ上款ハ申請シ下款ハ專行スヘシ

上　款

一　官員ヲ黜陟シ又ハ增減スル事

一　外國人ヲ雇入或ハ雇繼ヲナス事

一　全國ノ規模ニ關スル工業ヲ創メ或ハ規則ヲ設クル事

一　常額外ノ金ヲ以テ工業ヲ創メ或ハ器械ヲ購スル事

下　款

一　職工及見習生ヲ雇入又ハ其給料ヲ增減スル事

一　勸奬ノ爲メ職工及見習生ヘ一時經費ヲ與フル事

以上二條ハ專行スト雖トモ必ス大藏省ヘ報告ス可シ

左院事務章程

第一段

本院正則ノ事

第一條　本院ハ議政官ニシテ正院ノ輔佐トナリ其垂問ノ事ヲ議スル所ナリ

第二條　凡テ制度條例ヲ創立シ或ハ成規定則ヲ增損更革スル事ハ正院ノ垂問ニ依テ本院之ヲ決議シ以テ上奏スヘシ

第三條　一般ニ布告スヘキ諸法律制度ハ正院ヨリ必ス先ツ本院ニ下シ其利害得失ヲ評論セシムヘシ

第四條　議長院中決議ノ事ニ付正院ニ出テ可否ヲ審辨スルヲ得ヘシ其之ヲ行フト否トハ行政上ノ事務ニ付議長之ニ與リ論スルヲ得可ラス

第五條　凡テ事ヲ議スル時ハ衆論ノ協同スル所ニ從ヒ其說ノ多ヲ取ルヘシ若シ可否同數ナル時ハ議長之ヲ決スヘシ

第六條　奏任官ヲ黜陟轉任セシムルコト正院ノ審辨ニアリト雖トモ亦本院ノ具案ヲ徵スヘシ

第七條　議事ニ當リ行政ノ官員ニ諮問スヘキコトアルトキハ正院ニ乞テ其人ヲ出席セシムヘシ

第八條　議事ニ付取調ノ事件アレハ議官ヲ諸省ニ遣ハシ又時トシテハ地方ヲ巡回セシムヘシ

第九條　議事章程及ヒ本院ノ開閉ハ特裁ニ據テ定ムヘシ

第十條　此章程更ニ增補改正スヘキコトアレハ尙衆議ヲ盡シ　上裁ヲ經テ定ムヘシ

第　二　段

正院ヨリ本院ヘ臨時下命アルヘキ事宜

第十一條　地方官會議ノ時正院垂問ノ議案ヲ申明セン爲ニ本院議官ヲ其會議所ニ遣ハシ旨趣ヲ審詳辯論セシムヘシ

第十二條　人民ヨリ支配官廳ニ對シテ起セル訴訟アルトキハ正院ヨリ之ヲ本院ニ下シ裁判セシムヘシ

第十三條　正院ニ於テ國憲ヲ議シ或ハ職制章程等ヲ創立シ又ハ之ヲ增損スルコトアレハ特命ヲ以テ本院議官ヲ選任シ其事ニ與リ議セシムヘシ

第　三　段

議官ノ分課ヲ設ケ及ヒ制度條例ヲ編纂スルコト

第十四條　本院ハ議政ヲ以テ職務トシ其事ノ多端ニ涉ルカ故ニ議官ヲ分テ六課ニ分配シ之ヲ掌ラシメ且正院垂問ノ用ニ備フル爲ニ國ノ內外ヲ叙テ以テ其良法ヲ編纂シ他日ノ參考ニ便ニス

內　務　課

戶籍病院貧院貧民救助獄舍徒場邏卒道路橋梁舟車驛遞電信書籍免許諸會社規則專買免許等及ヒ神社寺院學校教法音樂等ニ關スル方法規則ヲ議スルヲ掌ル

但シ右方法規則ヲ議定スル時ノ參考ニ備フル爲ニ編纂スルコト以下諸課皆同シ

外　務　課

條約接待貿易等ニ關スル方法規則ヲ議定セルヲ掌ル

財務課

諸稅竝ニ出納ニ關スル條件商買相互ニ貿易賣買金券發行會社規則竝貨幣產物國債等凡テ其增減出入ニ關スル方法規則ヲ議定スルヲ掌ル

兵務課

海陸軍律諸軍器團營城隍等ニ關スル方法規則ヲ議定スルヲ掌ル

法制課

民法訴訟法治罪法刑法商法及ヒ官職位階儀仗服飾禮式等ニ關スル方法規則ヲ議定スルヲ掌ル

諸業課

農工商三業之ニ屬スル雜業竝ニ漁獵採礦開墾治水諸製作等ニ關スル方法規則ヲ議定スルヲ掌ル

以上六課其課務ノ繁簡ニ據テ之ヲ分合スヘシ

第十五條　正院ヨリ布告セシ制度條例ハ悉ク本院ニ於テ年月ヲ叙シ之ヲ集錄シテ以テ他日ノ檢閱ニ便スヘシ

右職制竝事務章程

上裁欽定スル所ナリ能ク之ヲ守リ其程限ヲ愆ル勿レ

中仙道筋鐵道建築見込書

建築首長　ボーイル

日本鐵道

日本ニ於テ外國同樣人民鐵道之利益ヲ了解スルニ至候故鐵道蔓延相成候樣益々希望致可申義更ニ疑ヒ無之候就テハ政府鐵道ヲ擴張セント欲スルニ方ツテ先ツ何レノ線ヨリ始ムルヲ最モ好シト致候哉豫メ熟考致置候義當然ニテ且肝要之事ト奉存候

別紙日本繪圖ノ朱線ハ神戸大阪京都之間建築之鐵道竝京都ヨリ大津草津前原鹽津敦賀迄杙打候道筋ニ有之候又其朱點線ハ江戸横濱線ト京都大阪線ト連續之爲メ東海道海岸通カ或ハ中仙道近傍ニテ日本之中部ヲ通シテ鐵道建築可相成カヲ顯ス爲ニ有之候

政府ニ於テハ中仙道線ト名附クルモノヲ建築セン事ヲ好候樣承知致候ニ付二條ノ大線ヲ以テ一ハ中仙道經過ノ最モ眞路ヲ簡易ニ記シ又其一ハ別ノ道筋ニシテ却テ長遠ニ候得共數國ヲ開クノ利益竝江

戸京都及南方諸地ト新潟ト直ニ通達スルノ利益有之候

右中仙道線ハ京都ト敦賀トノ線ノ琵琶湖上前原ノ北一里ノ地ヨリ岐カレ鮫ケ井加納鵜沼ヲ經テ木曾川筋ヲ上リ洗馬近傍ニテ轉シテ下ノ諏訪ニ至リ南東ニ廻轉シ小田井近傍ニテ再ヒ中仙道ニ近接シ坂本ヲ巡リテ高崎之近隣ニ至ル此地ヨリ江戸マテ平地ナリ

下ノ諏訪之南東之廻路ト且又沓掛近傍之高地ヨリ坂本下之低地ニ下ルニ就テハ建築大ニ困難ニ可有之候

高崎ト洗馬ノ間ニ右云ヘル遠路ノ線アリ　但シ總テ建築稍ミ輕易ナリ　此線高崎ヨリ沼田ヲ經テ北ニ進ミソレヨリ三國峠ヲ越ヘ千限川ニ至ルヘシ此川ニ沿フテ北ノ方新潟迄容易ク通スヘシ又此地ヨリ飯山松本ヲ經テ南西シ洗馬ニ至ルヘシ

右之高崎ヨリ三國峠ヲ經タル線ハ東西兩京ノ通路ノミナラズ日本中部ノ鐵道本筋ト新潟之地ト容易ク連續セシムル便利ニ相成別而人民肝要ノモノニ可有之候○下ノ諏訪ヲ經タル洗馬ト高崎ノ間ノ線ハ前書ノモノヨリハ短ク候得共却テ建築困難之上ニ右之千限川ニ沿フタル線ヨリハ大ニ荒寒不利益之地ヲ經過可致候右千限川ヲ經ル道筋ハ琵琶湖ヨリ江戸迄凡ソ百四十六里ニ可有之候又下ノ諏訪ヲ經ル近道ハ百二十里可有之候

江戸ト京都ト鐵道之終ノ連續之義ニ付テハ江戸ト高崎之間廿六里ニシテ右圖面上ニ點線アリテ三國峠ヲ超ヘテ通スヘキカ或ハ坂本等ヲ經過スヘキカ何レニテモ其連續スヘキ道筋ヲ顯スナリ此七十「マイル」嶽ノ道筋ハ耕作多クシテ且絹絲產出ノ地ヲ經過シ鐵道幹線ノ第一部トナリテ自ラ東京線端ニ於テ始ムヘキ建築事業ノ第一部ニ可有之候

右ニ云フ如ク此中部大線ノ道筋ハ琵琶湖ヨリ美濃之加納ヲ經過ス此地ヨリ尾張入海ノ上端名古屋宮迄ノ距離唯十里ニ有之候此短キ里程ニ鐵道建築致候得者鐵道本筋ト他ノ肝要ノ地ト連接スルノミニ非ス東海道海岸筋横濱ニ向テ必ス運輸ヲ起スヘキ場所モ別之運輸ヲ開クニ及申間敷候

右ニ記スルモノハ別紙圖面上ノ線ト相照ス爲肝要ニ有之候也

一千八百七十四年二月十八日

建築首長　アノル、ウヤカルス、ボーイル

指揮官　ダブルユ、ダブルユ、カーギル氏

貴下

琉球處分提綱

從明治四年至同十二年

一、此書ハ伊藤内務卿ノ命ニ依リ專ラ維新以來琉球處分ニ關スル要領ノミヲ揭グ。

一、琉球ニ關スル官省ノ達將來ノ考據トナルベキモノハ其全文ヲ擧グ、其他該藩ノ歎願書派出官ノ答辯書等ノ如キハ其大旨ヲ揭ゲテ全文ヲ略ス如シ。詳細ヲ要スル者ハ原書ニ就テ看ルベシ。

一、臺灣處分ニ付大久保大使清政府ト談判ノ大略ヲ揭グル者ハ、征蕃ノ役專ラ琉球人民ノ遭害ニ起因スレバナリ。

一、此書各種ノ簿書ニ就テ蒐聚シ甲詳乙粗ヲ免レズト雖モ其要領ノ如キハ收載尤モ意ヲ致ス。

明治十二年十二月

内務一等屬　遠藤達
内務二等屬　後藤攷臣

一、明治四年七月十四日ノ公布ヲ以テ全國一般ニ藩ヲ廢シ縣ヲ置ク琉球鹿兒島縣ノ管轄ニ屬ス。

一、同五年正月鹿兒島縣ハ縣官奈良原幸五郎伊地知貞馨ノ兩名ヲ琉球ニ派遣シ、琉官ニ令シテ該地政事上ニ付時勢適當ノ改革ヲ行ハシム。琉官ハ卽チ其令スル處ニ順テ改革スベキ旨ヲ奉ズ。

從前琉球ニ島津氏ヨリノ負債金五萬圓アリ、今次ノ改革ニ際シ鹿兒島縣ハ特ニ之ヲ棄捐付與シテ琉球士民救恤ノ資ニ充テシム。

先是事四年十一月中ニ係ル琉球ノ屬島八重山島ノ人民六十六人臺灣蕃地ニ漂着ス、其五十四名ハ生蕃ノ爲メニ劫殺セラレ、僅ニ生命ヲ全スル者十二名、清國福州ヨリ琉球ニ歸ルノ船ニ搭シテ歸着セリ。奈良原伊地知ノ二名ハ琉球永ク今般改革ノ命令ヲ背犯セザル受書ヲ領收シ、七月十一日ヲ以テ該地ヲ去リ同十四日鹿兒島ニ着シ、其處分ノ顚末及ビ八重山島人民臺灣蕃地ニ於テ劫殺サレタル事情ヲ具ヘテ縣廳ニ報告セリ。

同月二十七日琉球ノ使臣一行鹿兒島ニ着ス。

同日鹿兒島縣參事大山綱良ハ伊地知貞馨ヲシテ上京セシメ、八重山島人民ノ臺灣蕃地ニ於テ遭害ノ顚末ヲ具狀ス。併セテ上表シテ政府ノ軍艦ヲ借リ問罪ノ師ヲ興シ自ラ蕃地ヲ征シテ群兇ヲ殪シ皇威ヲ海外ニ宣揚センヿヲ乞ヘリ。上表ハ處蕃始末ニアリ

同八月十九日太政官ヨリ外務省ヘ左ノ達アリ。

今般琉球使人攝政三司官三名其他隨從ノ者二十七八人來朝候ニ付於其省萬事可取扱事

但鹿兒島縣付添官員其省官員ニ申付諸事取扱可爲致事

壬申八月十九日　　太政官

琉使接遇ノ儀ニ付太政官ヨリ外務省ヘ諮調セラルヽ旨アリ、外務省ハ琉球素ヨリ本邦ノ屬國ナルヲ以テ外使節トハ例視スベカラズ。唯維新後初度ノ慶賀使ナレバ優渥ノ接遇アリテ然ルベキ旨上答シタリ。廟議之ニ從ヒ總テ外務省ニ委任セラル。先是外務省ハ琉使接遇ノ爲メ愛宕下毛利從五位ノ邸宅ヲ以テ假リニ旅館ト定ム。九月二日正使伊江王子副使宜野灣親方贊議官喜屋武親雲上等鹿兒島縣權參事椎原與右衛門ニ隨ヒ着京ス。外務官員之ヲ旅館ニ延接ス同十二日銕道開業式アリ。

天皇親臨三使臣ハ麝香間詰華族ノ後ニ列シ副車ニ候ス。此日各國公使等祇候ス接待ハ內外ヲ別チ三使臣ハ內部ノ列ニ入リ侍臣ハ異ナルコトナシ

同十四日三使臣參朝隨員ノ內山里親雲上以下十九名ニ拜禮ノ儀式拜觀ヲ許サル、三使臣拜謁琉球國主尙泰ヨリノ上表竝ニ獻品ノ目錄ヲ式部助ニ呈ス式部助表ヲ讀ム其文ニ曰。

恭　惟

皇上登極以來乾綱始張庶政一新黎庶皇恩ニ浴シ歡欣鼓舞セザルナシ尙泰南陬ニ在テ伏シテ盛事ヲ聞キ懽ヲ聞キ懽悖ノ至リニ勝ヘズ同正使尙健副使向有恒贊議官向維新ヲ遣シ謹ンデ朝賀ノ禮ヲ修メ且ツ方物ヲ貢ス伏テ奏聞ヲ乞フ

明治五年壬申七月十九日　　琉球尙泰謹奏

次ニ皇后ニ上ルノ書ヲ披キ讀ム。其文ニ曰、

恭　惟

皇后位ヲ中宮ニ正シ德

至尊ニ配シ天下ノ

母儀トナリ四海日文明ノ域ニ進ミ黎庶生ヲ樂ミ業ニ安ンズ尙泰海陬ニ在テ伏シテ盛事ヲ聞キ懽悖ノ至リニ勝ヘズ今正使尙健副使向有恒贊議官向維新ヲ遣シ謹ンデ慶賀ノ禮ヲ修メ且方物ヲ貢ス伏シテ奏聞ヲ請フ

明治五年壬申七月十九日　　琉球尙泰謹奏

次ニ目錄ヲ奏ス。

貢　獻　目　錄

主上へ

唐　筆

琉球處分提綱

雜纂

唐墨　一箱
唐硯　二方
唐畫午卷　二（劉松年 趙仲穆）
紺地島細上布　十端
紺島細上布　十端
白大綸子　五本
縮緬　十卷（紅 白）
金入龍紋純子　一本
金入龍紋紗　一本
青貝料紙硯箱　一通
燒酎　十壺
右　尙泰ヨリ
皇后宮ヘ
紺地島細上布　五端
紺地細上布　五端

白大綸子　五本
紗綾　十卷（紅 白）
縮緬　十卷（紅 白）
金入龍紋純子　一本
金入龍紋紗　一本
燒酎　五壺
右　尙泰ヨリ

此時勅語

琉球ノ薩摩ニ附庸タル年久シ今維新ノ際ニ會シ上表且方物ヲ獻ズ忠誠無二朕之ヲ嘉納ス

次ニ三使トモ自己ノ獻品目錄ヲ讀ミ式部助ニ呈ス

主上ヘ

紺地島細上布　五端
紺島細上布　五端
島紬　五端
圓金　一本

燒酎　五壺　正使伊江王子ヨリ

右

主上へ

紺地島細上布　三端

紺島細上布　三端

島紬　三端

片金　一本

燒酎　三壺

右

主上へ　副使宜野灣親方ヨリ

紺地島細上布　二端

紺島細上布　二端

島紬　二端

燒酎　二壺

右

贊議官喜屋武親雲上ヨリ

此時使臣ニ勅語アリ。

汝等入朝シ能ク汝ノ主ノ意ヲ奉ジテ失フナシ自ラ方物ヲ献ズ朕深ク嘉納ス

主上冊封ノ詔書ヲ取テ外務卿ニ授ケ給フ外務卿讀ミ畢テ正使ニ傳フ

大日本國璽

朕上天ノ景命ニ膺リ萬世一系ノ帝祚ヲ紹キ奄ニ四海ヲ有チ八荒ニ君臨ス今琉球近ク南服ニ在リ氣類相同ク言文殊ナル無ク世々薩摩ノ附庸タリ而シテ爾尙泰能ク勤誠ヲ致ス宜ク顯爵ヲ預フベシ陞シテ琉球藩主ト爲シ叙メ華族ニ列ス咨爾尙泰其レ藩屏ノ任ヲ重ジ衆庶ノ上ニ立チ切ニ朕ガ意ヲ體シテ永ク皇室ニ輔タレ欽メ哉

明治五年壬申九月十四日

天皇御璽

三使臣尙泰ニ代リ謹テ勅ヲ奉ズル旨ヲ奉ズ

臣健等謹曰ス臣寡君ノ命ヲ奉ジ

琉球處分提綱

天朝ニ入貢ス

聖恩寡君ヲ封シテ藩王ト爲シ且華族ニ班セシム

聖恩重渥恐感ノ至ニ勝ヘズ臣健等代テ詔命ノ辱ヲ拜ス

明治五年壬申九月十四日

正使　尙健
副使　向有恒
賛議官　向維新

次ニ式部助藩王及妃ヘ賜物ノ目錄ヲ宣讀シテ之ヲ授ク

賜物目錄

琉球藩王ヘ

大和錦　五卷
遊獵銃　三挺
鞍鐙　一具

琉球藩王夫人ヘ

大和錦　五卷
七寶燒大花瓶　一双
新製紙敷物　三枚

皇后宮ヨリ賜物目錄

琉球藩王ヘ

金地織天鵞絨　二卷
博多織　三卷
西洋敷物　三卷

卷球藩王夫人ヘ

天鵞絨　五卷
西洋敷物

三使臣之ヲ拜受ス而シテ式部助使臣ヲ傳達所ニ延テ三使ヘ賜物ヲ授ク。

賜物目錄

正使伊江王子ヘ

大和錦　三卷
天鵞絨　三卷
白縮緬　一匹

七寶燒小判形盆　二枚
松島蒔繪文臺硯箱　一組
新貨幣　二百圓

副使宜野灣親方へ

大和錦　三卷
白縮緬　二匹
紅絹　五匹
七寶燒皿　二枚
蒔繪花臺　一箇
新貨幣　百五十圓

贊議官喜屋武親雲上へ

大和錦　二卷
紅絹　五卷
紅白縮緬　二卷
蒔繪料紙硯箱　一組

七寶燒鉢　二枚
新貨幣　百圓

此他隨從ノ者恩賜各差アリ三使臣恩ヲ拜シテ退ク同二十日琉球藩內融通ノ爲メ貨幣三萬圓ヲ賜フ旨左ノ達アリ。

藩內融通ノ爲メ貨幣三萬圓下賜候事

琉球藩王尙泰

壬申九月二十日　太政官

同二十二日三使臣ヘ烏帽子直垂ヲ賜フ、此日天長節ニ當ル、三使臣恩賜ノ裝束ヲ著シ參朝ス殊典ヲ以テ華族ノ席ニ列シ宴ヲ賜フ。

同二十四日三使臣宮內省ヘ參上歸國ノ御暇ヲ乞フ藩王ヘ衣冠ヲ賜フ三使臣亦物ヲ賜フ差アリ。

同二十七日外務省ヨリ同省六等出仕伊地知貞馨ヘ琉球藩在勤ノ命ヲ達ス。

同二十八日先年來琉球藩ニ於テ各國ト取結ビシ條約竝ニ今後外國ト交際ノ事務ハ外務省ニ於テ管轄スル旨左ノ達アリ。

先年來其藩ニ於テ各國ト取結候條約竝今後交際ノ事務外務省ニ於テ管轄候事

琉球藩王尙泰

壬申九月二十八日　太政官

同日又左ノ達アリ。

自今一等官ノ取扱タルベキ旨被仰付候事

壬申九月二十八日　琉球藩王尙泰

同二十九日東京ニ於テ同藩ヘ邸宅ヲ賜ハル旨左ノ達アリ。

東京府下飯田町槇木坂ニ於テ邸宅一圍下賜候事

壬申九月二十九日　琉球藩王尙泰

同十月米國公使ヨリ我ガ外務省ヘ照會書略ニ云、琉球島主ヘ今般辭爵讓位ヲ促サレ、日本帝國中ノ舊諸侯ト同格ナル華族ニ列セラレタル旨ニ付テハ、琉球ハ日本帝國ノ一部トナリタルナリ。然ルニ先年亞米利加合衆國ト琉球國ト取結ビタル規約ヲ自今貴政府ニ於テ維持セラルヽ乎云々、外務卿ハ我政府ニ於テ維持スル旨回答シタリ。往復書ハ處藩始末ニアリ

同二日三使臣東京ヲ發ス。

同十三日琉球藩在勤伊地知貞馨同出張戸籍寮七等出仕根本茂樹同租稅寮ノ官員等東京ヲ發シ鹿兒島ニ於テ琉球使ト會シ、其鹿兒島ニ從來在勤シタル琉官ハ自今引拂フヘキ旨伊地知貞馨ヨリ琉使ニ命ヲ傳フ。

琉球藩

其藩ニ於テ是迄鹿兒島縣ヘ在勤申付置候諸官員自今爲引拂可申將來藩用ノ都合可有之ニ付在來ノ琉館取縮ノ上藏屋敷等ノ名目ニ改メ日用ノ物品相辨スル爲メ下官兩三名爲相詰候儀ハ其藩ノ適宜ニ取計不苦候此段申入候也

壬申十一月十日　外務省

從來琉球藩ヨリ鹿兒島縣ヘ納メタル貢租自今大藏省ヘ上納スヘキ旨鹿兒島縣ニ於テ琉使ニ達ス。

是迄年々鹿兒島縣ヘ爲租稅納候米並砂糖同縣ヨリ其藩在勤ノ者取扱來候處被相廢以來ハ其藩役々ニテ取立直ニ大藏省租稅寮ヘ上納可被致此段申入候也

壬申十一月二十一日　戸籍寮七等出仕　根本茂樹
外務省六等出仕　伊地知貞馨

尙以本文ノ儀鹿兒島縣竝當今其藩ヘ在勤ノ福崎助七ヘモ相達候間爲念申入候也

琉球藩

一、六年三月三日伊地知貞馨等使臣ト共ニ琉球ニ着ス、使臣勅書ヲ藩主尙泰ニ傳ヘテ復命ス、尙泰伊地知貞馨ニ托シテ謝恩ノ表三通ヲ上ツル。其文ニ曰、

謹白尙泰謂ニ正使尙健副使向有恒贊議官向維新ヲ遣シ入貢ス不圖モ藩王華族竝ニ一等官ノ顯爵ヲ賜リ

天恩至渥恐感ノ至ニ勝ヘス爰ニ表跡ヲ具シ謹テ謝恩ノ禮ヲ修ム伏メ

奏聞ヲ請フ

明治六年三月二十八日

琉球藩王尙泰謹奏

謹白尙泰謂ニ正使尙健副使向有恒贊議官向維新ヲ遣シ入貢ス不圖モ數種ノ重品大金及ビ東京府下ヘ邸宅等下シ賜リ寡妾ヘモ珍品ヲ下サレ且尙健等モ

天顏ヲ拜シ陪隨ノ者ニ至リ皆寵惠ヲ蒙ルノヨシ委曲奉承シ

天恩至渥恐感ノ至ニ勝ヘス爰ニ表疏ヲ具シ謹デ謝恩ノ禮ヲ修ム伏メ

奏聞ヲ請フ

明治六年三月二十八日

琉球藩王尙泰謹奏

謹白尙泰謂ニ正使尙健副使向有恒贊議官向維新ヲ遣シ　皇后ヘ獻貢ス辱クモ尙泰及ビ寡妾ヘ數種ノ重品ヲ下シ賜リ且尙健等モ

聖顏ヲ拜シ

寵惠ヲ蒙ルノヨシ委曲奉承シ恐縮ノ至リニ勝ヘス爰ニ表疏ヲ具シ謹テ謝恩ノ禮ヲ修ム伏メ

奏聞ヲ請フ

明治六年三月二十八日

琉球藩王尙泰謹奏

是月琉球ノ屬島久米、宮古、石垣、八表、與那國ノ五島ニ國稱ヲ揭ゲシム左ノ達アリ

琉球藩

海中ノ孤島境界分明ニ無之候ヲハ外國掠奪ノ憂モ難測候間今般其藩ヘ御國旗大中七流御渡相成候條日出ヨリ日沒迄久米、宮古、石垣、八表、與那國五島ノ廳ヘ可揭示尤這回ハ新調被相渡候得共今後破截ノ節ハ藩費ヲ以可致修繕此旨相達候事

外務省

是月琉球ノ內親方一名東京賜邸ニ在勤スヘキ旨左ノ如ク命令シタリ

琉球藩

當年ヨリ東京賜邸ヘ親方一人ヅヽ輪番可相詰候也

明治六年三月十二日　　外務省

是日琉球藩ヘ新律綱領ヲ下付ス。達文左ノ如シ。

琉球藩

刑典御再撰中ニ候間成就ノ上御下渡可相成候得共差向當分ノ律書二部渡置候條刑官右ニ基キ取調可有之左候テ死以上ノ刑ハ司法省ヘ伺ノ上施行可有之候也

明治六年三月十二日　　外務省

同七月三司官浦添親方贊議官大宜味親雲上上京左ノ書ヲ進呈シテ請願スル所アリ。

謹白當藩ヘ清國人漂泊等ノ節取扱向ノ事件舊例ヲ照シ藩廳ノ計ヒヲ以テ施シ行フヲ請フ茲使者三司官向居謙贊議官向嘉勳ヲ遣シ謹ンデ表疏ヲ具ス亘細三司官等ヨリ稟明スベシ特ニ優免ヲ垂レ

聖恩ヲ無涯ニ頂キ奉ランヲ懇願ス伏テ奏聞ヲ請フ

明治六年五月十八日　　琉球藩王尙泰謹奏

三司官ハ左ノ願書ヲ外務省ニ呈ス。

去年當藩屬島八重山島ヘ外國人漂着有之候軍艦大阪丸同島測量ノ爲下着ノ折當地ヘ御列渡相成御在勤之官員衆ヨリ外國人交際向者外務省御管轄ニ候間御出張御應接可被成段御達有之先規ノ通當藩取計ノ方段々申立候得共御採用無之其通御取計相成當五月鹿兒島縣ヘ被指送申候依之願申上候儀恐懼至極奉存候得共當藩ノ儀往古ヨリ支那ヘモ屬シ來リ支那人漂着有之節ハ致介抱福州ヘ可送歸旨往年支那帝命令相成居是迄漂着ノ節ニ當藩計ヲ以テ介抱申付本般破損等ニテ自分ニ歸帆難調者

共ハ支那國ヘノ進貢接貢船便又ハ仕立船ヲ以テ福州ヘ差送且琉人支那漂着ノ節モ其所ノ官向ニ介抱福州琉球館ヘ被送屆近地ノ事故互ニ漂着仕候儀繁々有之件々取計向既ニ支那當藩ノ規模ニ相成居候處支那人漂着ノ節右通御在勤ノ官員衆御取扱相成候テハ命令違背ノ筋ニ成之當藩何トモ難成次第御座候脫體海外不自由ノ孤土全皇國及支那ヲ便立行夫故往古ヨリ御兩國ヲ父母ノ國ト傳承仕藩內一同御尊仰致來候次第ニテ支那國ヘモ先規不取失通融最通

皇國御奉公筋精勤仕度藩王始擧藩深願罷在申事御座候付件々情實

御憐察被成下何卒支那人並同管轄ノ國民共漂著等ノ節々應接其外送屆向旁御在勤ノ官員衆御差圖ヲ請當藩役々ニテ先規通取計候方ニ被仰付被下度奉願候就右藩王願意ノ程使者三司官浦添親方贊議官大宜味親雲上ヲ以テ被申上候間御採用被成下候樣偏奉仰候猶浦添大宜味ヨリ申上筈御座候間何分ニモ可然樣御執成奉願候以上

癸酉五月十八日

外　務　省

御　中

琉球藩三司官
川　平　親　方
琉球藩三司官
宜　野　灣　親　方
同　攝　政
伊　江　王　子

外務省ハ琉球藩王及三司官等ノ請願ニ付大政官ヘ伺ノ上左ノ指令ヲ爲シタリ。

書面伺ノ趣清國人漂流ノ節ハ追テ何分ノ指揮ニ及迄本省在勤ノ官員ヘ時々申立ノ上還送方者舊ニ依リ可取計事

但朝鮮人外外國人者此限ニ非ス

明治六年九月十八日　外務省印

琉球全國ノ處分略定マリタルヲ以テ外務大丞ヨリ琉官ヘ左ノ書面ヲ遞與シタリ。

一、藩王閣下昨年特命ヲ以テ冊封ヲ賜リ永久ノ藩屏ト被仰出候ニ付テハ朝廷ヘ抗衡或ハ殘暴之所業アリテ庶民離散スル等ノ事アルニ非ザルヨリハ廢藩ノ御處置ハ固ヨリ有之間敷候

一、藩王教育向行屆キ刑措數十年之由其任職ヲ不辱感心之事ニ候益庶民愛護永年被致貫徹度事ニ候

一、先年於其藩各國ト取組候條約原書被差出候ニ付向後藩難ヲ釀シ又ハ不爲ニ相成取計ハ決テ無之候

一、佛米蘭之外其藩ニ於テ條約不取結國ト雖朝廷於テ條約既濟之各國船艦其藩內ヘ渡來之節ハ當省ヨリ出張セル官員之指令ニ遵ヒ佛米蘭ト結ヘル條約ニ照準シ厚ク處置可被致候

右ノ件々外務卿副島種臣殿ヨリ致承知候爲ノ心得此段申進候也

明治六年九月二十日

外務六等出仕　伊　地　知　貞　馨　在判
外務大丞　花　房　義　質　在判

伊　江　王　子殿
宜　野　灣　親　方殿
川　平　親　方殿

八月七日琉球藩ヘ琉球藩印銅印一顆ヲ賜フ。

琉球處分提綱

一、七年四月五日陸軍中將西鄕從道ヲ藩地事務都督ニ任シ勅ヲ下シ委スルニ處蕃ノ事宜ヲ以テス、同九日西鄕都督ハ兵ヲ率ヰテ東京ヲ發シ、五月二十二日臺灣島生蕃ノ地ニ達ス。偶々蕃人我ガ兵ヲ狙擊シテ死傷數人アリ、於是西鄕都督牡丹社ヲ擊チ其元兇ヲ斃ス。遂ニ十八社ノ酋長來リ降ルモノ相踵ギ勦撫事理スルニ當リ、清政府俄ニ吳議ヲ生ジタリ。於是政府ハ更ニ參議兼內務卿大久保利通ヲ以テ全權辨理大臣ニ任ジ、清國ヘ派遣シ、此年八月六日ヲ以テ長崎ヲ發ス清國大臣ニ會同シ、務メテ結藩ヲ期セシム。大久保大臣ハ清國大臣ト談判數回遂ニ該政府ハ我ガ生蕃討伐ノ事以テ義擧ナリト認メ、難民撫恤銀十萬兩費銀四十萬兩（テール）ヲ我ガ政府ニ辨償スル事ニ決シ、互ニ條款ヲ換ヘタリ。大久保大臣ハ十一月二十七日ヲ以テ歸京シ西鄕都督ハ十二月二十七日ヲ以凱旋復命ス。詳細ハ載セテ處藩趣旨書ニアリ

同七月琉球藩ヲ以テ內務省ノ管理ニ屬スル旨該藩ヘ左ノ達アリ。

琉球藩

其藩事務自今內務省ニ於テ管理候此旨相達候事

明治七年七月十二日　太政大臣

此月該藩ヘ左ノ達アリ。

琉球藩

臺灣蠻地處分被仰出候御趣旨ノ儀ハ本年第六十五號達書ノ通都督西鄕從道渡蕃ノ後勦撫其所ヲ得往々軍門ニ降服シ卽今殆ト全蕃平定ニ及ヒ曩ニ其藩人民ヲ刼殺致候兇徒ハ專ラ搜索中ニ有之候尙都督率兵在蕃候間橫死ノ類族共彼地ニ就テ遺體ヲ祭度素願モ有之候ハヾ聊無掛念渡蕃可爲致航海船便ノ儀ハ長崎蕃地事務局ヘ可申立此旨相達候事

明治七年七月十七日　太政大臣

同十一月八重山島人民臺灣ニ於テ暴殺セラレタル者ノ髑髏四十四牡丹酋長ヨリ差出シタルヲ以テ鹿兒島在留ノ琉官ニ引渡シタリ。

一、八年三月大久保內務卿ハ在京ノ琉官池域親方與那原親方等ヲ內務省ヘ招キ諭スニ蕃地征討ノ原由清政府ト談判ノ始末及ビ撫恤米若干ヲ遭害ノ難民ニ賜ハル御主意竝ニ蒸汽船一隻ヲ該藩ヘ下シ賜ハル特旨、又該藩人民保護ノ爲メ鎭臺分營設置等ノ廟議アリ、如此厚キ　叡意ニ對シ、藩王ハ速ニ上京謝恩アルベキノ旨意ヲ以テス。琉官等初メ辭スルニ藩主ハ病氣ニテ上京難致、又汽船及ビ撫恤米ノ恩賜竝ニ分營設置等ノ儀ハ清國ヘ對シ辯解ノ道無之等ノ旨ヲ以テセリ。說諭數回ノ後五月初旬ニ至リ琉官等ハ汽船及ビ撫恤米ハ拜受シタレドモ、藩王ノ上京ト分營設置ハ歸藩ノ上藩王ニ告ゲザレバ御受難致旨ヲ申述シタリ。於是大久保內務卿ハ五月八日ヲ以テ前段說諭ノ情狀ヲ

具シ、且ツ分營設立ハ該藩御受ノ有無ニ拘ハラズ御施設相成可然旨、及ビ清國ヘノ朝貢使慶賀使等ヲ廢サセ度ニ付、現今廟議ノ歸スル處ニ據リ標準ヲ立テ施設ノ順序ヲ設度旨上申セリ。政府ハ仍チ其朝貢慶賀使及ビ冊封竝ニ福州ニ在ル琉球館等ヲ廢スベキ事、且ツ藩王ノ謝恩上京竝ニ藩政ノ改革官員派出等ノ件々ハ兼テ許可致シ置キタルニ付キ、着手ノ順序緩急等ハ猶取調更ニ伺出ヅベキ旨指令アリタリ。詳細ハ第一回琉球奉使始末ニアリ

同五月政府ハ琉球藩ノ清國ニ朝貢シ、及ビ代替リニ冊封ヲ受ル等ノ事ヲ禁ズル爲メ、內務大丞松田道之ニ差遣ノ命ヲ下ス。松田大丞ハ着手ノ順序緩急等ヲ取調ベ決ヲ政府ニ取リ、六月十二日該藩吏池城親方與那原親方等ト共ニ東京ヲ發シ七月十日琉球ニ着ス。

同十四月松田大丞ハ其副行タル伊地知貞馨等ト共ニ首里城ニ入リ御達書ヲ渡ス時ニ藩王病氣ノ故ヲ以テ其弟公歸仁王子ヲ代理トス御達書左ノ如シ。

琉　球　藩

其藩ノ儀從來隔年朝貢ト唱ヘ清國ヘ使節ヲ派遣シ或ハ清帝卽位ノ節慶賀使差遣シ候例規有之趣ニ候得共自今被差止候事藩王代替ノ節從前清國ヨリ冊封受ケ來候趣ニ候得共自今被差止候事

右之通可心得此旨相達候事

太政大臣

明治八年五月廿九日

琉　球　藩

一　藩內一般明治ノ年號ヲ奉ジ年中ノ儀禮等總テ御布告ノ通遵行可致事

一　刑法定律ノ通施行可致因テ右取調ノ爲メ擔當ノ者兩三名上京可致事

一　學事修業時情通知ノ爲メ人撰ノ上少壯ノ者十名程上京可致事

右條件ノ通可心得此旨相達候事

明治八年六月三日

太政大臣

琉球藩職制

一藩王　一等官

勅任官トス

一大參事　一員　四等官

一權大參事　一員　五等官

一少參事　二員　六等官

一權少參事　二員　七等官

以上奏任官トス藩議ヲ以テ人撰具狀ノ上宜下アルベシ

琉球處分提綱